

---

# 気まぐれグダグダで流されて

満腹太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気まぐれグダグダで流されて

### 【Nコード】

N1335N

### 【作者名】

満腹太

### 【あらすじ】

不意に死んでしまった主人公の山本二郎。神様から貰ったターミネーターの体とジェダイマスターの能力で異世界生活満喫中。予想外な事に別世界に飛ばされ、気まぐれな言動とピンクな脳でノーブルランで行動していく。

## 第1話（前書き）

初投稿

読みにくてゴメンナサイ

## 第1話

俺の名前は、山本二郎。見た目は某日本人メジャーリーガーの松投手が太った時によく似ているって言われる。早い話がすれ違った人の十人中十人が振り返って友達に似ている人がいるって言われるくらいの何処にでも有りそうな顔だ。

年齢は29歳で営業マンだ。仕事内容は小売店のマネージメント。マネージメントなのに1日の車での走行距離が250キロ超えるって信じられるか？まあ、仕事の愚痴を言っても仕方がない。

そろそろ現状を把握しようかな？

えーっと、運転してたら対向車が突っ込んできたんだよな。それから走馬灯って自分の人生ダイジェスト見て気が付いたら、この真っ白い部屋にいるんだよね。

もうね、訳わからん。だれか説明をして・・・

「ここは、時の狭間。ここは神託を受ける場所。」

って後ろから急に離しかけるな！

「ごめんなさいね。」

え〜っと、空中にテレビ画面が浮いていて中に美人さんが写ってる。

「あら、美人さんって嬉しいわね」

美人さんは綺麗な笑顔で・・・って思った事が通じてる？

「ええ、通じてるわよ。私は一応神様だからね。」

神様？まあ何でもいいから説明してくれよ。

「普通は神様って言われたら疑うか、敬うかするでしょ？」

残念ながら無宗教なもんで・・・

「ふう、まあいいわ。今の貴方は輪廻の輪に入れないの。」

なんで？俺死んだよね？

「死んだのに落ち着いてるわね。詳しく言うと人生ってポイント評価されるの。良い事すると＋１、悪い事すると－１みたいに、程度によって点数違うけどこの点数を元に天国か地獄かが決まるの。」

なるほど、それで俺のポイントは？

「それが、貴方は生まれた時から死ぬまでなぜかポイント計算がされてなくてまだ０点なの。」

じゃあ、俺どうなるの？

「それで貴方の事を上に報告したら4000年振りのイレギュラーらしく前回のイレギュラーと同じ処理をしるって言われたの。」

処理って、デスクワークですか？それに上って？

「まあ、神様って言ってもお役所仕事みたいな物だし、上はもちろん上司よ。」

で、俺はどうなるの？

「ええ、これから異世界に旅立って貰います。そこは剣と魔法の世界。特典として文字と言葉は理解できるようにします。それと希望する能力を3つ付けます。」

どんな願いでもいいの？

「程度によります。妄想愚見化とか無から有を作るのは無理ですね。」

んーちよつと考えるね。

強い体だったら事故つても死ななかつたはずだ。

強い体、って具体的になんだ？

おお、ターミネーターって特殊金属の骨格なら骨折しないよな。

怪我也怖いから強靱な筋肉。いや超回復でもいいや。って考えるとT-Xって最強じゃね？

よし、1つ目はT・Xの能力が欲しい。

「分かったわ。手続きするから2つ目も考えてね。」

よっしゃー！強力な体ゲットだぜ！！

剣と魔法の世界行くんだから、剣技は欲しいね。

強力な剣士。剣、刀、ソード、セイバー・・・セイバー？・・・ラトセイバー！

ジエ イって強力な騎士だよな！

2つ目は、ジエ イで最強の人物と同等の能力が欲しい。

「ジエ イで最強の人物って事は・・・、若き日のマスターヨダね。」

あの緑爺強かったのか・・・

「最後はどうするの？」

ジ ダイならライト ーバー使いたいな。

「ライト ーバーは能力じゃないから出来ないけど、腕の武器にプラズマ砲を応用したソードなら出来るわよ。もちろん両腕にね」

そんな事できるの？

「ええ、肉体改造の一環ですから。」

それならトコトン改造してもらおうかな？

「ええ、いいわよ。」

さっきの両手の剣の他に、高速移動できるようにバーニアと視力にズーム機能とナイトスコープと生体探知機能欲しいな。

「随分欲張りなのね。まってね、申請するから・・・はい、許可下りました。」

許可早いよ、書類読んでるのか？

「責任は上司が持つから気にしないで。それと、能力だけど高速バーニアはエネルギーの消費が激しいから気をつけて。」

エネルギーの消費？

「簡単に言つとお腹が空くのよ。」

なるほど、緊急しか使えないな。

「それでは以上が神託となります。それでは異世界に旅立ってください。」

なんだか神託なのか営業トークなのか良く分からなかったな。

異世界にはどうやって行くんだ？



あれ？だんだん眠くなってきた．．．た．．．

## 第2話

目が覚めた。

視界には土と自分の足が見える。

うん。これは方膝ついて下を向いている状態だな。

まさしく、Tシリーズの登場と一緒。

だけど全裸は簡便してほしいね。

開放感が溢れるほど気持ちいい。いや、その趣味はない筈だ。

とにかく服だ。いや、それよりも状況判断だ。

えーっと、森の中で全裸で1人。

視界の左端に項目が見える。

視界設定

武器設定

メール

ヘルプ

とりあえずヘルプだよな。

ヘルプミーですよ。

あれ？開けない？エラー音する。

メールかな？

新着1件とか笑える。誰が送ったんだ？

題名 神様だよ

本文

着いた？

多分貴方は全裸だと思うけどそのまま街道に出るのは危険よ。  
変質者として捕まるわ。

T-Xの能力通り服とか見た目は想像すると変身できるわ。  
— 応、貴方の今の全裸状態が基本ね。

視界や武器の変更は分かると思うわ。

それと、今の貴方を殺せる者はいないけど、食料取らないでエネルギー切れもあるから十分注意して。

エネルギー切れたら機密保持の為に自爆機能あるから注意してね。文句は受け付けないわよ。

エネルギーは食事からで十分よ。視界の右下の方にE＝100%で表示だから補給のタイミングは間違えないでね。

1日3食で十分よ。エネルギーは30%切ったら加速度的に減っていくから注意してね。

色々あるけど、『習うより慣れろ』って言うよね。Donald・カー スのお母様も言ってたわ。

最後に、貴方は機械では無い。強力な武器も扱い方次第では善にも悪にもなるわ。

自分の心に正直になって正しい道を歩んでね。

『習うより慣れろ』って豚か、紅豚か？

確かに体系は豚だけど・・・

まあ、いいや、気にしない気にしない。

とりあえず服だ。服、服、服・・・

服をイメージ。騎士、武士、戦士、そういうえばサラリーマンの事を企業戦士って言うよね？

って思ったら体が服になった。ただし、スーツでネクタイ姿の。

森の中でスーツって場違いだな。でも全然動きが制限されない。

これならロッククライミングでもできるよ。俺はやんないけど。

服はとりあえず保留で武器チェックするか。

武器も原作通りのプラズマ砲と火炎放射器とエンジンカッター持ってるし追加武器のプラズマソードも問題なく動いた。

でもやっぱり、プラズマソードは感動したね。

刃が無い分早く振れるし大木も真っ二つ。

もう笑いが止まらなかったね。

動きもスムーズだし剣振ってる途中でフォースにも気がついた。

視界に見えないけど感じるんだ。後ろの木から落ちる葉の軌道も理解できた。

これがフォースか。

次はバーニアかな？

視界設定に無いって事はイメージかな？

バーニア、バーニア、バーニア、そういえば昔バツ ス・バーニアってキャラいたよね。

うん、失敗した。体がウサギ人間になった。ん？どうしたもんだろ？

イメージして元の自分と動きやすい服をイメージする。

今度はイメージ通りできた。作務衣とサンダルに。

服はこれでいいや。で、バーニアをチェックしないと。

バーニア、バーニア、バーニア、背中、腰、脹脛に何か変わった感じがする。

触つてみると、空気の排出孔が出てきた。とりあえず上に向かって飛んでみるか？

音も無く上空5メートルまでゆっくり飛んでそのまま空中停止。両足で姿勢と進行方向制御だね。

ってエネルギー使うね。ほんの5分の飛行でエネルギー8%使ったよ。エネルギー効率わるいね。

次は視界チェックかな？

視界のズーム機能は凄いな。これなら500メートル先の犬の背中にいる蚤も狙えるね。

ナイトスコープ機能は明るすぎて使えないね。目の前真っ白になっ

てる。

生体探知機能はっと。

おお！周りにいる生き物が障害物越しに見える。輪郭だけだけど、これは凄い！

結構遠く離れた所も見えるって有効距離どのくらいだ？5キロくらいかな？

とりあえず能力分かったけど、今度は目標だな？主に生きるための行動ね。

まずは飯。最終的には一軒やで美人の嫁さんと退廃的な生活かな？

そうになると、金稼がないとダメだね。どんな仕事あるんだろう？

その前にどこか町に行かないと。

町はどっちだ？

俺の明日もどっちだ？

### 第3話

この体凄いね。

4時間以上歩いたけど全然疲れない。

でも、町に着かない。って街道にも着かない。

何度か高い木に登って回り確認したけど確かにこの方角から煙が見える。

煙があるって事は火がある。火があるって事は人がいるって事だ。

流石俺！自画自賛！IQ85以上はあるぞ！

途中で狼に襲われたが普通に殴ったら死んじゃった。

力一杯狼の顔面殴ったら首から上が吹き飛んだよ。

ボーヒーズも真っ青の怪力。残った体は美味しく頂きました。

火炎放射器のバーベキューで。

それから2時間ほど走って気がついた。

嫌な予感がする。

生体探知を使って周辺の状況を確認する。



前方1キロほどに人がいる。正確な人数は分からないが少数だとわかる。

んゝ人からも嫌な感じがする。

とりあえずゆっくり静かに近づいて様子を見よう。

人まで30メートル。こちらは森の中から様子を探っているが、彼らはどう見ても山賊だね。

無精髭に毛皮の服に不釣り合いな金のネックレス。極め付けが腰に挿した剣。

ここまで山賊スタイルだと逆に褒めて上げなくなるね。

アジトにしている洞窟の前で2人が見張ってるけど、どうやって話しかけよう？

町の場所教えてくれるかな？それとも襲い掛かってくるかな？

まで、良く考えるんだ！人殺しは駄目だ！他に手を考えるんだ！

そうだ！こんな時はフースを使うんだ。フースを使って1人は眠り、もう一人から聞き出す。

それから寝かす。完璧な作戦だな！

それではミッシェンスタート！

普通に歩いて山賊に近づく。

「おい！お前何モンだ！」

男たちは俺に気がつくのと剣を抜いて威嚇してきた。

威嚇されても全然怖くない。なんだか子犬が威嚇しているのを見ているようだ。

「おい！殺っちまえ！」

山賊は俺のニコニコしている態度が気に食わないのか急に襲ってきた。

山賊の剣の軌道は読めるから軽々避ける。2回3回と連続で避ける。

避けながら一人の男に手を向けて眠れと念じる。

男は体が崩れ落ちるように眠った。

眠った男が地面に倒れる前に両手で支え、引き寄せる。

「お前の友人は預かった。無事返して欲しければ町までの道を教える！」

「くそ！！卑怯だぞ！！」

「もう一度聞こう。町まではつぐ!!!!」

人質の胸から槍が生えている。俺の体を貫通して。

「へへへ、油断するからこうなるんだよ!」

油断した!アジトにもいる事を忘れてた。

後ろから槍を刺した男が下品に笑っている。

男は片足で俺の背中を蹴り飛ばして槍を外す。俺は2メートルほど先で倒れた。

胸を突かれた男は俺の隣で目を見開いた状態で絶命していた。

俺の脇腹には直径10センチほどの大きな穴が空いている。

倒れた状態で3秒ほどすると傷が塞がった。液体金属の体に感謝して起き上がる。

「そんな!確かに刺したはずだ!オリハルコンの槍で刺されて、何故生きてやがる!!」

俺は無言で立ち上がり槍を持った男が狼狽している隙に男の手首を掴み一気に握る。

「ぎゃあああああああああ!!!!!!」

俺の手の中で男の手首が砕ける感触がする。気色悪い。

男は槍を手放し蹲っている。もう一人の男は・・・

凄い！遙か遠くに走って逃げてる！あの速度と距離ならメダル狙えるぜ。

逃亡したのは放置して痛がつている男に聞く。

「おい、近くの町はどこだ？ 正直に答えれば殺しはしない。」

答えなくても殺さないけどな。

「・・・西に2時間ほどの場所に村がある。」

「本当か？」

「ああ、本当だが！！！」

男の背中に矢が刺さった。男はそのまま絶命した。

「がははは、外れちゃった！」

100メートル先で一際体格の良い男が叫んでいる。

体格、風貌、仕草、言葉使いから山賊のボスと判断した。

その後ろに20人程の悪人面と3人の若い女性。

？女性？？？

どう見ても近くの村から拉致ってきた感じがする。女性たちは皆暗

い表情していた。

さて、どうしよう？

このまま女性を助けるか？面倒事は無視していくか？

答えは簡単だ。

女性を助けてハーレムエンドだ！

俺は山賊のボスを指差して叫ぶ。

「おい！！その悪党！女性を放せ！そうすれば命だけは助けてやるう！」

「何だと？こっちは20人以上いるんだ！勝てると思っているのか？」

男は俺を指差し叫ぶ。

「野郎供！殺っちまえ！！」

男たちが一斉に襲い掛かってきた。

さあ、女性の皆さん。俺の活躍を見てくださいねーって、誰も見て無いじゃん。

女性たちは顔を当てて俺の死に様を見ないようにしていた！

もうね、やる気半減ですよ。

向かってくる山賊たちの剣を避けながらすれ違う瞬間に剣を持った腕に手刀を当て折っていく。

腕を折られた男たちは剣を落とし戦意喪失している。

「雑魚は全員倒した！残るはお前だけだ！」

「ぐぬぬ！貴様何者だ？」

「俺か？俺は・・・通りすがりの正義の味方だ！」

「舐めやがって！死ね！」

男は大盾を構えて走ってきた。盾で体が隠れていて男の骨を折る事は難しい。

それに盾を死角にして剣で攻撃してくるのもウザイ。

剣の攻撃を避けていると意外なモノが視覚に入った。

それは、こちらを期待で満ちた表情で見ている女性たち。

やる気100%ですよ！ちょっと頑張ってカッコイイ所見せようかな？

## 第4話

連続で剣を避ける。良い立ち位置になる為にひたすら避ける。

ついに絶好の立ち位置に来了。俺と女性たちの間にボスが来る絶好の場所。

ボスは盾を構えながらも剣を何度も振るっていた。

俺は後ろに飛ぶように距離を置いた。右手を後ろで隠す。

ボスは剣を止め再び盾を構えこちらに走ってきた。

この時を待っていた！

俺は右手のプラズマソードで大盾を二つに裂いた。

「ぎゃ 嗚呼あああああああああああ！……！！！」

ボスは盾と一緒に腕を切られて絶叫していた。

切られた箇所が炭化していて神経を刺激しているのだろうか？

ボスは蹲り痛みに耐えている。物凄い汗だ。

「うわあああ！逃げろー！！！！！」

腕を骨折していた山賊たちはボスが倒されると一目散に逃げ出した。

俺は右腕を後ろに回しプラズマソードの柄を腕に収容しながら女性たちに向かって歩き出した。

女性たちの喜びの笑顔を向けながら近づいてくる。

おいおい、俺に惚れると妊娠するぜ。

「ありがとうございます。助かりました。」

「大丈夫か？怪我はないか？」

3人とも20前後でよく見れば整った顔立ちをしている。

そしてなによりも胸が大きい。巨乳万歳。

瞬間にフォーに揺らめきを感じる。後ろから大きなモノが急接近している。

俺には当たらないが右側の女性が当たる。

プラズマソードで落とそうかと思ったが時間が足りない。

俺は右腕を右上に上げた瞬間

ガキーンン！！！！

と、金属同士が衝突する音がした。

右腕にはオリハルコンの槍が刺さっていた。



「くっそ！外したか！！」

後ろでボスが悔しがっている。

「って当たったら危ないだろうが――！！」

これは俺でも怒る。うん。キレた。

腕に刺さった槍を引き抜きボスに向かって投げる。

ドゴ――！！！！

ボスの手前１メートルの狙った場所に着弾！

切れてても冷静な俺ってすばらしい。

ボスは衝撃で森の中に消え去った。

「ふん、無益な殺生はせぬ！」

森に向かって吐き捨てるように言う。

「「「キヤー――！！かっこいい――！！！！」」」

計算どおり！これで俺の高感度は上がった！！

後は町でニャンニャン祭りだ！！！！

「さあ、家まで送りますよ。道中の護衛は任せてください。」

下心200%だが、顔には一切出さずに笑顔で言う。

「傷の手当を先にしましょう。さあ、腕を出してください。」

むむむ、これはどうしよう？

「傷は治りましたから大丈夫です。」

うん。本当に直ってるからね。

「あら、魔道師様だったのね。でも、凄いわ。その若さで強くて魔法の才能があるなんて。」

「本当にそうね。うちの旦那も貴方様みたいに強くて能力があれば出世できるのにね。」

あれ？旦那？？ひょっとして・・・

「も、もしかしてすでにご結婚されているのでしょうか？」

「「「はい」「」」

神は死んだ。俺のピンクの希望を返せ！

「と、とりあえず帰りましょうか？」

俺の心はブレイク寸前ですよ。

「あ、その前にやつらのアジトに行って奪われた物を取り返しな  
よう。」

女性は強いな。

荷車に載せられるだけ載せて西の村に向かった。

荷車を引くのはもちろん俺で女性は前を歩き先導してくれている。

先導よりも世間話しがメインかな？

まあ、既婚者は攻略対象外だ。

それよりもオリハルコンの槍について考査しないと。

金属骨格のほうが硬いが液体金属よりも硬い。

オリハルコン製の武器がどのくらい一般に浸透しているのか？

魔術師もどの程度の能力かは分からないが調べたほうがいいのかも？

とりあえず鳥のから揚げ食いたい。

なんて考えてたら置き去りにされたし、どうしよう？

ああ、夕日が眩しいな。

しばらく進んでいくと村が見えた。

村の入り口には大勢が出迎えていて小心者の俺には注目されるのが苦手だった。

捕まっていた女性の旦那から物凄い感謝を受けた。こっちが引くくらいに。

村長からも感謝の言葉を頂き、報酬としてお金を渡そうとしたが断った。

この村、あまり裕福ではないみたいなので、一晚の宿と明日の朝食、大きな町までの道順が報酬で良い。

と言ったら村長が泣いて感謝してきた。年寄りの爺に泣かれても非常に困るだけなのだが。

感謝されすぎも居心地悪いんでさっさと飯食って寝ようかと思う。

俺って睡眠いるのかな？食ったものは排出されるのかな？

まあ、どうだっていいや。生きている限りそこが天国だ。

#### 第4話（後書き）

今日はここまで。構想は出来ているけど、右手でしか入力できないので更新スピードおそいです。

## 第5話

目が覚めた

「知らない天井・・・いや、村長さんちだ。」

昨日は村長さんの所で寝たんだっけ。

え〜っと、思い出したぞ。

晩飯が村人全員での祝賀会？だったよな。

村長の挨拶から始まって俺の自己紹介。もちろん偽名で。

名前？名前は

エド・フロスト

ゾンビに囲まれてスニキング中でも携帯で話をする デフニート 勇者の名前  
を借りた。

純日本人でエドって呼ばれるのにすごい違和感を感じる。

宴も始まり料理に舌鼓を打っている時に気がついた。

助けた女性達が居なかったな。旦那達もだけど。

きっと、それぞれがニャンニャン祭りなんだろう。

で、酒をかなり飲まされたけど、全然酔えなかつたんだよな。

酒が安物だったのか、酔えない体になったのか？

まあ、どっちでもいいや。

酒は飲みたくないし。

何年か前の飲み会で飲み過ぎて記憶無くして、気がついたら全裸で寝てたんだよな。

自宅のベランダで、コンドーム1箱抱えて。今では語られることのない黒歴史。

話がズレたが、

助けた女性達が居なかったんだよ。目の保養が無くなって残念！

拉致されなかった女性も居たが、やっぱりなーって感じたよ。

彼女には『行かず後家』の称号をあたえよう。どう見ても『朝青』です。

その『シレック』が俺に熱い眼差しを送ってきたから、怖くて怖くて。

視線に気がつかない振りして村長さんと話をしたんだ。

あの山賊は村を何度か襲っていて、王宮に討伐の依頼をお願いしたが断られた。

何度もお願ひしたが、結局だめだった。

ギルドにも頼んだが報酬が低すぎて、誰も助けてくれなかった。

で、俺が女性たちを助けて山賊を壊滅させたから大喜び。

でも、山賊に殺された人もいるようで、何人かは沈んだ表情をしていた。

人々が安心して眠れる世界にしないと。

人の不幸は蜜の味って言うけど、ここまで不幸なら笑えない。

箆笥の角に小指ぶつけたとか、新車に傷がついたなら見ていて楽しいが人の命が掛つてると全然笑えない。

で、考え疲れて眠くなって村長さんの家で眠ることになったんだ。

まあ、昨日の事は忘れよう。昨日よりも今日が大事だ。

このビクの村から北に馬車で半日の所にビックの町があつて、そこから更に北に行くとピロウ城下町に着くそうさ。

村長さんはビックの町までしか行つたことがないそうさ。



ビクの町にはギルドがあるからそこで依頼をして旅費を稼ぐのが良さそうだ。

そうと決まれば行動だ。飯食って、町のギルドでお金ゲット！

って考えてたら村長さんが飯持ってきた。

これ食ったらさっさと行こう。

ビクの村から北に向かってるけど遠いね。

馬車で半日って歩いてどのくらいだ？

まあ、食料も貰ったからゆっくり行きますか。

## 第6話

ビツクの町に着くまでにイロイロ考えてみた。

T・Xって原作だと手をブレード状にしてたけど出来るか試したら、簡単にできた。

鈍器はできるかな？ってハンマーを想像したら簡単にできた。

他の機械を操る時に指を針状にしてたから、俺も試してみた。

うん、フィンガードリルってこんな感じか。

指先かなり細いな。この細さなら糸よりも細いかも。

糸？蜘蛛？スパイーマンか！

手首から糸が飛び出たら面白いな。とりあえず指先から出してみかな。

指先からは簡単に出すことが出来た。でも手首から無理だった。

指先から出た糸は両手の指すべてから出せ、長さはそれぞれ1メートルが限界。

1メートル以内だったら糸が思うままに動いてくれる。

街道の脇にある木に向かって糸を出したまま引っ掻いてみた。

うん。木の輪切りができた。予想よりも強力なモノになったね。

でも、木が輪切りにできる引っ掻きつて南斗水鳥拳だよな。

そんな事思っていたら森の奥に狼発見。1匹だからはぐれ狼かな？

昼飯も食い終わって予備があってもいいや。

とりあえず、腕をブレードにしてサックリ殺りますか。

「うああああ！ばけものだー！！」

見られた？気がつかなかった俺の馬鹿！

「ちよつと待って！！」

俺が叫んで止めようとするが男は馬に乗ったまま地平線の彼方に消えていた。

あっちは町の方角だ。面倒にならなければいいが。

気がついたら狼もないし、ダメダメだね。

しばらくは姿を変えよう。何にしようか？

・・・うん、決まった。某泥棒3世の刀使いで。

刀も作って置けば緊急時にも使えるはずだ。

そう思っている内に変身完了。武器も持ってる。

町に向かって走りますか。ここでチンタラしてたら日が暮れて昇ってまた、暮れちゃう。

走る事3時間、ようやく町が見えてきた。町っていつでも周りが頑丈な石で固められて城壁みたいになっている。

町の入口に門番が2人いる。よく見ると通行証のチェックをしている。

通行証なんて持っていないからどうすんべ。

フォース使うか。フォースは剣の軌道を読むのには使いやすいが催眠は使いたくないね。

なんだか、詐欺してるみたいで。

「ここはビツクの町だ。通行証は持っているか？」

男が2人。俺の前に立っている。俺は右腕を出し2人に向ける。

「俺は通行証を持っている。見せなくてもわかる」

「「あなたは通行証を持っている。見なくてもわかる。」」

「通っても問題ないか？」

「「通っても問題ない。」」

俺は何も言わず過ぎ去る。後ろめたさ200%です。

町の入口で宿を見つけた。今の時間は夕方前だが、宿で休息しようにも金がない。

ギルドに行つて依頼でもするかな？

ギルドの場所どこだ？と、思つたら宿の隣に発見。

ギルドの中に入ると一斉にこちらを見た。怖いよ。

すぐに皆視線が外れたから良かった。脱糞するかと思つた。

中にいる人は老若男女さまざまで、見た目から戦士とわかる者や魔道師の格好もいた。

いろんな人がいるから世界は面白い。

まずは受付で話を聞きましょう。

## 第6話（後書き）

眠くて誤字脱字話の崩壊が発生。  
今日はここまで

## 第7話

ギルド内には幾つもの丸テーブルとイスが並んでいた。

椅子には屈強な男達や男以上の女達が座っていた。

巨乳は巨乳だが大胸筋だよな・・・残念だが俺のストライクゾーンにはカスリもしないぜ。

魔法使い風の老人もいた。気難しそうな顔で眉間にシワを寄せて考え事をしている。

ギルドの受付は中年の男性だった。

メガネを掛けた頭髪は寂しく小太りの口鬚の生えた、任天堂のM男に似ていた。

「すみません。ギルド初心者ですけど説明をお願いしたいんですが・・・」

「はいはい、初回説明ですね、少々お待ち下さい。」

M男は席を立ちあがり奥へと消えていった。しばらく待つと女性と供に帰ってきた。

「初回説明をいたしますので、こちらへ。」

案内されたのはギルドの奥の個室。

向かいに座るギルドの女性は30年まえのシャロン・ストーンによく似ていた。

胸はないが・・・

「では、説明します。ここギルドでは護衛、討伐、配達、採掘、など多種の依頼があります。

もちろん報酬は討伐や護衛が高くなります。命掛けますからね。」

「まるで、命をチップに大金を得るか・・・」

「言い方を悪くすればそうですね。登録の仕方について説明をします。」

そう言って出されたのは直径3センチほどの青いガラス玉と1冊のメモ帳。

「メモ帳の2ページめに貴方の名前を記入ください。偽名、本名は問いません。」

名前を書く『 エド・フロスト 』

名前を書き終わると女性がガラス玉をメモ帳の上に置き何かを呟いた。

ガラス玉は鈍く光りながら色を赤く変えた。赤いガラス玉の中には自分の名前が浮いている。

「このガラス玉はあなたが生きている事を証明する為のものです。



あなたがもし病死やクエストの失敗で死亡された時に、このガラス玉は赤から青に変わります。」

これが生死の確認するものか、死体はそのまま放置か？

「もしドラゴン退治で全滅したら、誰も死亡確認にいきませんしね。」

まあ、確かに正論だな。

「ギルドではランク付けしてそれぞれの能力の差別化をしています。

最初はF、E、D、C、B、A、S、SSで上がって行きます。一定評価でランクが上がり、ランクが上がれば武器防具屋で金額の優遇があります。」

もちろん高ランカーほど優遇されます。」

俺、武器防具要らないよな？

「次に依頼、クエストの説明です。ギルドは基本的には仲介しかしません。」

依頼を受けたらギルド証書の3ページ目にギルド職員が魔法のペンで依頼内容を記入します。」

依頼人に会い、依頼内容を達成した場合依頼人から終了証明書を貰いギルドで内容確認します。」

未達、失敗の場合も同じ手順です。逃亡、死亡の場合は依頼人から失敗の証明書が来る場合もあります。

一度受けた依頼はキャンセルもできますが評価が下がります。破棄の場合はキャンセル料貰いますが・・・

依頼の終了か破棄で魔法のペンで記入したものを消去します。」

言外にキャンセルするな！って聞こえるんだけど・・・

「最後に討伐ですね。依頼討伐で山賊やつつけたりもあります。

基本は魔物退治です。退治すると証書に討伐魔物名と討伐数が自動記入されます。

それをギルドで見せて報酬をもらいます。魔物ごとに報酬額が違います。

また、パーティーを組む場合はパーティー登録の必要がありますので注意してください。」

ふむ、サーチ&デストロイで報酬もらえるのか。

「以上で初回説明を終了させていただきます。不明な点はお近くのギルド員にお尋ねください。」

長い説明だったな。とりあえず依頼で簡単なものないか探そうかな？

## 第7話（後書き）

腹痛い

トイレと自室の

往復リレー

## 第8話

ギルド証書を片手に依頼のある掲示板を見ているが、ロクなのがない。

迷子の犬の搜索、庭の草むしり、部屋の模様替えの手伝い・・・

子供のお手伝いかよ・・・

「おい、お前！」

呼ばれて後ろを向くと、屈強な鎧姿の男と華奢だが悪知恵の働きそうな小男がいた。

「お前、東方の剣士だろ？俺のパーティーに入れてやる。」

命令ですか？

「あゝ、パーティーはご遠慮します。」

どうせ誘われるなら女性がいいな。

「デメエ、俺様が誘ってるのに断るのか？」

「いえ、あなたがだ誰でどの位の实力を持っているのか知りませんし・・・」

「俺はこの町の町長の息子のアッシュだ。ランクはDだ。」

うん、どうでもいい。興味ないし、俺の計画（おっぱいがいっぱい計画）には邪魔でしかない。

「だから、有り難くパーティーに入れ。」

「いや、御断りしますって。」

断わってるの理解できないのか？

「もう一度だけ言っぞ、パーティーに入れ。」

流石にしつこい！俺も怒るぞ！

「いいですか、こんなに断わってるのが理解できないんですか？貴方の頭の中はカラッポですか？」

「テメエ、俺にそんな口のきき方してただで済むと思ってるのか？」

「知るかボケ！テメエなんざ足元に転がる小石よりも劣っている！」

「後悔するなよ！！！」

「結構、結構。ケツコウ毛だらけ猫灰だらけ、きさまのケツはクソだらけ！」

「なにをーーーー！！！！！」

激昂するアッシュが腰にある剣を抜いた瞬間！

「ばいばいきーーーーん！」

俺はギルドから逃走した。が、後ろから追いかけて来るのが気配でわかる。

気配っていうか、止まれー、待てーって叫んでる。

走ること数十分、後ろの気配が無くなった。

俺全力で走ってるし、振り切るのも想定内ですよ。

さて、町中を走りまわったの軽く迷子状態。気がつけば西門にいる。

時間は夕暮れ、門に入ってくる人ばかりだ。

俺は門の外に出ようとしたところで、門番に止められた。

門番に止められはしたが、所持金ゼロでアッシュに因縁付けられていると言ったら通してくれた。

所持金ゼロで同情されたか、アッシュの日頃の行いの所為なのか・

・  
そういえば、ギルド証書が通行所代わりになると教えてくれた。

そのまま西門を出て暫く歩くと森が見えてきた。

森に着くころには日が沈んでいた。

俺は刀を抜き視界をナイトスコープモードに切り替えて森の中を進んでいった。

今日は徹夜で狩りかな？何か魔物捕えて晩飯代わりにしないとな．．

オリハルコン製の武器の調査と魔法も調べないと．．．

なんて考えながら魔物を狩っていく。

ここまでで何度も倒した狼、１メートル以上あるトカゲ、大きなコウモリ、角付きのウサギを考え事をしながら倒していた。

俺の事を『東方の剣士』なんて言うのは日本に良く似た国があるのかも。

こっちに来てから山賊に襲われるし、バカ息子に追いかけられるし．．俺の運で最低なのかな．．．

倒した魔物は300を超え始めた。

おっぱいはボヨンでボインボインなのです。

おっぱいのサイズとくびれの黄金比を求める公式は．．．

頭の中がピンク色になった頃に日が昇り始めた。

そろそろ町に戻ろうかな？肉じゃない料理食べたいし。

## 第8話（後書き）

不定期更新になるかも



## 第9話

日が昇り始めたので町に戻る。狩りで深追い過ぎたので軽く迷子。

魔物の死骸で出来た道を引き返し森の入口に戻る。正直に狩りすぎたと思う。

この森の魔物絶滅したんじゃないかな？まあ、どうでもいいか・・・

無双してたけど、ゲームと違うね。死体残っててグロイ・・・

それに返り血も凄かった。川で水浴びしたけど全然落ちない。

刀も血糊が落ちなかった。まあ、そのうち落ちるだろう。

そんなこんなで、町に着いた。

ギルド証書を提示して町に入る。ギルドに向かい討伐報酬貰わないと。

金が無いと何にもできないしからね。

ギルドの中に入ると一斉にこちらを見た。またかよ。

すぐに皆視線が外れた。これってお約束ですか？

受付には昨日の説明をしてくれた貧乳美女がいた。

「こんにちわ、討伐の報酬を貰いに来たんですけど・・・。」

ギルド証書をカウンターの上に置いて爽やかさ120%増の笑顔で話す。

美人に好かれるならプライドなんて丸めてポイですよ。

「はい、お預かりします。……え？……あれ？……こんなになん？……」

やっぱり驚いてるね。証書と俺を何度も見比べている。

奥にいた男の所員が異変に気がついて俺の証書を見て驚いている。

気になった事を聞いてみる。

「この討伐記録は偽造できるの？」

「い……いいえ。魔物を倒すとその魔物から僅かながら魔力が放出されるの。」

魔物毎に倒された時に放出される魔力の差があつて、この証書はそれに反応して書き込まれるの。

絶対に改ざんできないわ。」

なるほど。よくわからん。

男の所員が証書を受け取り奥に持っていった。

「で、報酬はどのくらいになるの？」

「え〜と、待ってください。奥で集計してますので。

それに、こんなに多いのきつと初めてだと思います……。たった一晩で500を超える討伐って初めてです！

あなた、何者ですか？もしかして、どこかの親衛隊とか勇者じゃないんですか？」

「知りたい？」

「はい！是非お願いします。」

「今度ベットの上で教えてあげるよ。」

女性は返答に困ってる。困ってる美人の顔も素敵だ。なんて言ったら殴られるかも。

そうしている内に奥から男が証書を手に戻ってきた。

女性に証書を渡すと元の席に戻って行った。

「お待たせしました。今回の討伐報酬は17875エイです。」

エイって通貨単位だね。

「大金ですのでギルドに預ける事もできますよ。」

「預ける？」

「はい、ギルドは銀行も兼ねてます。1エイからお預かりしています。

お預かり金額はギルド証書に魔法で書き込みますので改ざんできません。

また、買い物の際にギルド証書があれば引き落としもできます。

手数料が掛かりますが・・・

万が一残金が足りない場合は即座にギルド所員が赴き足りない分の金額相当の品を回収させていただきます。」

ギルド証書は便利だな。身分証にパーティー登録状況、依頼確認、討伐数確認とクレジットカード。

・・・ギルド証書無くしたら一大事だな・・・

「もし、ギルド証書を紛失しても再発行できます。内容は紛失前と同じ記録でお渡ししています。」

ギルド登録の際、記録の水晶に登録しましたが、あれはあなたの命の輝きとギルド証書の3つでリンクした状態になります。

ギルド証書が盗難されてもいのちの輝きが違いますのでお金の引き落としや討伐報酬は貰えないようになっていきます。」

安全な様だしお願いしようかな？

「それならお願いします。それと武器屋はドコにあります?」

オリハルコンの武器調べないと・・・

「ギルドを出て左に向って右側に見えてきます。それと、アッシュさんがあなたの事を探してましたよ？」

町の揉め事の8割があの人関係なの、それにあの方は力だけはあるから気をつけてね。」

「ありがとう、アッシュとあつたら走って逃げるよ。」

笑顔120%で答えてギルドを去った。

武器屋には面白い武器あるかな？

電動鋸とかあったら迷わず買うね、チェインソーは漢のロマンってホッケーマスクの人が言ってたし。

言っていないし、彼は一度も使っていないな。

## 第10話

武器屋に行く途中で横道に逸れる。正面からアッシュがこちらに向かっていた。

面倒事はノーサンキューです。人気の無い道を進んでいく。

同時に視界の生体探知機能を使い周りに人がいない事を確認しながら移動する。

人気のない袋小路発見。周りに誰もいないし、道壁が入り組んでいて何所からも俺を視認する事はできない。

ここで変身する。元の自分の姿で日本の甲冑姿。源義経の甲冑。牛若丸の方が有名かな？

鹿児島の甲冑製作会社が作った物をイメージした。顔を守る面頬が無い状態で。

腰には野太刀が1本。鞘の長さが190センチなのに腰に刺してあり非常に邪魔。

歩いていると人の邪魔になるのは判っているから背中に背負い直そう。

これで今までの俺とはオサラバだ。

早急にこの町から出ないと。エド・フロストが急に違う顔になったなんて知れたら面倒だ。

武器屋に行つて情報を集めるかな？

エネルギー残量は問題ないけど昼に近い時間なんでとりあえず昼食かな？

武器屋の隣に定食屋発見！店構え、看板、雰囲気、どれを見ても定食屋にしか見えない。

店に入ると結構混んでいたが、すぐ席に案内された。

ウェイトレスの女性のバストは大きかった。ウエストも同じくらいに。

俺の理想はボンキュッボンのダイナマイトボディだ。

残念ながら彼女は俺のストライクゾーンからボール468個分だけ外れている。

無駄な考えしていると4人席に案内された。今はこの席しか開いてない様だ。

とりあえず席に着いて今日のおススメ定食を頼む。異世界料理って普通に楽しみだ。

料理を待つ間にこれからの事を考える。

お金を稼ぐのは討伐で十分。パーティーは組まないでいく。能力の事ばれたら面倒だから。

オリハルコンの武器と魔法調査。この町から早急な移動・・・

「お兄さん、合席いいかい？」

「ああ、良いよ。」

そう言って連れてきたのは3人の女性。3人とも身長が160センチ程で20才前かどこか幼さが残る印象があった。

1人目は鉄の鎧を着た2本の剣を腰に刺している釣り目が印象的な女性。髪型は兜で分らないが、サイズはBとスカウターが示している。

2人目は弓と矢を背負った動きやすそうな鎧をきた知的な印象のポニーテールの女性。サイズはDだと？なんて戦闘力してやがる！

3人目は身長ほどの杖を持ったローブ姿の笑顔な女性。戦闘力は・・・Fだと？クツ！スカウターが壊れやがった！！

3人は席に着くと俺に話しかけてきた。

「あなた、変わった鎧ね？」

Bサイズが話しかけてきた。

「まあね、遠い所から来たんだ。」

実際に世界の壁の向こうから来ました。

「へえ、あたしはマリア、マリア・フォーベン。戦士でランクD。」



「わたしは、エリーナ・カット。見ての通り弓使いよ。ランクDね。」

「私は、アルミブレッディアーノンロロカリーニフォンデン・ヨロン。アルミって呼んで。」

それと自己紹介の度に長い名前を付けた両親に殺意を抱くわ。あとランクDの魔道師よ。」

3人パーティーで良い構成をしている。

「俺はエド・フロスト。まあ、東の方の異国の剣士だと思ってくれ。自由気ままな旅をしている。」

ランクは・・・ちょっと待って確認するから」

ギルド証書を懐から出し確認する。

「・・・どうやらCらしい。」

シリアスに言ってみる。

「どうやらって、自分のランクも覚えてないの?」

マリアが突っ込んでくる。良いツツコミだ。

「どうやら先ほどランクアップしたらしい。」

「ランクアップしたならその場で教えてくれるわよ?聞いてなかった

たの？」

エリーナが聞いてくる。一人大討伐だったし、ギルド銀行の説明があったからギルド所員の言い忘れも仕方ないかも。

「エドはこれからどうするの？」

アルミが笑顔で聞いてくる。

「うん、そろそろ違う町に行こうかと思う。何所に行こうか考えてた。」

「そうね、この辺だとランクCまでしか上がらないからね。」

エリーナって物知りだな・・・知的な巨乳美人に罵られるのも悪くないかも・・・

ピンクな妄想に突入しそうな時に4人分の料理が運ばれてきた。

昼食中は彼女達の話聞いた。彼女達の生まれた町。学生生活。魔族の襲来で町の崩壊。

マリアは両親を殺され、エリーナは恋人を殺され、アルミは妹を殺された。そして魔族への復讐の為のギルド登録。

そして、ギルドで経験と実績を積んでいる最中と。

俺は気になった事を聞いてみた。

『魔族』

人間と敵対している。知性と高い魔力を持った魔物。

何所から来ているか分からないが人間を虐殺しに現れる。

少なくともランクBが10人いないと魔族1体を倒せない。

### 『魔力』

この世界で生まれた者が持つ魔法を使う為の力。

人間も持ち、高い魔力を持つ物は魔道師になり、王宮魔術師隊から街の防衛隊まで各所に高待遇で配属されている。

### 『魔法』

火、水、土、風、人の5つの基本属性がある。

ファイヤ、アクア、アース、ウインドは攻撃魔法に分類される。

〜〜・アロー、各属性の矢を放つ。

〜〜・バースト、各属性の範囲攻撃用爆発魔法。

〜〜・シールド、各属性の魔法の盾。

人は個人の能力向上や治療魔法。魔道師の中でも最も優遇される。

基本は1人1属性。2属性以上使えるものは、魔道師10人に1人ぐらい。

3属性は2属性以上使える魔道師10人に1人ぐらい。

4属性は3属性以上使える魔道師100人に1人ぐらい。

5属性は4属性以上使える魔道師1000人に1人ぐらい。

予想外な場所で魔法講座が聞けてラッキー。5つの要素ってフィフス・エレメントか？

ついでにオリハルコンの事を聞いたが分らなかった。

まあ、ここまで情報が聞けたならオツケーかな？

「エドさんは、異国からきたから魔法学校で教えてくれることも知らないのは仕方ないですね。」

魔法で分からない事があれば何でも聞いて下さい。」

アルミがデカイ胸を強調する様に胸を張る。

あのおっぱいに潰されるのも悪くないかも。

## 第11話

4人とも食事が終わった。普通においしかった。

見た目ハンバーグで味もハンバーグ。食べたメニューはハンバーグ定食。

彼女達はこのあとどうするんだろう？おっぱいの行く先が気になる。

「君たちはこのあとの予定は？」

「わたしとアルミはギルドの依頼で行動よ。」

マリアが凜として答えるが口元にソースが付いていて微笑ましい。

「マリア口元拭いて。わたしは城下町のギルドに配達のお仕事。昼過ぎに乗り合い馬車で行く予定よ。」

エリーナがマリアの口元を指摘する。

「その乗合馬車だと城下町までどの位の日数が掛るんだ？」

「馬車で3日よ。だけど、料金が高いわよ。なんと3000エイよ。高すぎる訳は魔法で魔物の嫌う臭いを放つのよ。」

人間は感じる事が出来ないから値段が高い分安全で快適な旅になるわ。」

マリアが口元を拭くと口元のソースの存在を誤魔化すように強い口

調で言った。

「俺も一緒に行こうかな？それに・・・俺は俺よりも強い奴に会いに行く。」

「「「はあ？」「」」

3人とも目が点になっている。

「冗談だよ、城下町って事は城があるんだろ？一度見てみたかったんだよな。」

日本の城は見た事あるが、西洋風の城はシ　デレラ城しか見たことない。

「王族にも会えませんし、城の中には入れませんよ？それでも良いんですか？」

エリーナが冷静に返してくる。

本当の目的はこの町から出る事だからそれでも良いんです。

「ああ、大丈夫。眺めるだけで満足だ。で、いつ出発するんだ？」

「そろそろ向かおうかな？、エドさんは準備大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、向かおう」

ギルド証書で支払をして定食屋のまえでマリアとアルの2人と別れた。

武器屋でオリハルコンの情報を聞きたかったが時間の猶予はないようだ。

エリーナの後を追い停留所まで向かった。

途中でアッシュとすれ違ったが声を掛けられる事なく通り過ぎた。

何事もなく停留所に着き馬車の前にいた男に3000エィをギルド証書で支払った。

幌の付いた馬車に乗り込むと3人の先客がいた。

男の戦士2人と商人のような肥えた男だった。

戦士達は此方を一目見ると無言で手を上げて挨拶してきたので、こちらと同じように無言で手を上げて返事をした。

俺とエリーナは彼らとは少し離れた場所に座った。

そして、馬車が動き始めた。馬を操る従者と重装備の鎧の戦士が前方に座っている。

ゆつくりと、車とは違う風情を感じながら進んでいった。

魔物に襲われる事が無いのって楽でいいや。

馬車に揺られる震動が気持ちいい。眠くなてくる……

「…………え…………ねえ…起きて…………」

体が揺すられる感覚で目が覚めた。気がつくと周りは真っ暗。

エリーナが前かがみになって俺を揺すっていた。

こんな時におっぱいを強調されると視線釘付けですよ。

頭を振って起き上がる。変態と呼ばれるのはベットの上だけで十分だ。

「やっと起きた。今日はここでキャンプよ。食事の準備が済んでるから食べましょう。」

エリーナは俺が起きるのを確認するとキャンプ地の焚火の方に向かって行った。

女性に起こされるのも悪くないな。

エリーナに着いて行き食事にする。スープとパンとサラダのみ。

キャンプなので質素なのは仕方ないか……

食事が終わり星を眺めていた。

日本では見る事が出来ない量の星空。



考えてしまっ。

家族、友人、みんな元気でやついるだろうか？家族は保険金でウハ  
ウハかな？

あれ？気が付くと周りの皆は寝てるじゃん。あ、一人起きてる。

重装備の鎧の戦士が起きていた。見張りか・・・

寝過ぎたんで眠れないし、見張り替わるかな・・・

それにもう一度ナイトスコープ、生体探知機能に慣れなければこの  
先何が起きるか分からない。

俺は見張り番を代わりナイトスコープを起動した。

辺りを見まわして見る。街道沿いの大きな更地。遠くに森が見える。

スコープ機能で倍率を上げる。うん、何もない。

生体探知機能を起動する。辺りは夜の闇に包まれた。

馬車の中で寝ているエリーナの様子が見える。輪郭のみだが寝てい  
る体勢がわかる。

そのまま辺りを見回すが虫がいるだけで後は何もいない。

虫って邪魔だな。地面が虫だらけで気色悪い。

視界設定で小型の昆虫はセンサー対象外に設定して・・・っと。

もしかして、左右の目でそれぞれ設定できるのかな？

そうすれば夜の闇に紛れての襲撃も回避できるかも。

って出来ちゃったよ。でも両目で違うもの見るって疲れるな。

まあ、夜間緊急警戒時しか使わないよな。

そのまま辺りを見まわしても何も反応が・・・あつた！！

こちらに向かってくる3メートルの大きな頭が豚の亜人。

人の身長程の棍棒を持っている。どうみても言語が通じるとは思えない。

殺るか・・・

距離およそ5000メートル。

こちらの周囲5キロ以内に他に敵がいらない。

俺は他の人が寝ているのを確認すると亜人に向かって屈みながら移動を開始した。

距離およそ400メートル。

ここまで接近しているが亜人はこちらに気が付いていない。

距離およそ100メートル。

まだこちらに気がついていない。

腕をプラズマ砲に変え狙いを定める。

亜人はこちらに気がつかないまま30メートル先をこちらに向かってきている。

構えて心で引き金を引く。

亜人は上半身が無くなりその場に音もなく倒れた。

ギルド証書には『オーク』×1と記入されていた。

ギルド証書に全魔物乗せるのも面白いかも。ポ モンみたいで・・・

そのままキャンプ地に戻り警戒を続けた。

俺がまだ見ぬ彼女へ捧げる愛の詩集、第4刊目が脳内で作成される頃には朝日が昇り始めた。

馬車の従者が起きだして朝食を作る。

昨日の残りのスープを温めたモノとパンだ。

・・・まあ、キャンプだし質素な食事も仕方ないか。

皆も起きだしてきた。エリーナは半分眠りながらも食事をしている。無防備な顔も魅力的だな。おっぱい大きいし。

明日には城下町に着くんだ。そうすればきつと夜の歓楽街もあるはずだ。

そこまで我慢だ。

俺は食事を済ませ先に馬車へと戻って行った。正直眠い。

昼まで仮眠しようかな？

## 第12話

目が覚めた。

「知らない天井だ、いや壁か・・・って、ここどこ？」

辺りを見回すと10畳ほどのレンガで造られた部屋にいた。

両腕を後ろ側で金属の手錠で拘束されている、片足にも金属の輪が付けられていて鎖で壁と繋がっている。

正面にはエリーナも同じように拘束されて横になっている。

「山賊に襲われたのよ。エドさん寝てるし、多勢に無勢だから大人しく捕まったの。」

山賊？エンカウント率高くないですか？

「他の人は？」

「・・・従者と護衛が矢で倒されて、戦士2人も商人を逃がそうと戦ったけどダメだったわ。」

エドさん起してる内に囲まれたから降参したの。それから武器を取られてココに連れて来られたわ。」

エリーナが不安な表情で言う。

ちくしょう！彼らには罪がないのに！！

「それで、商人はどこ行つた？」

「ここに来てすぐに違つ部屋に連れていかれたわ。もしかしたら彼が目的なのかもしれないわ。」

「とりあえず、彼を助けるか・・・」

正直、目立ちたくないんだけど降りかかる火の粉は振り払わないと。

「助けるつて、どうやって助けるの？拘束されてて手も足もでないわよ。」

エリーナが半分諦めたように聞いてくる。

「えーっと、こうやるんです！」

強引に手錠を壊した。そのまま足に付けられた金属の輪も手で千切る。

「エ、エドさん！」

俺は急いでエリーナに近づき手で口を押さえる。ここで騒がれると面倒だ。

「いいかエリーナ、俺の手錠は壊れていたんだ。足の拘束具もな。わかるか？」

エリーナが首を縦に振る。

「よく見るとエリーナの手錠も壊れかけているな。俺が外してやろう。」

エリーナの手錠と足の拘束具も壊す。エリーナは茫然としている。

「エリーナ、手錠は最初から壊れていたんだ。って聞いてる？」

エリーナの正面から問いかけるが、反応がない。

肩を持って揺すっても反応がない。

揺らす

揺れる

揺れるおっぱい

おっ  
ぱい

「おっばい！」

おっぱいを鷺掴みする。

•  
•  
•

•

•

•

•  
•  
•

「キヤ――――！！！」

エリーナが俺を殴り倒した。

へへ、良いパンチ持ってたんじゃないかよ、世界を狙えるぜロツ！。

「なにするんですか！エドさん！」

「これには深い訳が！」

「うるせーよ！何やって・・・」

山賊が1人ドアを開けて入ってきた。

エリーナと俺は山賊を見ている。

山賊はエリーナとエリーナのおっぱいを掴んでいる俺を見ている。

「てめっ！ツガ！」

俺は咄嗟に腕を山賊が開いた扉に向けフォースを使いドアを勢い良く締めた。

山賊がドアに挟まり怯んだ隙に近づき力一杯顔を殴った。

山賊の口から上が無くなってしまった。うん、やりすぎた。

そして、グロい。Z指定なんて目じゃないくらいグロい。

なんか罪悪感が湧かないんだが・・・まあ、いいや。



とりあえず、人質救出と武器の奪還か。

「エドさん、あなたは一体・・・」

「今は人質の救出が最優先だ。武器の奪還も必須だ。行くぞ、エリーナ。」

俺はそのまま部屋を出て行った。

「ま、待って下さい。」

部屋を出てすぐに生体探知モードに変更した。レンガで造られた2階建の洋館か・・・

おまけに森の中か・・・ゾンビ研究でもしてるのか？

建物内にはエリーナを抜かして15人の人間がいる。そのうち1人は商人だろう。

・・・と商人発見。1人だけ特殊な体系だから分かりやすかったな。

その部屋には他に4人の人間がいる。まずは他の山賊を戦闘不能にしていこう。

しかし、壁の向こう側にいる人が見えるから楽でいいや。

近づいてきたら誰もいない部屋に入ってやり過ごして、後ろから奇襲してしら速効で戦闘不能にしたり、

でも驚いた、マンガとかで首の後ろを叩いて気絶させるのやってみたら、

首が落ちた。俺の手刀はエクス リバーか？

途中で俺達の武器も発見した。

エリーナは俺の後ろで驚きっぱなしだったが、武器を奪還してから援護してくれるようになった。

なんだかんだで、商人と同じ部屋にいる山賊4人以外は戦闘不能にした。

さて、ここからどうする？商人に剣を向けているから下手に突撃したら彼が危険だ。

しばらく考えたが名案が浮かばない。エリーナも一か八かの賭けの案しか出なかった。

・・・しかたない。あれ使うか。

「エリーナ、ここは俺に任せて馬車の準備をしてきてくれないか？」

「でも、彼を救出しなければ・・・」

「大丈夫、名案が浮かんだ。彼を助けて直ぐに逃げるから先に準備をして入口で待っていてほしい。」

渋るエリーナを何とか納得させて俺だけが部屋の前に残った。

生体探知モードでエリーナが馬車の準備をしに厩舎に向かうのを確認する。ついでに周囲を確認する。

おっと、山賊1人が意識ある状態でこちらを見ている。仕方ないが、彼には眠っていて貰おう。

優しく彼の顔を殴り昏倒させる。今の俺って体中から優しさがあふれ出ているな。

なぜかって？それは山賊を懲らしめている最中にエリーナの胸が肌蹴て桜色のボタンが見えたからさ。

エリーナも厩舎で準備してるし、手遅れにならないうちに商人を救出しようかな？

作戦は簡単だ。プラズマ砲で部屋の外から一気にせん滅。

4人同時に倒せば商人は無事。うん、簡単だ。

部屋の周りをゆっくり回る。商人が部屋の中央にいるので慎重にいかない。

右腕をプラズマ砲に変え4人が一列に並ぶ場所を探す。

3人並んでいるが、どうしても4人目が揃わない。3人は入るが4人めは無理だ。

商人に剣を突き付けている男、入口の男、商人の後ろ側にいる男を照準に入れる。

残ったのは入口の反対側にいる男。

こいつはプラズマ砲で空いた壁から俺の野太刀を投げれば良いか。

左手に野太刀を持ち準備をする。

深呼吸。 1回、2回、3回。

プラズマ砲を放つ。 山賊3人は上半身、首、頭が無くなり崩れ落ちた。

残りの1人も驚いたままの顔で眉間に野太刀が刺さって絶命した。

商人は最初から気絶していたのでこれで目撃者ゼロ。

腕を元に戻し、野太刀を回収。 商人を肩に担いで屋敷の入口に戻る。

絶好のタイミングでエリーナが現れた。 馬は違うが俺達の乗っていた馬車だ。

商人をゆっくりと荷台に寝かせるとエリーナが馬車を走らせた。

商人は殴られて怪我をしているが、命の危険はなさそうだ。

しばらく走ると街道に出た。 これで安全かな？

「エドさん、ちょっといいですか？」

しまった、エリーナを忘れてた。 どうやって言いくるめようかな？

俺はエリーナの後ろに腰をおろした。エリーナはまだ自分の胸の状態を理解していないようだ。

ドジっ子で知的なツツコミはクルものがあるね。下半身的な意味で。

「エドさん、あなたの正体を教えてください。」

「はつきり聞くな。んゝちょっと答えられないな。」

転生者で異能力なんて知れたら大騒ぎになるしね。

「どうしてもダメですか？」

「ああ、教える事はできない。」

「そうですか・・・」

落ち込むエリーナか・・・ちょっと可哀そうかな？

「ちょっとだけ俺の事を話してあげようか。」

「エドさんの事？」

「ああ、今から話す俺の正体はデタラメかもしれないし、本当かもしれない。それでも聞く？」

「ええ。」

「実は俺、未来から来た殺人機械なんだ。この皮膚の下には金属の骨があつて頑丈なんだ。つてのが1つ目。」

2つ目は、遠い遠いはるか星の向こうにある国の有名な時代を代表するような騎士だった。

3つ目は、流れ星が頭上に流れたときにだけ奇跡を起こすことができる異国の王子様だった。

4つ目は、5000年前に神の力で封印されたサソリの王が今ここに復活したのだった。

5つ目は、選ばれた王に成る者だけが抜ける剣を抜いてしまい、魔法使いの教えで偉大な王になった。

そして祖国の危機に立ちあがったのだった。

6つ目は、えーっと考えるからちょっと待ってね。」

「全部嘘じゃないですか？最初に会った時に東から来たって言ったじゃないですか？」

「あれ？そうだったけ？・・・エリーナ、気が付いてるか？」

「何ですか？」

「下を見る。」

「下？」

エリーナは馬の脚元や馬車の下を見ているが分かってない。

「ふう、エリーナ、・・・胸。」

「胸？・・・キャッ！」

やっと気がついたよ。

「・・・見ました？」

「ごめんなさい。」

「エドさんのスケベ！」

エリーナは顔を真っ赤にして怒った。怒った顔も素敵なんて言ったら刺されるかも。

そのまま、エリーナの無言とプレッシャーを受けたままキャンプ地を見つけ野営の準備をした。

商人は途中で意識を戻したが怪我が酷いのか馬車で眠っている。

夜食は気まずさで一杯だった。エリーナずっと無言。そして何も言わずに睡眠。

明日には機嫌が直っていることを願いつつ、見張りをする。

今日の行動を振り返って反省すべきことはナシ。

覚えていなければいけない事はエリーナのおっぱいの感触と桜色のボタン。

これで俺はあと10年は戦える。



### 第13話

ようやくビロウ城が見えてきた。この調子だと夕方には到着するかな？

それにしても、3日目の馬車は雰囲気最悪でした。

エリーナは終始無言だし、商人は顔が腫れてアンパマンになっているし。

エリーナの機嫌を取ればいいのか、商人の顔を笑えばいいのか。

カオス空間だったよ。

そうそう、商人さんて実はビロウの国の大臣だったんだ。

お忍びで妾の所に行った帰りに山賊に襲われたと。

でも、城下町のすぐそばに山賊の根城があるのはオカシイと。

大臣を襲った山賊は政敵が放った可能性があるかと。

延々と同じことを何度も聞かされた。

こっちはどうやってエリーナの機嫌を取ればいいのか考えてるのに。

昼飯も重い雰囲気の中、終わった。

皆無言で馬車に乗り出発。

やっこの思いで城下町の門に着いた。

門番に山賊に襲われた事と、山賊の拠点の場所と山賊の残りの数を報告し城下町に入った。

乗合馬車は門番達に任せ徒歩で進む。大臣は数人の衛兵と城に向かった。

別れの挨拶も無いほどの緊迫した状況なのか？ただ、忘れていただけなのか？

きつと後者だろう・・・

エリーナはギルドに向かうらしいので俺も着いて行く。

ギルドに着いたが大きい。

ビックの町のギルドは平屋で座席も多くみても30程だったが、

ビロウのギルドは2階建て1階には座席が100以上、

敷地面積で言ったら1階だけでもビックの町のギルドの5倍はあると思う。

壁に世界地図発見。東に日本があるよ。

依頼書も壁一面に貼ってあるし、依頼書を見ている人の装備も全然違う。

高そうな鎧や斧や槍を持っている人もいる。そして東方人発見。

黒眼黒髪。2本の刀を腰にさした和服の男。

鬚は結ってないが暴れん坊の將軍様に出てきてもおかしくない格好だ。

年齢は不詳だが若い感じがする。

彼がこちらに気がついた様だ。

「お主の鎧、日本人のようだな？出身はどこだ？某は島津藩の村岡孝三郎と申す。」

礼儀正しくお辞儀をした。俺も釣られてお辞儀をしてしまうのは日本人の習性かな。

藩ね。藩があるって事は江戸時代くらいか？ここは賭けに出るか。

「俺は山本二郎と申します。訳あってエド・フロストと名乗っています。」

「ふーん、エドって偽名なんだ。」

いつの間にか後ろにエリーナがいた。面倒が無ければいいが・・・

「偽名で悪かったな？村岡殿にはお家取り潰しといえば分ると思うが・・・」

少しシリアスに言う。

「そうか、差支えなければ其の訳を聞いてもよろしいか？」

「いろいろあり父の死罪に嵌めた上役に仇討し、

その背後に他国の存在が明らかになり、調査をしているところです。

」

はい、嘘100%です。口から出まかせしか出ませんでした。

「そうか、山本殿は過酷な運命と闘っているのだな・・・」

「エド・・・ごめんなさい。」

あっさり2人とも騙された。っていうか穴だらけの嘘を見抜いて欲しかったよ。

「気にするな、エリーナはこの後どうするんだ？」

「わたし？わたしはこのままマリアとアルミが彼女達の依頼が終わったらここで合流よ。」

たぶん3、4日掛ると思うわ。」

「山本殿は如何なさるか？」

「しばらくはここに滞在しようと思います。自己鍛錬と路銀の貯えが寂しくなりましたので・・・」

「では、手合せをお願いしますかな？」

んゝ断ろうかな？

「エドは強いわよ！」

エリーナ・・・余計な事を！

「ふむ、楽しみだ。明日、ギルドで待っている。」

「ええ、わかったわ。」

って返事もエリーナかよ！

「エリーナ、俺の代わりに返事をしてくれてありがとう。」

「いいわよ、気にしないで。」

エリーナが笑顔で答えるが、ここで嫌味を言って彼女の機嫌を損わ  
せてもロクなもんにならない。

「とりあえず武器屋に行きたいんだが・・・」

「わかるから案内するわ。」

ラッキー。迷子を覚悟で探そうと思ったけどエリーナが知っている  
なら案内してもらおう。

これでさっきの件ががチャラになるとは思っなよ・・・

いつかその胸に顔を埋めてやる・・・

エリーナに連れられて武器屋に来たがオリハルコンの武器は置いていなかった。

武器屋の主人曰く、

オリハルコンの武器は失われた製造で造られた物で、硬くて頑丈だが重くて扱いづらいのが特徴らしい。

武器が重すぎて力がないと満足に振ることが出来なく、非常に不人気な商品だと。

売っても買い手がいないので鉄の剣の半分以下の価値にしかならないので普通は取り扱っていないと。

オリハルコンよりも堅い金属は無く、オリハルコンの盾や防具は見つかっていない。

また、オリハルコンは黄色く澄んだ色をしているので一目見ればわかると。

ここまでの情報で、オリハルコンに出会う確率は低い。扱いづらい武器に命を懸ける人はいないからね。

帰り際に俺の野太刀を売ってくれと頼まれたが断った。一応は俺の体の一部だから。

武器屋を出た俺は急に眠くなり宿屋に向かった。

ガイドがいると本当に楽だよ。眠くて考えることが出来なくても目的地に着くからね。

宿は普通の宿だった。値段も高くなく低くなく。

宿の食堂で晩飯をエリーナと2人で食べた後に

体の鎧を裸に戻してベットに潜った。

ひさしぶりのベットでぐっすり眠った。

俺の本能が夜の街に冒険に行けと命令してきたが、睡魔には勝てなかった。

目が覚めた。

鎧を擬態して部屋を出て食堂に向かう。

エリーナが既に朝食を食べていたので同席する。

「エドさん、少しの間でいいからパーティー組みませんか？」

パーティーか・・・一度は経験して損はないかな？

「ああ、問題ない。」

それにしてもパンが旨い。ここの名物か？

「朝食食べたならギルド行つて手続きしましょう。さあ、早く食べて下さい。」

食べるって・・・エリーナを食べてもいいのかい？

ピンクの妄想してたらエリーナに腕を掴まれてギルドに連行された。

朝食残つてたのに・・・

ギルドに着くと村岡がいた。ソワソワした落ち着きのない雰囲気をしている。

遠足前の小学生か？村岡がこちらに気がついた。

「おお、山本殿。やけに早いな。楽しみで寝られなかったなんて言うなよ。」

笑顔で言う村岡は微妙にクマを作っていた。お前の方が寝不足なのか・・・

「エリーナとパーティーを組もうかと思ひまして。」

「なんと、其れは面白そうだ。某も入れてくれぬか？」

「いいですよ。楽しく行きましょう。」



エリーナは笑顔で答える。朝から機嫌がいいな？何かあったのか？  
受付でパーティー登録をする。ここで初めてパーティーの特性を聞いた。

パーティー登録のメリットは、仲間の状態がギルド証書に書いてあること。

通常、重症、異常、瀕死、病気が分る。また、パーティー登録者の現在のランクも表記される。

パーティー討伐時はギルド証書の今までは別ページに記入される。

報酬はリーダーにギルドが払い、後は関与しない。

簡単になるとこんな感じだ。

エリーナが何を考えてパーティー組んだか分らんが、気にしない。

戦闘になれば昨日のように桜色のボタンが見えるかもしれない。

エリーナの行動には気をつけないとな・・・

ギルドを出た俺たちは北門から馬を使い、その先にある林の中で手合せをする事になった。

向かい合う俺と村岡。少し離れた所にエリーナがいる。

村岡は刀を抜き正面に構える。

俺も野太刀を抜かずに斜に構える。

距離3メートル。

「山本殿、抜かないのか？」

「こんなに長い野太刀を人間相手に振り回すのは下策だ。安心しろ、本気で行かせてもらう。」

「フツ、行くぞ！」

村岡が駆け出す。

「はああ！」

袈裟切り、胴、突き、打ち下ろし、全ての連続技が美しく見る者を魅了する。

俺はフォースを使い全ての攻撃を1センチ以下で見切る。

当たっているようで当たらない。

周りから見れば良くできた殺陣に見えるかもしれない。

いつまで経っても攻撃は届かないだろう。

先の先の攻撃をする得意とする村岡と後の先をを得意とする俺。

村岡が刀を振り上げた瞬間の僅かな隙で接近し村岡の持っている刀の柄を左手で掴んだ。

右手は村岡の喉に村岡の脇差を当てている。

「いつの間に・・・」

「本気で行くと言っただろ？」

脇差を喉から離し、村岡に柄を向けると受け取り鞘に納めた。

「エドさんすごい！」

エリーナが手を叩き喜んでいる。

「山本殿はお強いすな。」

「ええ、強くなければ俺の意味はありませんから。」

強くないジエダイマスターなんて意味ありませんよ。

・・・あれは？前方500メートルの街道で魔物に襲われている人がいる。

ヤバいな、敵は100を超えてるぞ。

「・・・この先の街道で人が襲われている。助けにいくぞ。」

「本当か？」

村岡、俺が嘘を言った事あったか？

いっぱい有り過ぎてゴメンナサイだ。

「ああ、急ぐぞ。」

俺たちは馬を使い移動を開始した。

## 第14話

馬車が襲われている。

襲っているのは緑色をした1メートル程の小さな亜人。

手にはナイフや棍棒、弓を持っている。

「あれはゴブリン！」

エリーナ物知りだな。

3人で馬車の後方に回り込み追つてを遮る。が、数が多すぎる。

すでにスピードが遅くなった豪華な馬車に数匹のゴブリンが取りついている。

エリーナが弓で倒していくが、すぐに新しいゴブリンが取りついていく。

村岡が馬車の近くのゴブリンを倒していく。

俺が馬車に近づこうとするゴブリンを倒していく。

このままなら馬車は逃げられそうだ。

「エリーナ、村岡殿！馬車を頼む。俺はこいつらを此処で止める。」

「山本殿、敵が多すぎる！」

確かに街道を見渡すと後方まで緑の波が埋めていた。1000匹はいるだろ。

「わかったわ、エド。」

エリーナは素直に従い馬車に追従した。

「クツ！山本殿！ご武運を！」

村岡も馬車を追って行った。

あとは、俺がこいつらの足止めをする。

馬上から野太刀で倒していたが、馬車を見失ったゴブリンは目標を俺に変えた。

すぐに馬の首に矢が数本刺さり、馬が断末魔を上げて倒れた。

馬から飛び退いた俺はフォースを使いゴブリンを野太刀で倒している。

撃退数を200を超えた辺りでカウントするのは辞めた。

緑の波の威力は全く衰えない。

野太刀で2体3体をまとめて倒せても焼け石に水。

もっと一気に敵をせん滅する武器はないのか？

火炎放射機は威力が弱すぎる。プラズマ砲は溜めの時間がかかる。

エンジンカッターも論外、プラズマソードは野太刀よりも攻撃範囲がない。

ならば、野太刀を大きくするか？

斬馬刀くらいか？いや、ここは斬艦刀だ！

上空に向ってバーニアを使い高く跳ぶ。

武器をイメージする。

鍰が大きく横に開き鍰から液体金属が野太刀を包み込む。

液体金属は放出を続け長さ100メートルの黒いブロードソードが出来た。

斬艦刀デカ過ぎ。鍰だけでも7メートルはあるぞ。

こんなに大きいなら殲滅も簡単だな。

俺はゴブリンの集団から少し離れた街道に降りた。

両手で刀を持ち刀身を横に構える。

刀に森の木々が切られて倒れていく。

正面からは緑の波が怒涛の如く押し寄せてくる。

距離・・・20・・・10・・・5メートル。

ここだ！

「はぁ！」

渾身の力を込めた薙ぎ払い。

斬艦刀の高速の薙ぎ払いは先端で衝撃波をだしたのか、

100メートルまでは上下半分になっていて、

そこから先はグチャグチャのミキサーにかけられた様な状態だった。

森の木々も俺を中心とした半径100メートルは伐採されている。

自然に優しくない男だな。まあ、気にしないが・・・

生体探知機能を使い付近を警戒する。

ゴブリンの何割かはまだ生きていたが、戦意喪失して逃げ出していた。

よし、ミッション完了。

斬艦刀を野太刀に戻し鞘に納める。

城下町に戻るか。それにしても、馬車の主は何故あんな大軍に襲われていたのか？



ここで考えていても仕方がない。さっさと戻ろう。

途中で迎えに来たエリーナの馬の後ろに乗せてもらい帰りは天国だった。

エリーナの腰に手を回すと自然におっぱいに腕が当たる。

女の子の良い匂いを嗅いで馬の上下する震動でおっぱいが腕に当たる。

そして俺のマグナムと言う名前のニューナンプが彼女のお尻に当たっている。

天国は此処に在った。

そのままヘブン状態で町に着くと何故か城に連れていかれた。

合流した村岡が言うには助けたのは王族で、ゴブリンに襲われる前に魔族が現れたそうだ。

魔族・・・

好き放題やつてくれるな・・・

俺のマグナムが魔族以上に好き放題したいと叫んでいるのに・・・

正直、気に入らんですよ。

俺の知らない美女が俺の知らない場所で散るなんて許せない。

せめて俺がベットの上で散らせたかった。

なんて女性の尊厳を踏みにじる独り善がりの妄想をしていると謁見の間に着いた。

大きな扉の先には体育館ほどの広さがあった。

正面の一段高いところには50代の鬚を蓄えた王様が豪華な椅子に座っていた。

王様の左右には美しい20代の同じ顔をした女性が2人立っていた。

俺のスカウターでは戦闘力は2人ともC判定。

美乳だな。

王族の前には豪華な鎧を着た兵士が2人。

その左右には大臣が数名いる。

この前の商人に間違えた大臣も左側にいるし。

とりあえず伏兵の心配あるから生体探知機能にする。

・・・あれ？あの右端の細い大臣だけ生体探知の色がおかしい。

人や魔物が青だがあの大臣だけ赤く反応している。

嫌な予感がする。が、とりあえず放置で。

俺はある程度まで王様に近づくと片膝を着き頭を下げた。

後ろに付いてきている村岡とエリーナも同じようにしている。

「よくぞ我らを助けてくれた。近衛兵でも苦戦を強いられた魔物達をよくぞ打倒した。」

最近魔族、魔物の動きが活発になっておる。そなたらの武勇に感謝を込めて褒美を取らそう。

金貨でも爵位でも將軍でもなんでも良いぞ。さあ、一人ずつ欲しいものを言うのだ。」

うーん、何にしよう？姫様2人欲しいって言ったら確実に殺されそうだな・・・

「王よ、某はこの国の国民の優しさに触れた。それに民の為の政に感銘を受け申した。」

この国の未来を守って行きたいと思えます故、この国に仕えさせては頂けないでしょうか？」

村岡・・・なんて志の高い人間なんだ。

「うむ、仕官すると言うのか。お主の強さなら騎士団で十分に力を発揮できるであろう。」

この者を騎士団に案内せよ。」

村岡は俺達の後ろで控えていた兵士に連れていかれた。

彼には彼なりの人生設計があるのだろう・・・

「王様、私は魔族に復讐をしようと旅をしています。この装備では太刀打ち出来ません。」

強力な武器、防具を頂けないでしょうか？」

「うむ、わかった。宝物庫にある武器、防具を与えよう。自慢じゃ無いが魔法付与の武器防具は多いぞ。」

武器防具は一通り好きなものを選ぶがよい。この者を宝物庫に案内せよ。」

エリーナも兵士に連れられて行った。

俺は何にしよう？

「ふむ、お主は何を望む？」

士官は興味無い、強力な武器防具いらない、金にも困っていない。

女か・・・女だな、女しかない！

姫様2人との3人で夢の大ニャンニャン祭りです！

「王様、私は旅人の剣士です。今は仕官するつもりも強力な武器も欲しいとは思いません。」

はい、俺はチキンです。

「うむ、ならば金貨か？」

「いえ、金貨を貰っても下らない事に使うのが分かっているので金貨は民の為に使って頂きたいです。」

えーっと、大変申し訳ないのですが人払いをお願いしますか？」

「うむ、全員部屋から出よ。」

兵士や大臣が不満を漏らすが続いて部屋から出て行った。

「これで良いか？」

「ありがとうございます。王様は魔族についてどのように認識していますか？」

「魔族か・・・あれは人類の敵だな。魔族の活性化で他国との戦争も終結したしな。」

「そうですか、えーっと此方から見たら右端に立っていた大臣の事をなんですけど。」

「リアンか？彼は建設大臣で昔から民のために良くやっているが？」

「はい、大変失礼な事だと分かっていますが、彼からは魔の気配を感じます。」

「証拠はあるのか？大臣を魔族扱いすれば侮辱罪になるぞ。」

「明確な証拠はありません。ですが、この背にある『斬魔刀』が彼に引き寄せられるのです。」

実は無名の刀ですけど・・・

「『斬魔刀』？」

「はい、魔を切ることを宿命とされた刀です。」

あのゴブリンの群れも『斬魔刀』が無ければ危険でした。」

「そうか、命の恩人の忠告だ。ここは聞き入れて、リアンの動向に注意を向けよう。」

「ありがとうございます。」

あとはこの国の平和が続くなら、私の願いの『民が安心して眠れる国』になるでしょう。」

本当は『美女満載の国』って最初に付くけどね。

そのまま退室した俺はエリーナがいる宝物庫に案内された。

エリーナは今までの金属の弓から全体的が赤で統一された豪華な弓を腰に下げていた。

エリーナは鎧を選んでいるが、試着してはここが気に入らないとかデザインが古いとか言ってる。

しばらくして鎧が決まったのか今度は兜で選び出した。

ここは服屋かよ！って突っ込みたくなったが、ここは我慢だ。

女の長い買い物に付き合うのも男の甲斐性ってもんだ。

エリーナが長い買い物をしていると村岡が騎士団の鎧を着てやってきた。

腰には日本刀だが違和感がない。

「山本殿、某は生涯この国に忠誠を誓いました。短い付き合いですが山本殿には感謝しています。」

山本殿に合わなければギルドにいて王様を助けることも出来なかったであろう。

山本殿と出会えた事に感謝します。それとこの先の旅路にご武運を。

「

「ありがとう。村岡殿に会う事が出来て良かったです。」

充実した手合わせをさせて頂きこちらこそ感謝いたします。」

「して、エリーナ殿は？」

「あー、買い物に夢中で言葉が届かないと思います。」

「なるほど、女子の買い物は長いのはこの国でも同じか・・・エリーナ殿によろしくと伝えてくだされ。」

村岡は一礼して立ち去った。

エリーナの買い物はまだまだ続きそうだ・・・

結局すべてを選ぶのに4時間以上かった。

命を守る物だから慎重になるよね。

この城に来たのが昼過ぎ。今は夕方。昼飯抜かしてしまった。

エネルギーは80%以上あるからいいけど、食事と言う娯楽は無くしたくないな。

なぜなら俺は美食亭の倶楽部の漫画を全巻持っているからだ。

え？関係ない？



## 第15話（前書き）

闇の皇子氏の指摘により一部訂正いたしました。

貴重なご意見ありがとうございます。

## 第15話

城から出た俺たちはギルドで報酬をもらおうと思ったが、

エリーナに今日の受け付けは終了したと告げられ宿に向かった

宿の食事ではエリーナの新しい武具の自慢を聞かされ続けた。

切りの良い所で食事と会話を切り上げて部屋で休んだ。

初めての謁見とエリーナの自慢話で精神力の限界だった。

翌日になりエリーナとの朝食後にギルドに向かった。

ギルドでパーティー討伐の報酬をもらう。

報酬計算は

$(\text{総支払い額}) \div (\text{パーティー人数})$

均等に分配されるんだね。

今回のパーティー討伐数

ゴブリン×3443

ソロで

オーク×1

オークはソロで討伐するには最低Aランクは必要って言うんだけど、罠に掛っていた弱っているオークに止めを刺しただけって言うたら納得された。

俺って見た目弱そうに見えるのかな？

冗談で言ったのに本気にされては訂正出来ないよ・・・

今回の討伐報酬額にエリーナは驚いていた。

多いのかな？一般の定食が50エイ、100エイ、

ゴブリン1匹の討伐報酬が250エイだから、

合計86万750で3等分すると28万6916エイ。

1回100エイの食事だと956日分か・・・

十分に稼いだ気がする。

そのままギルド銀行で預かってもらう。

今日はこの後どうしようかな？って考えつつエリーナの方を見ると、

固まっていた。エリーナ、後ろが詰まっているぞ。

エリーナに代わってギルド銀行に預けて一通りの手続きが終わったが、

彼女の意識が明後日に行つたまま帰つてこない。

エリーナを近くの椅子に座らせる。

話しかけても揺さぶつても起きやしない。

仕方ないので正面に座つて話しかける。

「・・・ここで一つ小話を・・・」

「・・・」

ハッハッハッ！かみさんはそれをピザに乗せて、亭主にこう言ったんだ。

”ポップコーンを食べてるわ”

ハッハッハッハッ！笑えるだろ？」

ここでやっとエリーナが気がついた。周りを見てキョロキョロしてる。

「ハッハッハッ！・・・おつと行かなきゃ。春巻きつまかったぜ。」

テーブルの上には料理が2人前乗っている。

ギルドの2階は居酒屋兼料理屋になっていて絶品の食事と酒を提供してくれる。

値段は割高だが本当に美味しい。

「え？ちよ、ちよつと待つてよ。」

「テキーラはよせと言ったろ。酒はほどほどにしろ。

明日の朝、俺の部屋に・・・よろしく。」

俺は今だ呆けているエリーナを置き、清算して部屋に帰った。

今日1日ってギルドに行つて討伐報酬貰つて、誰も聞いていない独演会開催。

で、飯食つて帰つてきた。本当に何してたんだらう？

翌日の朝、エリーナが部屋に来た。

俺はエリーナに弓の扱い方を教えて欲しいと頼んだ。もちろん依頼料払うと。

弓が使えると色々便利そうだし、プラズマ砲なんてオーバーテクノロジー使ったら異端扱いだ。

場合によっては、真空中マッハ土下座使おうかと思った。

エリーナは直ぐに了承してくれた。

すぐにギルドの裏手にある鍛錬場向い教えて貰った。

うん、1日で上手く扱えたら苦労しないね。って言われた。

これは遠まわしに「才能ない」って言われているのか？

教えて貰っている最中は、エリーナからボディータッチで教えてくれるから

おっぱいが腕や背中にあたったり、サービスショットが見えた。

女性上位・・・嫌いじゃないぜ？その言葉。

その後2日間練習して学んだ結果は、

弓で射るよりも石を投げた方が威力、命中率、射程距離が優れていた。

落ち込む俺を慰めているエリーナにちょっと萌えた。

宿で夕食を取っているとマリアとアルミの2人と合流した。

2人は数日だけ別れていたエリーナの装備が良くなっている事に不満を口にしたが、

エリーナが2人に事情を説明するのと新しい装備を買う事で大人しくなった。

4人で食事をして今後について話を聞いた。

彼女達は北に馬車で4日の場所にあるビブウの町に行くそうだ。

俺は西にある宗教国ラーに、この世界に魔法を広めた『神の写し身』がいるらしいので、そこに行くと言えた。

3人とは別々になるが彼女達の目的と俺の目的は違う。

生きていれば必ず会える。俺はそう信じている。

マリアとアルミの2人は移動で疲れたのか半分眠りかけていたので解散になった。

マリアとアルミを腰に抱えて運ぶ。

エリーナが先導してくれるので誰とも衝突しなかった。

荷物の2人は同室だったので下ろすのが楽だった。

ドサクサに紛れて色々触ろうかと思ったが、エリーナがこっちを見ているので諦めた。

エリーナを部屋に送り届ける。これで知的美人ともお別れになると思っていると寂しくなる。

「エリーナ、ここでサヨナラだ。」

「はい・・・」

エリーナの寂しげな表情に抱きしめたくなるが、我慢だ。

「エリーナ、君に希望の西風ゼファアの加護がありますように・・・」

「エドさん、それは？」

「昔、旅をしていた時にある村で聞いたおまじないだ。

そこは地形の問題で西風が吹かない場所だけど数百年に一度だけ西からの風が吹くらしいんだ。

西風が吹くと必ず村が繁栄する。そこから希望の西風って言われているんだ。

で、その村では西にいる神様をゼファアって言っから

『君に希望の西風ゼファアの加護がありますように・・・』

ってゼファアに祈るんだ。そうすれば、この先にはきっと希望があるって信じられているんだ。」

「へえ、いいわね。じゃ、わたしも、

エドさん、あなたに希望の西風ゼファアの加護がありますように・・・」



エリーナはそう言つと瞳を閉じて唇をこちらに向けた。

俺は眼を閉じ唇を近付けた。が、ここで問題発生。

通路の曲がり角からこちらに向けている視線を感じる。それも2人分。

マリアとアルミがこちらを見ている。顔の半分以上が出ていますよ？

仕方ないので、額にキスをしてこの場を去った。

俺が去った後にマリアとアルミがエリーナの部屋に入って行った。

きつとこのあとマリアとアルミはエリーナを問い詰めたり冷やかしたりするんだろうな。

翌朝、俺は朝日と共に出発した。

決してマリアとアルミに冷やかされるのが嫌だって訳じゃないぞ。

西門から街道沿いに馬ほど行くと10日で宗教国ラーに到着予定。

途中で、山と洞窟を抜けるらしいが、きつと何とかなるだろう。

宿の人に保存食10日分を買ったので大丈夫なはずだ。

宿を出て西門に向うが馬屋が営業時間外だった。

仕方ない。ここは走って行こう。どうせ疲労しない体なんだ。

西門を出て4日、寝るとき以外はずっと走っていた。

ここまで魔物には1度も出会っていない。

こここの主な魔物はゴブリンらしい。

俺、生態系に影響でるほど狩ったかも・・・

6日目に山の麓に到着、そのまま進み洞窟も越える。

何にも無かった。人も魔物も。

8日目、森を抜けると一面の麦畑に出会った。

なんでもない風景なのにちよつと感動したよ。

農業に勤しむ人々を眺めつつ街道を進む。

夜は農家の納屋を借りて一晚を明かした。

9日目、夕方に宗教国ラーの首都テーベに着いた。

ギルド証書で町に入る。町は活気に溢れていた。

店の入り口の上に太陽の模様が描かれているが、宗教と関係あるのかな？

町を散策していると宿を発見。その隣にギルドもある。

宿で休むかな？ギルドは明日でいいか。

宿に入ると壁に肖像画が飾られていた。

20才ぐらいの褐色の肌の青年。

俺が肖像画を眺めていると宿屋の主人が話しかけてきた。

「このお方はアメン様と言ってアモン信仰の教祖さまで太陽神アモンの生き写しって言われているんだ。」

魔法使い、魔道師、魔術師の祖先を辿っていくと必ずアメン様にたどり着くんだ。

簡単に言つとアメン様が魔法の祖なんだよ。それにアメン様は何千年もこの姿でいるんだ。」

「へー、凄い方なんですな。」

「ああ、日照りがあれば神の力で雨を降らしてくれるし、怪我や病気になるれば神殿で癒してくれるんだ。」

随分と人気のある人らしい。

個室に案内された俺はベットの正面にある肖像画を裏返しにした。

見られているみたいで、何か嫌だった。

ベットに腰を下し考える。

宗教国ラー、首都テーベ、太陽神アモン、アモン信仰・・・

何所かで聞いたことがある単語だ。

答えが喉の奥に引っかかっているように出てこない。

あゝ。あと一歩で思い出せそうなんだけど、何だっけ？

まあ、その内思い出すだろう。

とりあえずは、テーベの夜の顔を拝みに行こうかな？

一晩の楽しい思い出作りに女の子でも引っ掛けよう。

俺の性欲は中学生男子並みに限界を知らないぜ。

## 第16話

夜のテーブルは賑やかだった。

道には松明の照明が並び、女性達が店の前や中から声をかけてくる。

ただ、問題はこの国と俺との価値観の違いだった。

こちらでは太い体系の女性が美しいとされている。

残念ながら俺の趣味はボンキュッボンの峰不二子スタイル。

間違ってもシュレックではない。

仕方がない。宿に戻って寝よう。

宿への帰路でも大型のシュレックや小型のシュレックから誘われたが断った。

俺のマグナムが一瞬で隠し銃になったから仕方ないよね。

翌朝、宿で朝食を取りギルドに向かう。

建物はビロウ城の城下町のギルドよりは小さいがそれでもなかなかの大きさだ。

ギルドに入り掲示板で面白そうな依頼を探す。

ん……

護衛はメンドクサイし、討伐や退治以外のを探そうかな？

・・・おつと発見。

内容は？

南にある洞窟の奥深くに咲く『太陽の花』を取ってきてほしい。か・

太陽の花？

見たことも聞いたことも食ったこともないな。

とりあえず受付で詳しく聞こうかな？

受付は女シュレックだった。ここは媚や愛想を振りまく必要を感じない。

必要な情報聞いてサッサと行こうかな。

「すみません。この依頼について詳しく聞きたいのですが。」

「はい、こちらの依頼はアメン様からの特別な依頼です。

何が特別かと言うと、危険度も報酬も特別に高いです。」

「場所は近いのか？」

「南門から馬で3時間くらいですよ。太陽の花が咲いているのは地下3階です。」

「危険度が高いと言ったが具体的には？」

「洞窟の奥から魔物が湧いてきて完全な駆逐が出来ないんです。」

つまり、奥には召喚陣か転送装置があると思われます。

それに、この依頼は何十組のパーティーが失敗しているのです。」

「なるほど、最後にアメン様に会うことは出来るか？」

一度、教祖様つてのに会ってみたかったんだよね。

「大丈夫です。依頼を受けた後に会って頂く予定でしたから。」

「わかった。この依頼引き受けよう。」

「はい。ではギルド証書をお預かりします。」

彼女は慣れた手つきで手続きを開始した。

「手続きが完了しました。ギルド証書を見せれば神殿の奥にいらっしゃるアメン様に面会できます。」

「わかった。ありがとう。」

ギルドを出て神殿に向かう。

神殿は町の中心にあり、どの建物よりも立派ですぐにわかった。

神殿に着き近くの神官にルド証書を見せ事情を説明する。

すぐに広間へと通された。

20才ぐらいの褐色の肌の青年が大きな椅子に座っていた。

「お主が我が依頼を受けたというのか？名を名乗るがよい。」

「はい、エド・フロストと言います。」

「我が名はトゥトゥ・アंक・アメン。」

うむ、お主の実力ならば太陽の花を持って来るのは楽なはずだ。期待しておるぞ。」

「・・・はい。」

何か見透かされたような感じがしたな。

それにしても、

『トゥトゥ・アंक・アメン』

何所かで聞いた事ある音だ。

トゥトゥアंकアメン、トゥトゥアंकアメン、トゥトアंकアメン、トゥトアंकアメン



トウトアンカメン、ツトアンカメン、ツタンカメン、ツタンカーメン  
まさかのファラオとご対面とは吉村教授もビックリですよ。

まあ、そんなに興味無いですけどね。

女性以外は興味ないですよ。

さて、さつさと支度いて依頼終わらせようか。

道中、魔物にも遭遇せずに到着です。

洞窟は崖の下に空いた大きな入口が遠くから確認できたので迷わず  
来れた。

初めての依頼。初めてのお使い並の緊張感。

視界をナイトスコープに切り替えて洞窟に進んだ。

地下1階

魔物は大トカゲやゴブリンがメインだが色が黒い。

洞窟内は狭く野太刀を振り回す事が出来ないので、殴り倒す。

力を調節して外傷が無いように倒す。

飛び散った肉片なんて見たくない。

魔物とは5分置きくらいで遭遇する。

地下2階

地下1階の魔物に加えて大きなミミズも追加。全て殴り倒す。

魔物とは3分置きくらいで遭遇する。カップヌードルの時間を計るのに丁度いい。

地下3階

階段を下りてすぐに大きなホールに出た。

部屋の角に淡く光る花がある。きっと『太陽の花』だろう。

ホールの奥には地下4階に続く下り階段がある。

今回は保留だな。まずは依頼を優先しなければ。

太陽の花を摘み来た道を引き返す。遭遇する魔物は全て殴り倒した。

地上に出た俺は依頼を終わらせるべく神殿に戻った。

ここに俺好みの女性がいるなら長居するが、シュレックしかないなら早く移動したい。

神殿に戻り太陽の花をアメンに渡す。

「うむ、よくぞ戻った。同郷の士よ。」

・・・同郷？

「知っていたんですか？」

「うむ、我は此処に来る時に相手の本質を見抜く力を得た。

向こうでは親族で家臣だったアイに裏切られてな。

それで、この力を欲したのだ。」

アイ？誰それ？愛ちゃんか？

「それで、我が国はどうなっておる？」

正直、エジプトなんて行ったことないですよ。

「詳しくは分りませんが、何度かのナイルの氾濫と幾つもの大きな戦争がありました。」

時には戦争で負けることもありました。

今でも、多くの問題がありますが、そこに住む人々は平和で幸せに暮らしていると聞きます。」

「そうか、それは良かった。お主には特別にこれをやろう。」

渡されたのは1つの変哲のない指輪。

「これは魔物除けの指輪だ。低いランクの魔物と遭遇しなくなるだろう。」

「ありがとうございます。」

「それと依頼ではないが太陽の花があった洞窟の奥から魔物が湧いてくるときいたであろう？」

今までは定期的に魔物が襲来していたが、やはり民に危険が及ぶ前に根本的な解決をすべきだ。

お主ならば地下の深いところまで調査できるはずだ。」

民のため・・・ね。良い治世者だね。

「わかりました。やりましょう。」

「うむ、成功の暁には我が娘を嫁がせよう。」

そこに現れたのは大型のシュレックだった。

調査が終わってもこの神殿に来ることは一生ないな・・・

神殿を出ると辺りは真っ暗だった。

俺は宿で一晩休んだ。

翌朝、日の出と共に洞窟に向かった。

地下1階、地下2階は魔物と遭遇せずに済んだ。

指輪の効力すげえ。

地下3階を過ぎ、地下4階に着いた。

魔物と遭遇せず地下5階へ。

地下5階で魔物と遭遇。

魔物はゴブリンだが大きさが大人の人間サイズ。

ゴブリンが叫びながら襲ってきたが、カウンターで殴り倒す。

余裕です。

そのまま進んでいくと小さなホールに出た。

地面に魔法陣のようなものがある。

これが召喚陣とか転送装置ってものか？

しばらく様子を見ていたが、反応が何も無い。

この装置の向こう側ってなんだろう？

魔物が向こうからこっちにくるなら、

こっちから向こうに行けるよね。

俺は深く考えずに魔法陣の上に乗った。

魔法陣が強く発光し視界が光で遮られる。

眩しい。

どうせ眩しいならビーチで美女の水着を見て眩しいって言いたいぜ。

## 第17話

光が納まり回りが見えてきた。

石作りの建物。周りには誰もいない。

とりあえず、一度帰って向こう側の魔法陣を壊すかな？

魔法陣の上に乗るが全く反応しない。

ヤバイ。帰れない。どうしよう。

・・・

仕方ない。この魔法陣を壊して周辺を探索して町を見つけるか・・・

建物を出て周囲を見渡す。

森の中にある石作りの御堂のようだ。

右腕をプラズマ砲に変えてお堂に向け構える。

プラズマ砲を3発放ち、御堂が崩れていく。

これで向こう側に誰も行くことができなくなった。

とりあえずテーベの町に魔物の進軍は無くなったはずだ。

これで頼まれたことはクリアしたかな？

さて、何所か人の居る所を探すかな？

視界を生命探知機能にして周りを見渡す。

・・・魔物が何体かいるが人の気配がないな・・・

お、赤い反応がある。って魔族だ。しかも、複数。

輪郭で分かる。頭の横から角が2本出ていては人間と思えない。

こっちに向かってきているし、どうしよう？

とりあえず魔族に変身しないと！

魔族、魔族、あゝダメだ！思いつかない！

ツノがあつて悪いやつ。んゝんゝ

赤鬼しか思いつかない。

赤鬼？赤い悪いやつ・・・おお、ダース・モールがいる！

イメージ・・・ダース・モール

体が光に包まれてダース・モールに変身する。

頭部に短い角を10本ほど生やした全身に赤と黒の刺青をしている鬼に似た外見。



間に合った。

「おい、お前。ここの転送装置が壊れている理由を知っているか？」

2本の角を付け豪華な鎧に身を包んだ男が声をかけてきた。

「人間が居たので殺したが、その人間が最後に自爆しやがった。」

はい、嘘です。俺が犯人です。

「そうか、あの転送装置の建物を壊すのだから大した威力だったんだろう。」

「・・・行ってもいいか？」

「いや、お前は見どころがありそうだ。俺の所に来ないか？優遇するぜ。」

「將軍！あのような不審者を我が軍に入れてよろしいのですか？」

2本角の男の後ろから青白い肌で華奢な男が反論している。

「む、ジーがそういうなら、ここで力を見ればいいのか？」

「私はそういう意味で「さあ、入隊試験だ。見事俺を倒してみろ！」

2本角の男は俺に向かって剣を抜きながら接近し切りかかってきた。

俺はフォースに導かれるまま、体を動かし攻撃を避ける。

避けながら考える。武器が無い。

武器・・・

ダース・モールは原作ではダブルブレイドライトセーバーをもっていた。

ここではライトセーバーは使いたくない。

棒状の武器でいいかな？伸縮できたら持ち運びに便利かも。

プレデターが持っていたスピアって条件に合うかも。

右手を後ろに隠す。

背中に隠していたように見せないと不審に思われるから・・・

イメージする。

右手に棒状の物が握られている。

避けながら武器を確かめるが、短い状態なので戦うのには不利だ。

一度大きく後方に飛ぶ。

仕切り直しの状態になる。

俺は右手に持ったスピアを正面に掲げ伸びた状態をイメージする。

スピアは音もなく伸び長さ250センチ程になり、両端に刃がつい

ている。

「ほう、良いもの持つてるじゃねえか。」

俺はその言葉を見殺しして接近し突く。連続で突く。

狙うは心臓、喉、頭、腰、肩を連続で攻撃する。

最後に力を入れすぎたのかスピードが若干遅かった。

2本角の男は突いたスピアを剣で上方に払った。

スピアが上空を回転しながら落ちていく。

2本角の男は勝利を確信したんだろう。隙だらけだ。

スピアが飛ばされる事は想定内だったので次の行動が陣速に動けた。

距離を詰め金的にキック。

スピアが地面に刺さると同時に決着がついた。

2本角の男が前のめりで急所を押えて倒れている。

唸りながら涙を流している。

「うう・・・ぐう・・・むう・・・」

「俺の勝ちだな。」

ダメージから復活した2本角の男は自己紹介を始めた。

「俺は4魔將軍の1人、ガウスだ。」

青白い顔の華奢な男も自己紹介を始めた。

「私はジー。將軍の補佐をしている。いわば、副將軍の立場だ。後ろにいるのは我が軍団だ。」

なるほど、魔族の將軍ね。

「俺の名は、ダース・モール。モールと呼んでくれ。」

「では、モール。俺の軍団に入らないか？お前の強さなら新しい將軍になれるはずだ。」

ガウスが勧誘してくる。ジーも期待に満ちた目で見てくる。

「誘ってくれるのは嬉しいが、俺は何所にも属するつもりはない。」

即答で断るよ。誘ってくれたのが美人なら即答で着いて行くけどね。

「それなら、今回の詫びとして食事を招待しよう。どうだ？着いてこないか？」

食事か・・・魔族って何食ってんだろう？興味はあるな。

「わかった。食事に招待されよう。」

「ありがとう。向こうに馬車を用意してある。着いてきてくれ。」

森の外れに馬車があった。馬車に揺られて食事に向かう。どこで食事にするんだ？

馬車の中では幾つか質問を受けた。

出身、経歴、家族構成、現在の目的。

「出身は覚えていない。気がついたら師と旅をしていた事。」

家族は師のみだが、師も病で亡くなり今は1人だ。

旅の目的？ そうだな、静かに暮したいんだ。そのために静かな場所を探している。」

「静かに暮らす？ 何いつてんだお前？ 人間を皆殺しにしないでいいんか？」

ガウスが聞いてくる。

「人間を皆殺しにしてどうする？ 殺すよりも捕えて奴隷にしたほうが便利だろう？」

「お前、変わってるな。人間なんて虫けら以下だぜ？」

「全ては効率よく、目標を達成させるには使える物は全て使うのが

師の教えだ。

師を冒？するなら容赦はしないぞ。」

少し怒った表情をする。

「悪かったな。落ち着いてくれ。もうそろそろ到着だ。」

騙されてやがる。俺って俳優になれるかも。

降りた先は城だった。魔族の城らしからぬ綺麗な白い城。

ガウスが先導して城に入る。その後ろを着いていく。

ガウスが大きな扉の前で止まった。

「ここからは俺の話に合わせてくれ。頼む。

そうすればお前が望む静かに暮らす環境も揃えられるはずだ。」

「わかった。まかせろ。」

ガウスは答えに満足したのか扉に向かって歩き出した。

扉の先には王冠を着けた半竜神が豪華なイスに座っていた。

クソッ！騙された！食事じゃねえ！魔族の王の前に来ちまったよ。

人間ってバレタラ死刑かな？

まあ、何とかなるかな？

王の前でガウスが膝を付いたので俺もガウスの後ろで同じ行動をする。

「よくぞ戻ったガウスよ。武闘会の選出者はその者でよいのか？」

「はい、この者はモールと言いまして、私と同等の武を持っています。」

「ほほう、それは楽しみだ。わかった、下がってよいぞ。」

「ハッ」

謁見の間をでた俺とガウス。

「ガウス？説明してくれるかな？」

ガウスは眼を合わさずに説明してくれた。

武闘会で優勝すれば望みの物を貰える。

辺境で家を貰えば静かに暮らせる。

決して俺の軍団から出た者が優勝すれば大將軍に近づくことが出来ると言う訳ではない。

それに、優勝したら、リザードマンの女の子や死霊の女の子にモテてうはうはになるだろう？

まさか女よりも男がいいのか？冗談だ、スパアを仕舞え。本当にごめんさない。

その後、食堂で食事をしたが普通に人間と同じ物食べてた。

なんで仲良く出来ないんだろう？

食事が終わると城の中にある部屋に案内された。

ここで暫く過ごす事になるらしい。

武闘会まであと10日。

武闘会までにフォースを上達させないと。

10日が過ぎた。

猛特訓の末、俺はフォースで物を浮かせる事を学んだ。

これで完全犯罪のスカートめくりが出来る。

今日まで何度もガウスから剣の練習に誘われた。が、断った。

正直メンドクサイです。



闘技場に着いた。コロッセオによく似ている。

観客がいっぱいいる。全部魔族って凄いよね。

控え室は個室だった。しばらくして舞台に案内された。

開会式もなく、1回戦。

相手は斧を持った同じ身長魔族。

フォースを使い斧を避けてカウンター気味にスピアで相手の腹を払う。

余裕の勝利です。

控室に戻り次を待つ。

2回戦

汚れたローブに身を包んだ老人。

こいつ、魔法使いだな。武器持っていないよ。

老人が何か呟くと老人の前に炎が燃え上がり、巨大な炎の竜巻になり近づいてきた。

右も左も炎に包まれ逃げ道は無い。が、空中は燃えていない！

バーニアを使い空中に跳び上がり竜巻を回避する。

老人は跳んで避けた俺を見ていなかったのか油断していた。

老人の背後に静かに着地し首筋に軽く手刀し、意識を奪った。

俺の勝ちだ！

控室に戻り次を待つ間に観客席に美人が居たか思い出す。

3回戦。

腕が4本ある2メートルの身長魔族。

2本の剣と2個の盾で武装している。

2本の剣で連続で攻撃してくる。

隙を見てスピアで攻撃するが盾で防がれる。

どうしよう？

剣での攻撃の隙について後ろに跳ぶ。

少し離れた位置からスピアを投げる。

予想外の攻撃で隙が生まれた。

そのまま走り込み距離を詰めて腹にパンチを入れた。

そのまま敵は倒れた。ピクピク痙攣しているので生きているのだろ

う。

控室に戻り次を待つ間に観客席に美人いた美人が俺の勇士を見ていたのを思い出す。

#### 4 回戦

どうやら準決勝らしい。

相手はミノタウロス。頭牛巨漢です。

身長は4メートルくらいかな？山のようにでっかいぜ。

ミノタウロスは巨大な斧を振り下した。

斧は床面を破壊して止まった。そこに俺の姿はない。

ミノタウロスは驚き戸惑っていたが、すぐに俺の姿を捉えた。

俺は振り下ろされた斧の上に立ち腕を組んでいた。

今の俺ってカッコいい！絵になる！

って自画自賛していたがミノタウロスと目が合った。

そのまま斧の柄から腕を駆け上がりミノタウロスの顎を殴り失神させた。

控室に戻り次を待つ間に観客席に美人いた美人が俺の勇士を見て頬を染めていたのを思い出す。

## 決勝戦

これに勝てば観客席にいた美人が俺に惚れるのは間違いない。

相手は誰だ？ テンションが上がってきたぜ。

「ほう、貴様が僕の相手か？」

現れたのは金髪のキザ野郎。観客から黄色い歓声が上がっている。

「僕の強さに恐れをなしたのかね？」

何コイツ？ 関わりたくないタイプだな。

「黙ってどうしたのかい？ そうか、貴様と僕の強さの違いに驚いているのか。」

それなら仕方ないな。僕は魔族の中の魔族と言われている『メバリ家』の次期領主だからね。

さあ、潔くこの『アライダン・メバリー』に負けを認めるんだ。」

「・・・はあ、弱い犬ほど良く吠える。勝負はこれからだ。」

「何だと！ 僕を馬鹿にするなー！」

アライダンは剣と盾を構えて突進してきた。

フォースを使い攻撃を避ける。

何度か避けていると後ろの地面から突起物が勢いよく飛び出してきた。

事前に感知していたので余裕で避ける。

正面に注意を引き付けて後ろから奇襲か。小物だな・・・

さつさと終わらせるか。

一度大きく後ろに跳び距離をあける。

スピアを構え突進する。

アライダンの腹をめざして左手だけで突く。盾で防ごうとした。

防ぐ瞬間はアライダンの視界からは俺の姿は盾が邪魔で見えない。

右手を盾に向けてフォースを使い盾を弾く。

腹にスピアが当たる寸前で止めた。

「チェックメイトだ。」

「・・・ああ、僕の負けだ。」

歓声に包まれる場内。

これで観客席にいた美人が確実に惚れたはずだ。

今夜のニャンニャン祭りを妄想しながら彼女の方を見ると、

小さい子供を抱えていた。

・・・俺は何をやっていたんだろう？

・・・俺って馬鹿みたいだな・・・

## 第18話

表彰式。

舞台の中央で魔族の王様から表彰された。

表彰も男にされるよりも美人にされたいな。

あゝどつかに美人落ちてないかな？

「よくぞ戦い抜いた。

この武闘会で優勝したモールには、その武勇を称えモールには「騎士」

の称号を与えよう。・・・そう、「赤騎士」の名がモールの武勇を表すだろう。」

赤騎士って・・・言っつて恥ずかしくないのかよ。

いや、待てよ。赤騎士の名で女の子が寄ってくるかも。

観客席にいる女性は、トカゲ、牛、幽霊、ゾンビってこんなのにモテたくないよ。

「赤騎士よ、褒美に欲しい物を与えよう。何が望みだ？」

はあ、どこかに俺好みの女いないかな？ここで女が欲しいって言うたら軽蔑されるかな？

「あの、どんな願いでもいいんですか？」

「ああ、地位でも金でも女でもいい。」

よし、女の一択だな。

「俺は・・・『俺の嫁さがし選手権』を開催してほしい。」

「うむ？なんだそれは？」

「基本的には俺の嫁さがしですが、『知力、体力、美しさ』で俺の嫁を決定します。」

参加資格は未婚女性のみ。種別、年齢に関係なく参加できます。」

俺好みの美女に出会えないのなら、美女から俺のほうに来てもらえばいいんだ。

「ほほう、面白そうだな。」

「ええ、きっと盛り上がると思います。」

「よかろう、ではその選手権の開催権を与えよう。ただし、我も一枚噛ませてもらうぞ。」

「ありがとう、王様。開催は30日後の、この闘技場で行います。」

一応、落選者対策に未婚男性を集めて、恋人を探してもらうようにすれば皆幸せになれるんじゃないかと。」



「わかった、そのように国内全域に知らせよう。」

これで表彰式が終わった。俺の嫁さがしも順調に進むはずだ。

あと30日か、待ち遠しいな。

選手権開催まで城の個室が俺の住居になった。

うまい食事と綺麗な部屋。

ニート王に俺はなる！って叫びたいよ。

はい、強がりました。ごめんなさい。

本当は城下町に行ったり、探索とかしたかったんだけど、

「選手権の開催責任者に万が一があつては困ります。」

と、武闘会で倒したミノタウロスに泣かれては引き下がるしかないよ。

彼曰く、

近衛兵でもトップクラスの武を誇っている。

將軍以外に負けたのは初めてだ。

城外に出たい？止めてくれ、万が一があつたら俺が困る。

いや、俺は別に落選者から恋人探そうとは思ってないぜ。本当だ。

近衛兵つてモテるんだぜ。

いや、確かに近衛兵で未婚は俺だけだが、女性が嫌いって訳じゃない、

なんか、話すのが恥ずかしいって言うか、その、あの、緊張してうまく話せなくて。

やっぱり女性はお淑やかで可憐なのがいいな。何？胸がデカイ方がいいだろ？

ふん、大きい胸がいいならホルスタイン種とでも結婚しちまえ。

悪い、言いすぎた。無いよりはあつた方がいいよな。

ああ、おっぱいには男のロマンが詰まってるな。俺もそう思う。

ミノタウロスのアレクとは良い友人になつたと思う。

彼に魔族と人間が争っている理由を聞いたが、国の方針らしいとか答えなかった。

国の方針ね。機会があれば王様に聞いてみるかな？

選挙権開催まであと15日。

部屋から見える城下町は日を追うことに賑やかになってきている。

壁には俺の顔が描かれたポスターが貼ってあるのが見える。

アレクが言うには、武闘会開催時はムサイ野郎の揉め事が多く警備兵が大変だったが、

今は揉め事があると喜んで警備兵が飛んでいくらしい。女同士の掴みあいでおっぱいぼろりが、

頻発してるから警備に目を光らせているらしい。

・・・治安がいいのは良いことだ。警備兵には頑張ってもらわないと。

選挙権開催まであと10日。

未婚男性の数が思ったよりも足りない。未婚女性の半分にも満たない。

これでは未婚女性が残ってしまう。どうしよう？

「ん？どうした？」

ガウスと城内で会った。彼に相談してみるか。

「ちょっと困ったことが起きて。」

「困ったこと？」

「ああ、未婚男性が足りないんだ。何かいい案ないか？」

「んー、武闘会もそうだったが基本的に国が開催するイベントには特別な許可がない限り、

国に仕える兵は参加してはいけないんだ。

大会に参加して警備が疎かになっては目も開けられないからな。」

「なるほど、それなら未婚男性が足りないのも頷けるな。

なら、今回は俺の権限で当日は警備なしでいこうと思う。そうすれば参加できるな。」

「おいおい、兵がいなくて規律が守れると思うのかよ。」

「大丈夫。当日に問題起こした男は去勢し、女は無職の家なしと結婚してもらう。」

もちろん両方とも国を上げて盛大に祝ってやる。」

「・・・それは悲惨だな。」

「それでも逃げるヤツは、捕まえれば報奨金を出すってやれば、いいと思う。」

「・・・わかった。国王に掛け合ってくる。」

それから5日後には未婚男性の参加人数も増え、順調に全てが進んだ。

ついに当日が来た。

女性の参加者2371名、男性2295名。

少し女性が多いが仕方ないか。全員に必ず恋人が見つかる訳がないし。

開会式

参加女性は南側の観客席にいる。

「これより『第1回、赤騎士ダース・モール杯』を開催します。」

進行役のジーが舞台の上で拡声魔法を使って叫ぶ。

「知性、体力、女性の魅力で競いあって頂きます。」

勝者には赤騎士と生涯の伴侶になる権利が与えられます。」

舞台上にある審査員席には、

俺と魔王がいる。なぜか魔王は涙目だ。

「どうですか審査員の魔王様。」

ジーが気楽に振ってくる。

「うむ、今大会には我が娘と妻が参加しておる。

娘は良いとして、なぜ妻が参加しているんだ？

ああ、マリー！俺が悪かった！頼むから帰ってきておくれー！」

「えーっと、……モールさん一言お願いします。」

「今大会に参加する見目麗しい女性並びに勇敢な男性諸君。

俺がダース・モールだ。正直に言おう。

……ごめんさない。正直こんなに大きな大会になるなんて思っていないませんでした。

女性参加者が10人いれば良いなって簡単に思っていました。

そして、こんなに多くの人がこの大会に参加してもらって俺は幸せです。」

感動で涙が流れてきた。

「審査員の感動的な鼓舞ありがとうございました。それでは本戦を開催します。」

湧きあがる歓声。隣では妻の名を呼ぶ魔王。大丈夫かこの国？

「最初は × 問題です。」

第一門。ダース・モール氏の使っている武器は剣である。

と思ったら西側に、×と思ったら東側に移動してください。

女性たちが移動し始める。さすがに に行った女性は少ない。

「正解は×です。ダース・モール氏はスピアを使います。」

ジーが正解を言うと歓声が湧きあがった。

「 に移動した女性は退場をお願いします。」

不正解の女性が退場する。

「さて、第2問です。」

ダース・モール氏の武闘会での戦闘時間は合計で10分以上である。

なら西側に移動をお願いします。」

お、半分くらいが移動したぞ。

「正解は×です。戦闘時間は合計8分39秒でした。」

の席にいる女性が退場する。

「随分と人数が減りましたが第3問。」

ダース・モール氏の父親の名前はシディアスである。

と思っただら移動お願いします。」

一斉に湧きがるブーイング。当たり前だ。

ダース・モールの父親の名前は俺も知らない。

「半分以上の女性が移動しましたね。

さて、正解は？ダース・モールさんおねがいします。」

「・・・正解は×だ。シディアスは師匠の名前だ。」

落胆する声と歓声が起こる。

「人数も100人以下になりましたね。

次の問題は体力です。今、スタッフが全員に赤い帽子を渡しています。

・・・皆さん被りましたね。では、ルールを説明します。

スタートの合図で皆さんが被っている帽子を奪い合って頂きます。

自分の帽子を取られた者は失格です。1人3つ奪えば勝ち抜けです。

用意はいいですか？・・・始め！」

観客席で奪い合いの戦闘が始まっている。



うわ、服が破れてるよ。あっちは流血して倒れているぞ。

おお、頑張ってるオバサンいるよ。

凄い形相だよ。行き送れを貰うのは勘弁してくれ。

「はい、勝者が決まりました。人数は22人です。

この22名は知力、体力ともに甲乙付け難い女性たちです。

次は舞台上で魅惑のアピールタイムです。

このアピールタイムは一発失格もあるので発言と行動には十分注意しましょう。」

合格者22名が舞台上にあがりそれぞれ順番にアピールしてくる。

あるものは狩った獲物の数。

また、あるものは一晚を共に過ごした男性の数。

もちろんその場で失格にしましたよ。淑女じゃない女に興味はないし。

俺は家庭的な女が好きなんだ。

そして、残ったのは

帽子の奪い合いで猛威を振るった年齢不明のオバサン

オバサンに似た15歳くらいの少女

3メートルの身長の大女

頭に大きなリボンをつけたトカゲ女

下半身が蛇の泣き黒子の女

上半身は魚で下半身が女の人魚

骨

・・・なんだこりゃ？

ロクなのがない・・・

今は休憩中だが、最終候補を絞らないといけないな。

オバサンに向かって頭を下げている隣のおっさんの為にもオバサンは候補外にして。

牛女か・・・抱きしめられたら潰れそうだな。

牛女はアレクに紹介しよう。

残ったのは、小娘、トカゲ、蛇、魚、骨か・・・

骨は無理だな。色気がない。いや、肉がない。

人魚は・・・足はスラッとして色気たっぷりだけど、上半身が魚って何かの冗談か？

新婚旅行が竜宮城ってオチか？人魚も除外だな。エラ呼吸に興味はない。

トカゲか・・・爬虫類はノーサンキューです。

美人かもしれないが価値観が違いすぎる。よって除外。

小娘は・・・どう見ても魔王の娘だろう。母親によく似ている。

こんなのを嫁に貰ったらもれなく魔王の座も付いてくるってか？

胸もないし、除外だな。

蛇か・・・美人で胸もDだ。ここまでは良い。が、問題は下半身は蛇だ。

下半身が人魚のそれだったら迷わず決めるんだけどな・・・

そういえば、退場者に人間型がイッパイいたな・・・

俺、なんでこんな訳のわからない競争させてるんだろう？

その場のノリって怖いな・・・

今となつてはノリなのか、電波なのかわからんな・・・

あの時の俺に会えるならぶん殴つても止めてみせるよ。

ああ、誰を選んでも幸せな人生が送れない気がする。

## 第19話

さて、最終結果発表だ。

「それでは、赤騎士ダース・モール杯の優勝者を発表します。

ダース・モール氏、発表をお願いします。」

簡単に言っなよ、ジー。

「今回の優勝者は・・・」

候補者を見渡す。候補者、観覧席の全員が息を飲んで見守っている。

「いません！」

一瞬で湧きあがるブーイング。

「納得できん！うちの娘はこんなに可愛いのに選ばないなんて！なぜだー！」

隣で泣き叫ぶオヤジが詰め寄ってくる。

ええい、暑苦しい。

「説明しましょう。」

最終候補には魔王の娘、人魚、ラミアが残りました。

みなさん大変美しい女性ですが、人外の部分を見ると抱きたいとは思えませんでした。

そんな感情で結婚すれば幸せな生活は無いでしょう。

あと魔王の娘はあと10年後に再挑戦してください。俺はロリコンじゃないからな。」

人魚とラミアの表情はどこか納得してないな。

「わかりました。これならどうでしょうか？」

ラミアがそう言うのとラミアの下半身の蛇部分が光った。

すぐに光が納まると人間の足がそこにあった。

「なら、私も。」

人魚も上半身が光り、すぐに収まった。そこには人間の上半身があった。

「おお、すげえ。」

思った事が口に出てしまった。

人魚とラミアは人間に進化した。

ただし、人魚は見た目が60歳超えているような熟女？だった。

魔王の妻のほうが若く見えるな。

ラミアは完璧なダイナマイトボディだった。この瞬間、勝者が決まった。

「優勝はラミアの君だー！」

湧きあがる歓声。観客が立って拍手している。

俺のマグナムも全力で天を向いている。痛いぐらいに。

閉会式も終わった。

俺を含め合計2291組のカップルが誕生した。

来年はベビークラッシュかな？

10日間は城で帰郷クラッシュを避けて、落ち着いたら彼女の村に結婚報告に行こうと思う。

なぜ10日？

2日ほどで枯れたが彼女が凄くてそのあとに絞られつづけたからだ。

ラミアの彼女はジェニー。泣き黒子とウェーブの黒髪が背中まである俺好みのDカップレディだ。

最初は見た目で選んだが、一緒になって彼女の性格が分ると本当に良い娘を嫁に貰ったと思う。

家庭的で優しくいつも明るく笑顔を向けてくれる。いまでは俺の方が彼女に夢中だ。

ジェーニと結ばれて8日目。

朝から城内が騒がしかった。

兵士の一人に聞いたが、

南の方にある村が人間に襲われ皆殺しにされた。

人間が魔族の村を襲う？

人間は魔族に比べて筋力、魔力ともに半分以下だ。

集団で襲っても太刀打ち出来ないだろう・・・

ならば、魔族が人間を攻撃したから報復している・・・

それも、違う。

国の方針としては人間を殺せだが、今まで一度も人間に危害を加えようと出撃した者はいない。

それどころか、魔族のイメージしている人間は

『魔族以上の身体能力と魔力を持っている殺戮者』



になっている。

初めてガウスにあった時も彼らは人間の出現に備えて国内を警備巡回していたと聞いた。

双方の余りにも違いすぎるイメージ。

人間の領内で人間に攻撃している魔族。

魔族の領内で魔族を攻撃している人間。

これは調査を行うべき事だな。

俺はジェーニに南の壊滅した村を調べに行くと伝えた。

彼女は不安な表情だったが、俺達の未来の為に承知してくれた。

ガウスの軍団に付添い南の村に向かう。

馬車で13日後、廃墟に変わり果てた村に着いた。

村の中は魔物が我がもの顔で闊歩していた。

死んだ魔族は魔物に食われ無残な状態でした。

兵士たちは魔物を殲滅し、亡骸を村の広場に埋葬した。

この村出身の兵士は、怒りに震えていた。

友人家族が殺されればそうなるな・・・

魔族に牙を向けた魔物。

人間のイメージでは『魔族の連れている物』で魔物

魔族のイメージは『魔族を狩る物』で魔物

魔物は人間、魔族の両方に攻撃している・・・

どうなってるんだ？

埋葬と調査が終了し、ガウス達と一緒に城に戻って来たが疑問の答えが見つからない。

もしかすると、一部の魔族、人間が行っているかもしれない。

考えても仕方ない。

ジェーニと一緒に結婚報告に向かうか。

ジェーニの村に帰郷する。

馬車で西に3日で行く予定だ。2人きりの旅行だ。

村に着くまでの3日間はジェーニに地理を教えてもらった。

荷物から取り出した地図にジェーニが指を指しながら説明してくれる。

アジア大陸によく似た大地で北が魔族支配、南が人間支配の土地。

東に日本があったがジェーニは良く知らないそうだ。

人間と魔族の支配する地域の境界には大きな渓谷がある。

渓谷というよりも大地の亀裂にちかい。

幅は100メートルから600メートル。

深さは不明。調査で降りた者は帰って来なかったらしい。

唯一、橋が掛かっている場所があるが人間と魔族、両方側に頑丈な砦が建てられているらしい。

観光名所になっていて、その砦で働いている者は憧れの対象になるらしい。

・・・嫉妬してないよ。

他にも一般常識を教えてもらった。

4 魔將軍、それぞれの軍団を纏める將軍。武力、指揮能力、カリスマ性が高い人。

副將、將軍の補佐官。主にデスクワークが業務。どの將軍も頭が上がらないらしい。

8 騎士、將軍に武力で優るとも劣らない人。次期將軍候補。エリート中のエリート。

説明してくれるのは有り難いけど、ジェーニの胸元にある存在感のあるメロンが揺れてて集中出来ません。

これよりスーパーニャンニャンタイム入りまーす。

ジェーニの村には夕方頃に着いた。

到着し挨拶も上手く出来なかったが村人全員から大歓迎された。

8 騎士に嫁いだとなれば安定した生活が保障されている。

と、周りの女性が羨望の眼差しを向けていた。

男たちは俺の将来性を考え自分売り込む者やジェーニとの結婚を祝福してくれる人で溢れ返っていた。

いろんな人に祝福されて俺たちはすごい幸せです。

この幸せを分けてあげたい位です。

ジェーニの両親は病で他界していたので、ジェーニは村長宅で育てられた。

村長の家で結婚報告とジェーニを幸せにすると宣言したら、窓の外から歓声が上がった。

覗くな。

夜は村人総出の結婚式だった。

最初に村長の挨拶、ジェーニの挨拶、俺の挨拶。

その後に誓いの言葉。

内容は何でも良らしく、ジェーニは

「あなたを見つめ、あなただけを想い、あなた一人を永遠に愛し続ける事を誓います。」

そんな事、見つめられて言われたら 暴走しますよ？

「俺は・・・俺は・・・あゝもう何も思いつかねえよ。

ジェーニ！君が好きだ！愛してる！」

つい思った言葉が出ちゃった。後悔も反省もしないぜ。

その後は大宴会だったらしい。

俺たちは誓いの言葉のすぐあとに村長宅に戻り愛し合った。

本当の俺の事を伝えるべきか迷っている。

魔族でも人間でもない俺を彼女は受け入れてくれるのだろうか？



## 第19話（後書き）

こんな自慰小説を読んで下さってありがとうございます。



## 第20話

ジェーニの村で平和で幸せな日々を謳歌していた。

そんなある日、城から伝令がきた。

北部の村に人間と火竜が出現して暴れている。

至急、城に戻り部隊に編入せよ。

俺はジェーニと城に向かった。

帰路の途中、キャンプでの食後にジェーニに本当の事を告げた。

彼女には全てを知ってもらいたかったし、隠し事はしなくなかった。

俺がこの世界に來た経緯。

人間でも魔族でもない存在。

ジエーニはそつと告げた。

知っていますよ。

初めて結ばれた日に女神様が教えて下さいました。

これで、本当の夫婦になりましたね。

彼女は一筋の涙を流した。

ああ、彼女には一生勝てない。

心の底から思った。

俺のすべてを受け入れてくれた彼女がとても愛おしい。

その夜、本当の姿で結ばれた。

城下町に入り直ぐに衛兵に俺の屋敷に案内された。

騎士には屋敷が与えられ、そこが住居になるらしい。

ジェーニと2人で住むから小さい家でもいいかな？

なんて思っていたら、案内されたのは立派な屋敷だった。

門から玄関まで100メートルもある2階建の煉瓦造りの大きな屋敷だった。

屋敷に入るとメイドが20人ほど並んで出迎えてくれた。

全員が、人間タイプだった。

背中に羽が生えてたり、猫耳犬耳だったり、スカートから尻尾が出ているが気にしない。

俺はジェーニを残し、城に向かった。

ガウス達の居るはずの宿舎は静かだった。

俺の到着を待たずに先行したらしく、俺を待っていたのは

『アライダン・メバリー』

小物臭さ120%の男だ。

彼は自意識過剰のキザ男だが、8騎士への候補の1人らしい。

白騎士、黒騎士、青騎士、赤騎士、金騎士、銀騎士、灰騎士、薔薇騎士

今は、黒騎士、青騎士、金騎士、銀騎士、の4騎士は空席らしい。

彼らが人間に倒されてからずっと空席でアライダンも狙っているとか。

北部の村に行く馬上でアライダンからこの話を聞いた。

彼の一族は淫魔の中でも古い一族で身体能力に優れているとか。

他にも色々と言っていたが全て聞き流した。

自慢話だと思うが、適当に返事してたから覚えてないや。

北部の村が見えてきた。

村の到る所から煙を上げていた。

人間がいるのなら村の全滅も覚悟していた。

村に到着すると多くの怪我人がいた。

すでに戦闘は終わっているようだ。

村の中心部に着くとガウスが豪華な鎧を着た兎耳の女性と話をして  
いた。

「ガウス、到着したぞ。」

「お、やっと来たな。モール、こっち来い。」

「どうしたんだ？」

「こちらの女性は4魔將軍の1人『セシリア・ミヨン』だ。

セシリア、こいつが噂の赤騎士『ダース・モール』だ。」

4 魔將軍に女性がいたのか。美人でスタイル良いけど、腰に付けてるのが鞭って・・・

そっちの趣味の人ですか？

「君が噂の赤騎士か。随分と強いらしいが、今度手合わせをお願いしたいものかな。」

「はい、機会があれば手合せお願いします。・・・で、ガウス状況は？」

「おう、人間の襲撃時にセシリアの部隊がこの近くにいてな。」

すぐに駆け付けたから村に怪我人はいるけど死人はいねえぜ。」

「ああ、あと数時間遅れていたら全滅だっただろう。」

「んで、人間はいつも通り消えて魔物が襲ってきたんだが、

こいつがデッカイ火竜でなんとか追い返した所に俺達が到着したんだ。」

「ああ、救護には感謝している。それで怪我人の多い私の部隊は村の復興を手伝っている。」

「俺らの部隊は無傷だから、火竜の追撃に行こうとしていた処で俺が来たんだ。」

「なるほど、状況は理解した。火竜はどれくらい大きかったんだ？」  
全長1キロ超えてたら誰も倒せるとは思えないな。

「そうだな・・・モール、君は城下町にある宿屋を知っているか？  
高さは同じくらいだ。」

たしか高さ25メートルぐらいだったような。

「わかります。あの大きさですね。」

「ああ、今までで一番の大物だろう。」

10メートルを越えれば大物なのにその倍だからな。ガウス、油断するなよ？」

「おうよ、俺たちは最強を自負するガウス大隊だぜ。火竜の1匹や2匹余裕だぜ？」

「ガウス、膝が笑ってるぜ？」

俺の指摘に、ちょっと冷えてきたと強がりを書いてその場は解散になった。

俺の後ろにずっといたアライダンは誰の気にも止められなかった。

やる事がない俺は村の中を歩いて散策していた。

家屋はほとんど焼け落ちていて村人は簡易テントに住んでいる様子だった。

巡回している兵士からの翌日の早朝に火竜の追撃に向かうと。

手負いの敵は恐ろしい。

ガウスが弱い訳ではないが、おそらく負けるだろう。

敵は死に物狂いだからな。

ジーがいれば戦術を練って倒せたかもしれないが、ガウスに戦術を使って倒すのが想像できない。

ガウスには死んで欲しくないな。

どうするか・・・

深夜、村を静かに抜け出すことに成功した俺は火竜を探す為に馬で走り回っていた。

逃げた方角が分らないので、生体探知モードにして周囲5キロを確認しながら移動していた。

太陽が見え始めてきた時、やっと火竜を見つけた。

岩山の影で隠れていた。普通に探しては見つからなかっただろう。



俺は馬を下り気配を殺しながら近づいていった。

赤い燃えるような皮膚をした火竜は寝息を立てていた。

体に多くの傷があり、所々には矢が刺さっている。

右腕にスピアを持ち接近する。

狙うは頭部。脳を破壊すれば倒せるだろう。

火竜との距離が10メートルになったので、スピアを頭部に向けて投げようとして構えた。

やり投げのような投棄スタイル。

火竜に狙いを付けるため火竜を見ると目が合ってしまった。

俺を睨むように見つめる赤い瞳。

火竜が大きく口を開けると火の球を吐いた。

フォースを使っていたので火球が来ることは理解していたので、横に跳んで避けた。

火球は俺のいた場所の地面に当たり大きな音を立てて爆発した。

当たったらいタイだろうな・・・

火竜は俺が避けた隙を見て上空に飛び上った。

上空10メートルから火球を連続で吐いてくる。

俺はフォースを使い連続で避ける。何度でも避けてみせるさ。

避け続けて1時間は経っただろうか・・・

火竜もなかなか狡猾だ。基本は遠距離からの火球攻撃。

避けられなくなってくると、尻尾でトドメを刺しにくる。

もちろん、フォークを使っているのでギリギリだが避けられる。

俺も接近してきた時に攻撃するが、尻尾で遮られて致命傷には程遠い。

お互いが決め手を欠けている時に場が動いた。

上空で火竜が遠くを見ている。視線の先には・・・ガウス達がいた。

ガウス達はこちらに気が付いていない。

火竜はガウス達に向かって飛んで行った。

俺はバーニアを使い、文字通り飛んで追いかけた。

すぐに火竜との差が無くなってきた。もう少しで尻尾を掴めそうだ。

火竜はチラリと後ろにいる俺を見た。

その目が笑っているように見えた。

火竜はガウス達に向かって火球を吐きだした。

クソッ！ガウス達はまだ気が付いていない！

このままでは死人がでるぞ！

俺は飛んでいる向きを火竜から火球に変えた。

そのまま火球の前に回り込みガウス達を庇った。

爆発音と回転する世界

そして強い衝撃

爆発で吹き飛ばされて地面に叩きつけられたようだ。

全身が超イテエ。

青い空が眩しいぜ。なんて思ったら、火竜の顔がすぐそばにあった。

食われる！と、思った瞬間腰から上の上半身を噛みつかれ食い干切ろうと俺を振り回している。

振り回される口内は何も見えず悪臭が凄かった。

右腕は奥歯に挟まれていて動かせない。使えるのは左手のみ。

咄嗟に左手をエンジンカッターに変形させた。

口内に電気ノコギリが回転する音が聞こえた。

準備完了だ。

そのまま左手のエンジンカッターを喉の上部から頭頂部に向けて切り裂いていく。

俺を振り回す力は強くなり、口内が血で溢れる頃に火竜は地面に倒れ息絶えた。

顎を強引に開けて口内から脱出した。

あゝしんどかった。

地面に座り込み倒した火竜を見る。

全長30メートルは超えてるぞ。

すぐにガウス達が現れた。

そして最初にガウスからの説教。

単独で竜退治は自殺行為だ。

新婚早々に死ぬ気か？

残された嫁はどうするんだ？

ってガウスが俺を涙目で怒った。

ガウスが最後に、

今すぐ嫁に謝ってこい

って言うから素直に従い城に馬で向かった。

馬で戻る途中に火竜を見るとガウスの兵達が解体作業をしていた。

素材取りか・・・

城に戻った俺は衛兵に今回の事を詳しく伝え屋敷に帰った。

屋敷でジェーニに危険な事をしたと謝った。

ジェーニはすぐに謝罪を受け入れてくれた。

そして、この世界の不思議について相談した。

魔族の領土から出られないのに人間の領土内で魔族が魔物を操り虐殺行為をしている。

魔族以下の身体能力と魔力しか持たない人間が魔物を操り魔族を虐殺している。

この矛盾を解決するために旅をしたい事を告げた。

ジェーニは考える素振りも見せずに

「いいですよ。その代り私も連れて行っただけですよね？」

予想外の答えに俺は返事が出来なかった。

## 第21話

ジエーニと一緒に危険な旅をするのは反対だ。

俺1人だと竜も危険ではないし、無茶もできる。

まあ、今すぐに説得しなければいけない訳でもない。

とりあえずは、飯食って寝るかな？

夕食時に軽く一人旅がしたいと告げたが却下された。

むう、どうしたものか？

ジエーニが自分の身を守ればいいが・・・

あれ？彼女って戦闘できるのか？

そういえば、聞いた事ないや。

「え？私ですか？直接戦闘は苦手ですけど、魔法は得意ですよ。

属性は火と風ですが、土も練習中です。」

おお、マンモスラッキー！

体力、運動神経は大丈夫だから連れていけるな・・・

「わかった、魔法が使えるなら後方支援を頼む。

それじゃあ、ちょっと危険な新婚旅行に行こうか。」

明日の朝一番で魔王に報告すれば昼過ぎには出発できるかな？

東方がどうなっているのか見てみたいし、人の友人にも会いたいな。

あゝ楽しみでしょうがないや。

翌日、新婚旅行と北の村についての報告をするために城に向かった。

すぐに謁見の間に通された俺は魔王に北の村での出来事について報告した。

「報告します。」

北の村での人間の急襲ですが、人間は火竜を放ち消えました。

セシリア將軍の部隊がこの近くにいたおかげで迅速な対応が取れ、

村に怪我人はいませんが死人はいません。

セシリア將軍の部隊が人間が放った火竜を追い払った後、

ガウス將軍の部隊が到着し怪我人の救護と村の復興を支援を開始しました。



その翌日、早朝に火竜を急襲し退治に成功しました。

以上が報告になります。」

嘘は言っていないよ。

「火竜か……。よく倒せたものだな。

今回の任務参加者には何か褒賞を与えよう。

ダース・モール、御苦労であった。下がり休むがよい。」

「もう一つ報告があります。

魔族を襲う人間の調査の為、旅に出たいと思います。」

「うむ？当てはあるのか？」

「人間の領地に行き情報を集めます。

妻も連れて旅行者の振りをすれば怪しまれないかと。」

「そうか、お前の事だから他にも色々考えているのだろう？

お前のおかげで国内では結婚者が増えていると報告がある。

クククッ、来年はベビーラッシュかもな。」

「では、調査にいつでもよろしいのでしょうか？」

「ああ、かまわん。行つて来るがよい。」

「ありがとうございます。それと、旅費の方を幾許かお願いしたいのですが・・・」

「わかった。お前の居に届けよう。」

「ありがとうございます。それでは準備ができ次第旅立ちたいと思います。」

そう言つて俺は城を後にした。

屋敷に戻ると旅の支度が終わっていた。

準備万端すぎるよ、ジェーニ。

馬に繋がれた小さな馬車には生活道具が積み込まれていた。

暫くすると、衛兵がやってきて小さな袋を渡された。

中には、砂金が詰まっていた。

なるほど、貨幣価値が違う場合を想定しての砂金か・・・

ありがたく使わせてもらおう。

これで準備が整った。

俺たちは馬車に乗り込みメイド達に屋敷の管理を任せて旅立った。

城を出て20日目。

人間と魔族の領の境にある砦に着いた。

人間側に向かう橋は封鎖されて行くことが出来なかった。

まあ、予想通りだ。

砦で食糧を補給し夜まで観光して過ごした。

深夜、砦から渓谷沿いに馬車で移動する。

・・・対岸までは400メートル。

生体探知モードで周囲5キロに魔族と人間の姿が無いことを確認する。

大丈夫だな。

馬を近くの木に繋ぎジェーニの乗った馬車を対岸の人間領に運ぶ。

対岸に着くと、ゆっくりと馬車をおろした。

中にいるジェーニも荷物も無事だ。

もう一度魔族側に戻り馬を抱えて人間領に運んだ。

途中で暴れるから落ちそうになったよ。

ジェーニが馬を繋げている間に周辺を生体探知モードで警戒する。

・・・誰にも気づかれた様子はないな。

エネルギー残量は飛行で減っているが、それでも70%以上ある。

問題ないな。

外見を元に戻してっと・・・

俺とジェーニは馬車に乗り、取りあえずは街道を目指した。

暫く進むと街道に着いた。街道を南に進んだ。

北に進むと砦に行くからね。

南に2時間ほど進むと近くに小川の流れるキャンプが出来そうな場所があった。

馬を休ませる為に今日はここまでかな？

ジェーニは疲れているのか、すでに寝ていた。

馬を馬車から外し手綱を木に括りつける。

バケツを持ち小川から水を汲み、馬に飲ませる。

たっぷりと水を飲む馬はなかなか可愛いよ。

俺は馬から離れ、馬車の近くの倒木に腰を掛けて周辺を生体探知モードで調べた。

うん、何にもない。俺も休むかな？

俺はジェーニが寝ている馬車に入り就寝した。

## 第22話

気が付くと白い部屋にいた。何となく見覚えがある。

ここは、神様？に会った場所かな？よく似ている。

って真っ白で同じかわからないけど。

でも何で？俺死んでないよ？

「ああ、お前は死んでない。」

後ろから男の声がした。慌てて振り向くとそこには

ジャン・クロード・ヴァン・ダムそっくりのマツチヨな男がいた。

空中に浮かぶテレビが画面の中に。

「それは違う。俺が奴に似ているんじゃない。奴が俺に似ているんだ。」

なるほど。

「まあ、そんな事はどうでもいい。お前の今の状態を説明しよう。

今のおまえは、オリジナルのコピーだ。オリジナルは今頃は何も知らずに旅を続けているだろう。」

コピー？

「コピーと言っても100%おまえのままだ。記憶も感情も思いも何もかも同じだ。」

うん、我思う、故に我あり。って事か？

「微妙に違うが納得できたならそれでいい。」

で、なんで俺をコピーしたの？

「今、神界ではあることが流行っている。それは、ある物語に全く別の者を入れて物語を改編していく事だ。」

その「別の者」に俺が選ばれたという訳か。

「ああ、理解が早くて助かる。それで、おまえには別の物語に行ってもらうが、今のおまえの能力を言葉にすると、

剣士、肉体強化（金属）、飛行だ。前回ここに来た時に能力を貰っただろう。俺もおまえにくれてやる。」

おお、感謝感激僕秀樹です。

「…まあ、いい。おまえの液体金属内を少し弄ってナノマシン入れる。これで「増殖」が出来る。」

増殖はナノマシンの増加でおまえが2つに切られてるしよう。そうするとおまえは2人に増えることが出来る。

その2人はおまえであり、1つの意思で動き2人とも本体だ。例え

片方が溶鉱炉で消滅しようとも、もう1人がいれば問題ない。おまえの髪の毛1本でもあれば復活できる。」

うははは、俺1人で何人でもなれるなら俺の1人軍団できるじゃないか。

「問題なくできるな。全ての意思が1つに纏まり作戦の立案から発動、実行までタイムラグなく行える。」

で、もう1つはエネルギー補給の変更だ。今までは有機物からの補給だったが、これからは酸素からの補給になる。簡単に言うと呼吸をしている限りはエネルギーが尽きない。」

飯要らずですか？

「食事は嗜好品として楽しめ。そういえばおまえのオリジナルの結末だが、問題をうまく片付けて幸せに人生を終わらせたぞ。」

ええ、もう少し詳しくお願いします。

「ああ、空中大陸に住む背中に白い翼を持つ自称「神族」が自らを崇高なる者とし、他の生き物を見下していた。」

それが、転移装置を作り魔物を作り、人間と魔族を抹殺しようとしていた。自分たちは神なのだから正しいと思い込み……

お前は旅の途中で人間と魔族との協力体制を作り「神族」のいる空中大陸で神族の軍団を倒し、指導者を見つけた。



その指導者は古代文明が作ったコンピュータで元は人間と魔族がまだ別れて暮らす前の都市管理システムの中樞だった。

神族とは元々システムが作った都市のメンテナンス用の生物だった。それを知った神族は空中大陸の動力部の暴走を行い全滅。

おまえは英雄となり、ハーレムを作ろうとしたが妻に怒られ諦める。そのあとは妻と2人で名前を変え地方で静かに暮した。

長い月日経ち妻は死に子供たちは1人立ちし、子供と言っても養子だがな、おまえはエネルギーの補給を断ちエネルギー切れで消滅。もちろん爆発したがな。」

爆発オチですか。まあ、良い人生だったなら良いんじゃないのかな？

「早速だが行ってもらうが、実はまだ行く先の世界が決まっていな  
い。他の神は希望を聞いていたりするが俺は違う。俺はこれを使う。」

おお、サイコロですか。

「これには色々な原作が描かれている。

北斗の拳、ネギま、fate、ガンダム、学園黙示録、そして今回の当たり目。」

当たり目？

「当たり目は何が起きるか分からない。

聞いた話だと、神の能力を貰った、性別の逆転、男の娘化、主人公側と敵対する勢力しか仲良くなならない、

憑依による移動、原作後の世界：など色々と訳の分らない事がランダムで起きる。」

うへえ、当たりたくないな。

「さて、それでは振って貰おう。」

サイコロ投げってつと。何がでるかな、何が出るかな

「止まった目は〜〜f a t e！」

よし、当たり目は避けた。

「f a t eは知ってるか？」

アニメなら見ましたが、原作知らないです。

「そうか、原作知らなくても物語には強制参加になる。おまえは最低でも3つの物語を超えなければならぬ。」

物語が終われば次の物語に行くことになる。物語を越えれば特典を1つあげよう。

それと、おまえはコピーだが魂はある。終えた物語が多ければ転生時に多くの特典がもらえる。

幸せな来世の為に頑張ってくれ。」

来世は特典もらってハーレム目指すかな？その為には生き残らないと。

「さあ、時間だ。頑張って俺達を楽しませてくれ。」

ああ、がんばるよ…

急に眠くなってきた…

おやすみ…パトラッシュ…

目が覚めた。見えるのは星空。体を起こし周りを見る。

「ここは学校の屋上かな？と、言う事は最初のランサーとアーチャ

「の戦闘か？」

キンキンと金属のぶつかる音がする。見にいこうと思うが体が動かない。

膝が笑うとか、足が痺れてではなく、全く動かない。

2時間ほどで体が動くようになった。

今は自分の顔と太った体で黒いスーツと白いシャツ、ネクタイはしていない。

「そろそろ動くにしても、どうしたらいいんだ？まずは物語を確認しよう。」

シロウが殺されて生き返ってセイバーよんで稟と協会に行つて帰りにバーサーカーと戦闘する。

物語がどんな状況かわからないけど協会に行けば会えるかな？協会はどこだ？」

学校を出る前に屋上に髪の毛を1本手すりに結んでおく。

学校を出て辺りを散策と言う名の迷走をしていると駅前に出た。

駅前の交番で協会の場所を聞き親切に簡単な地図を書いてくれた。

協会に行く途中にバーサーカーとイリヤを遠くに見つけた。

デカイ。100M以上離れているのに大きいと理解できる。

そしてバーサーカーとセイバーが戦闘している。

バーサーカーの1撃をもらえば致命傷になるのは岩剣での攻撃を見ればわかる。

気配を殺してイリヤの後ろに立つ。後ろから肩を叩き、肩に手を乗せた状態から人差し指を立てる。

振り向いたイリヤの頬に指が刺さった。

「なんなのよ！バーサーカーこいつもやつつけちゃえ！」

イリヤがバーサーカーに指示を出す。

「下がりなさい。死にたいのですか！」

セイバーが俺に向かって叫ぶ。

バーサーカーがこちらに向かって走ってくるので横に動いてイリヤと距離を取った。

バーサーカーが俺に向かって剣を振り下ろすが俺はフォースを使い剣を横に避ける。

バーサーカーは剣を横に払うが俺は空中にジャンプして避ける。

足元に剣が過ぎた瞬間にバーサーカーが頭突きをしてきた。

「グッ!!」

頭突きが直撃した俺は5Mほど後ろに転がり倒れた。

「やった!…バーサーカー?!」

イリヤがバーサーカーを見て驚いた。バーサーカーがの口から喉に向かつて槍が刺さっていた。

バーサーカーが片膝を着き左手で槍を抜いた。バーサーカーは槍を投げ捨てると俺を睨みつけた。

イリヤも俺を睨みつける。

「あなた何者?バーサーカーを1度殺すなんて何所の人間かしら?」

俺は立ち上がりながら答えた。

「俺か?俺は俺だ。綺麗なおねーちゃんが大好きな普通のエロい男だ。」

「私が聞いているのは所属よ!あなたの性癖は聞いてないわ!」

イリヤが腕を組んで怒りを現わしている。バーサーカーは俺に警戒をしながらもセイバーにも警戒をしている。

「詳しいことが知りたいか?だったらベットの途中でなら話してやる。君の場合あと15年は必要だけだな。」

「！！！！バーサーカー！セイバーはいいから彼を殺して！！」

バーサーカーが雄たけびを上げながら突進してくる。

「おっと、怖い怖い。怖くて漏らしそうだ。」

俺は半笑いで大きく跳びあがりそのまま飛行した。バーサーカーを飛び越えて士朗たちと合流する。

「あんた何者よ？飛空魔術なんて使えるなんてどこのサーバント？」

地面に着地した俺に凜が警戒しながら尋ねる。

「ひとつ言っておく。この世には絶対なんて言葉はない。それは知らないが故の固定観念である。」

「なるほどね、あんたの事は教えてくれないのね？」

「俺は君たちの敵ではない。それは約束しよう。今はバーサーカーをどうにかしないとなっ！！」

目前まで迫ったバーサーカーから左手で稟を突き飛ばし右手に隠し持っていたプラズマソードの柄を握り込み刃を出す。

ヴォンと音がして青く輝く刀身が現れた。

バーサーカーの持つ岩剣とプラズマソードが交わる瞬間、プラズマソードが音もなく岩剣を切り裂いた。

「まだやるかい？これ以上は殺し合いになるぞ。」

イリヤに顔を向けて尋ねた。

「バーサーカー、帰るわよ。」

バーサーカーは俺を見つめた後、イリヤに従うように帰って行った。

「あなたのその剣は何なのですか？」

セイバーが不審そうにおれに訪ねてきた。

「詳しくは言えないけど、炎を出す剣であるだろう？刀身があつてその周りに炎が纏う感じの。」

炎の刃で切るなら、炎を圧縮して刃にすればと、考えられたのがこの剣。」

「なるほど、だから岩剣も切れたんですね。」

セイバーが目を輝かせながら言ってきた。

「で、あんたは何者なのよ？」

凜が腕を組んで聞いてきた。

「俺は山本二郎、身長40メートル体重3万5千トン。必殺技はスぺシウム光線だ！」

「おかしいわよ！どこの巨人よ！」



「落ち着け。心に余裕がない者は胸にも余裕がないって言うだろ？」

「言わないわよ！……！」

凜が俺を殴ろうとするが俺は軽く避ける。それに怒った凜がまた殴ろうとするが避ける。

避け続ける俺に凜が諦めた。

「で、俺は自己紹介したが君たちはしてくれないの？」

「ああ、俺は衛宮士郎だ。こっちはセイバー。」

士郎がセイバーを紹介するとセイバーは頭を頷いてみせた。

「私、は、遠坂、凜、よ。アーチャー。」

息を切らせながら凜が自己紹介を始めた。そして、何もない空間から黒い肌の白髪の若い男が現れた。

「アーチャーよ。」

凜が紹介するがアーチャーは俺を睨むように見てまた消えて行った。

「まあ、いいや。で、君たちはこれからどうするの？……聖杯戦争に参加するんだよね？」

「……知っているのね？」

凜が俺に尋ねる。

「ああ、俺は魔術師でもサーバントでもないが、この聖杯戦争に乱入する。」

「あなたは聖杯に関係ないのに参加するんですか？」

今度はセイバーが聞いてくる。

「俺にとっては聖杯なんて価値がない。聖杯を取る過程にこそ価値がある。」

「そうですか、死ぬかもしれませよ？」

「大丈夫、俺は死なない。」

セイバーの目を真直ぐ見つめて言う。

「わかりました。その覚悟、最後まで見させていただきます。」

「で、この後どこいくの？俺も参加していい？」

俺は凜に聞いてみる。

「ええ、不本意ながらバーサーカーを退けた戦闘能力は欲しいわ。」

「衛宮君は俺が参加しても良いと思うか？」

「えっ…ああ、いいと思う。山本さんなら心強い。」

「あそうか、ありがとう。早速、士郎の家に行って作戦会議だ。」

「ちよつと、私は士朗みたいなヘッポコとは組まないわよ。」

凜が腕を組んで不機嫌に言う。

「遠坂、君は何を言っているんだ？バースーカーから2人一緒に襲われたよな？」

2人が同盟を組んでいるとイリヤは思っているだろう。

アーチャーは怪我でもしてるのか？そんな時にバースーカーに襲われればあの世逝きだぞ。

近くに俺かセイバーがいれば大丈夫だろう？

それに遠坂は何か大事な時にヘマをしそうだし、

そんな時に衛宮君がフォローすれば大丈夫だろう。」

凜は心当たりがあるのか唸っている。

「さあ、衛宮君さつさと行こう。」

衛宮邸に着き居間で休憩。お茶を飲みホッと一息。

「で、これからどうするの？」

凜が俺に聞いてくる。

「まず寝る。朝起きて飯食う。学校行く。遠坂と衛宮君は学校と登下校時に調査。一般人から怪しまれない程度で行う事。」

あと、出来たら放課後も学校内の調査をしてくれ。帰宅後、作戦会議。夜に調査もしくは殲滅を行う。でどうだ？」

「良いんじゃないの？」

「ああ、俺も良いと思う。」

「俺は授業中は学校周辺の調査を行う、登下校時は学校から離れた場所を調べる。セイバーとアーチャーは家で待機、もしくは透明になつての護衛。」

凜と士郎が頷いて答えた。

「んじゃあ、今日はもう寝よう。」

「俺と遠坂は離れを使うが、衛宮君。セイバーを襲うなよ。」

俺がにやにやしながら言うと、

「しませんよ！」

顔を赤くして否定しても説得力がない。

「まあ、高校生の時は俺も頭の中の10割はエロい事考えてたからな。」

「10割って全部じゃない！」

凜がいいタイミングで突っ込んでくる。

「まあ、細かいことは気にするな。んじゃあ、おやすみ。」

俺は先に部屋に入った。明日の事を考えなければならないからな。

原作では、

士朗と凜の追いかけて。

ライダー、士朗を襲う

士朗と凜の同盟

の3本がメインだったけ？

とりあえず、明日は放課後に士朗がライダーに襲われるから助ける。

あしたは結構楽かな？

朝が来て目覚める。

居間に向かうと台所から包丁の音が聞こえてくる。

居間に入ると、凜がいた。

「おはよう、遠坂。」

「…おはよう」

朝からテンション低い。台所に向かい士朗に挨拶をする。

「おはよう、衛宮君。」

「おはようございます、山本さん」

「おはようございます。」

士朗の隣で朝食を作っていた美少女も俺に挨拶をしてくれた。

「おはよう、可愛い子だね。士朗君の彼女かな？」

「違いますよ、彼女は間桐桜って言って毎日食事を作ってくれる後輩なんだ。」

「そうかそうか、結婚を前提に付き合っているのかい。」

「話聞いて下さいよ！」

士朗と桜は顔を真っ赤にしながら反論するが俺は全く相手にしない。

俺はニヤニヤしながら台所から居間に向かった。

居間では朝から機嫌の悪そうな凜がテレビを見ていた。

テレビを見ているといつの間にか食卓には朝食が並んでいた。

「純和風の美味しそうな朝食だな。」

「見た目も大切だけど、一番重要なのは味よ。」

凜が呟く。

「……いただきます。」

…美味しい。

これなら美食亭のお方も唸るぞ。

不意に玄関の開く音がした。

ドタドタと廊下を走る音。

そして、勢いよく開く戸。

「おはよー！土朗！」

俺は大きな声で叫ぶ彼女の存在を今まで忘れていた。





## 第23話（前書き）

一部グロ表現あり

## 第23話

「おはよー！土朗！」

元気よく居間にも入ってきて食卓に座る女性、藤村大河。

そのまま、食事を始めた。しかし、何を思ったのか急に箸が止まり、腕を組んで考え出した。

「なんで遠坂さんがここにいるのよー！！」

勢い良く吼える。まるで虎のようだ。

そのまま、凜が言い包めて大河は納得半分不満半分で一先ず落ち着いていた。

「それで、あなたは？」

俺はフォースを集中させて食卓台の下から大河に向かってかざして話しかけた。

「おいおい、俺を覚えてないのか？まあ、一度会っただけだから仕方ないか。」

俺は、10数年前にキリツグさんと何度か仕事をした仲だ。その後、何度かここに遊びにきているぞ。

もちろん、小さかった君にも土朗君にも会っている。忘れたってひ

どいなあ。」

フォースを使い心理操作をする。

「ごめんなさい。すっかり忘れてたわ。もう、しっかりと申しだしたわ。本当にお久しぶりです。」

大河が頭を下げて謝った。その姿を見ていた士朗が驚いた顔をしていた。

「ええ！俺と山本さんって会った事あるの？」

士朗が大きな声で聞いて来るが俺は士朗に、あとで説明する。と伝えた。

「そつえば、俺の事を言っていなかったな。俺は山本二郎。年齢不詳の神秘とロマンを愛する冒険家だ。」

「私は藤村大河です。教師をしています。」

「間桐桜です。」

「ああ、よろしく。それと、俺も暫らくこの屋敷に滞在するからヨロシク。」

今は疲れて休んでいるツレもいるか、そつちもよろしく。」

不自然にならない様にセイバーの存在を伝えておく。

「その方は大丈夫なんですか？」

桜が心配しながら聞いてくる。

「心配いらないさ、彼女は長旅で疲れているんだ。腹が減ったら起きてくるだろう。」

「それで「あーーーーー！！！！今日は職員会議で早く行く日だったー！！！！」

大河が絶叫しながら部屋を飛び出して行った。

「センパイ、私も朝練にいきますね。」

桜も席を立ち部屋を出て行った。士朗も桜を送りに玄関へ一緒に向かった。

暫くすると士朗が戻って、元の席に座った。

「…山本さん、俺の小さい頃に会った事あるんですか？」

士朗が重々しく聞いてくる。

「いや、ないよ。」

俺が軽く答えた。

「ちょっと待ってよ！小さい頃の藤村先生にも士朗にも会った事あるって言ったわよ？」

凜も勢いよく聞いてくる？

「ああー、そうだな。何て言ったらいいのかわからないけど、簡単に言っと、超能力かな？」

「『超能力？』」

気がつけばセイバーも座っていた。

「俺の秘密の能力の1つ。俺が言った言葉を鵜呑みになるような能力で、人類皆兄弟になれる。」

「その秘密の能力って何よ？」

「秘密は秘密だ。誰にだって秘密はあるだろう？」

押入れの奥の秘密のビデオとか、本棚の裏の秘密の本とか、地下室にある秘密の魔法陣とか。遠坂だって魔術師の事を秘密にしてたろ？」

「それはそうだけど…」

凜は納得したのか追及はそれで終わった。

「それで2人ともそろそろ学校に行かなくていいのか？」

俺の言葉で士朗と凜が学校へ行き、アーチャーは透明になり凜の護衛。

セイバーは家で待機。俺は調査の為、家を出た。

アーチャーは透明化して凜について行っただ、生命探知モードでアーチャーの姿が朧げながら見えた。

「サーバント探索に使えるな…」

住宅街から新都中心街に歩いて移動する。

住宅街は聖杯戦争なんて起きているのか疑いたくなる程、平和だった。

新都中心街も平和に見えたが、予想外の事が起きた。

「よう、そのオッサン。俺達、飯食う金がないんだけど少し分けてくれないか？」

現れたのは5人の男。どれもチャラい格好でピアスをしていた。

俺は有無を言わずに路地裏に連れていかれた。

「金くれれば乱暴な事しなくて済むんだ。早く金出しな。」

俺が溜息を吐き口を開く。

「俺、金持ってない。」

事実、この世界に来て2日目。金なんて稼いでない。

「ふざけんじゃねえ！」

1人の男が俺に殴りかかってきた。俺はワザと殴られた。

殴られた瞬間首を一回転させて元に戻った。

「攻撃を受けました。敵対勢力を撃破します。」

一度目を赤く光らせて感情を込めず、宣言する。

俺を殴った男の膝に向けて足を踏み下ろした。

「ぐあああああ！」

男の膝が逆に曲がり倒れた。

啞然としている内に2人目の足の甲を踏みつぶした。

足のうらから伝わる骨の折れる感触。

「あああああああ！！！」

2人目は蹲り戦意を失った。

振り向くと3人目が俺にハイキックをしてきていた。

もちろん、フォースで感知していたので手のひらで掴むようにガードした。

そのまま力を入れて握りつぶした。

「うああああああ！」

倒れて行く3人目の向こう側にはナイフを持った4人目の男がいた。すでに正気な目をしておらずナイフを振り回しながら向ってきた。

フォースを使って攻撃を避け、隙についてナイフを持った手を掴み一気に力を込めた。

骨の折れる感触。

「うがあああああ！」

男は両膝を付きつぶれた手をの手首を押えている。

俺は膝を付いた男の腿に蹴り骨を折る。

残り1人。

しかし、最後の男はすでに逃げ出して大通りに向かっていた。

彼は後ろを振り向かずに全力疾走していた。

「さて、ここに残った負け犬には何をしてくれようか？」

男たちは痛みを堪えながらそれぞれの財布をこちらに投げってきた。



「金は要らない。欲しいのは敗者の絶望だけだ。」

近くで倒れていた男の髪を鷲掴みにして顔を見る。

恐怖で怯えているが物足りない。耳に着いているピアスを引きちぎった。

「ああああああああああ！」

良い叫び声だ。恐怖と痛みで歪んだ顔をしている。

残りの3人もピアスを引きちぎった。

耳、鼻、唇、舌。

全部のピアスを引きちぎった。

ああ、なんて充実感だろう。

[illegible]

心逝くまで笑うと倒れている男たちに向かって言った。

「さあ、次だ。もつと恐怖しろ、もつと痛がれ。」

一人ずつ耳を引き裂いて行く。足の折れている男たちは逃げる事もできなかった。

楽しい、赤く染まった路地裏で悦に浸る。

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。

男たちは助かったと思うと意識を失った。

警察官が現場に到着すると4人の男たちが立ったまま気絶していた。男たちを揺すり気がつかせた。

それぞれが恐怖に怯えながら、足を折られてピアスを引きちぎられて、耳を取られた。と言う。

しかし、足は折れていないし、ピアスも耳を着いている。

不審に思いながらも警察官はパニックになっている男たちを警察署に連れていった。

その様子を影から見守る1人の男がいた。

フォースを使い相手の心を操り言葉だけで心にダメージを与えた山本二郎。

「更生してくれればいいんだが…」

誰にも聞かれなかった呟きは騒音の中に消えた。

午後3時、二郎は学校の裏にある雑木林に来ていた。

学校にくる途中で霊体化したサーバントを引き連れた男を見つけたからだった。

サーバントはレザー風な黒いミニのワンピースを着た女性だった。

「ライダーか…、マスターはシンジか？」

シンジにもライダーにも気づかれないように距離を取りながら尾行した。

雑木林でシンジがライダーに何か指示をだした。

ライダーが学校に向って走り出した。

ライダーは見えなくなって数分で帰ってきた。

士郎を引きずって。

シンジは士郎とライダーの戦闘に見入っている。

シンジの後ろからそっと近づき首筋に手刀をあて気絶させた。

そのまま、彼の手から偽臣の書を奪い未だ戦闘中の士郎とライダーのいる場所に向かって歩きだした。

士郎に声を掛けようとした瞬間に、彼の体は宙に浮かんだ。慌てて2人に声をかけた。

「ストップ！戦闘終わり！中止だ！中止！ライダー、士郎君を降

ろせ。」

手の書物を掲げながら叫んだ。

士朗はドスンと音を立てながら地面に落ちた。

ライダーが木の蔭から出てきた。目隠しをしたまま俺を見ている。

「シンジはどうしましたか？」

「向こうでイビキかいて寝ているぞ。」

「それでは、あなたの持っている書は何なのか理解していますか？」

「ああ、これが君を縛っている仮の令呪って理解している。」

実際に、生命探知モードでこの書を見ると書から細い糸のような物がでていてライダーと遠くの誰かに結びついている。

「それで、君に聞こうかな？君の目的は？なぜこんな物で縛られているんだ？」

「…」

ライダーは答えようとしなかった。

「まあ、いいや。とりあえずは仮でも俺がマスターだ。この書を持っている限りは従ってくれよ。」

「…」

ライダーは黙っている。

「士朗、大丈夫か？」

「痛いけど、大丈夫みたいです。」

「大丈夫？士朗？って敵が！」

凜も到着した瞬間にライダーを見つけて戦闘態勢を取る。

「あゝ、大丈夫だ。彼女は今は敵ではない。」

「敵ではない？」

「簡単に言うと、この書を持っていると仮だがマスターになれるんだ。今、書を持っているのが俺だから敵じゃないな。」

「でも、そんな事ができるのかしら？」

「理屈はしらんが、実際に物があつて従えられるんだ。納得するんだ。」

「…わかったわ。」

渋々ながらも凜が納得した。士朗も打ち身をしているのでこのまま家に帰ることにした。

家に帰りセイバーにライダーの事を説明した。

セイバーはライダーよりも1人でサーバントに向かった士朗に怒り心頭で道場まで引きずって行った。

ライダーは零体化して俺の近くにいます。

左目のみ生命探知モードで偽臣の書から伸びている糸の状態を常に確認しているのでどの方向にマスターがいるか分るようになってる。

「凜、そろそろ士朗君を助けてあげないか？」

「嫌よ。セイバーの矛先がこっちに来たらどうすんの？」

「こんばんわ。」

居間で無駄な会話をしている所入ってきたのは桜だった。

残念な事に書から伸びている糸はライダーと桜に繋がっていた。

「ああ、なんてことだ……」

「?どうしたの?」

凜が訪ねて来るが俺の頭の中は真白になっていた。

「ありえない、バスト85だと?それで遠坂よりもウエストが細いなんぐベエ!」

凜の放った右ストレートは何故か避ける事ができなかった。



## 第24話

晩飯の作成は桜と半死半生の士郎が行った。

大河は祖父に呼ばれて今日は実家で食べると連絡があった。

食事前にセイバーを桜に紹介した。

「セイバーといます。」

「間桐桜です。」

俺以外の皆は桜と聖杯戦争が関係ないと思っているのでスルーしているが、

セイバーって名前は珍しいし国籍も聞かないのはオカシイとは思はないのだろうか。

桜は夕飯の片付けも終わり、士郎の隣でTVを見ていた。

TVではガス漏れでの昏倒事件が流れていた。

「間桐さん、ちょっと話いいかな？」

「? いいですけど?」

桜は首を傾けながら尋ねてきた。

「ここではちょーっと言にくいから、道場でいいかな?」



二郎が笑顔で軽い感じで言った。

「ちょっと、桜に変な事するんじゃないんでしょうね！」

凜が噛みついてきた。

「ん、士朗君の彼女に変な事はしないよ。」

「「違います！」」

士朗と桜が同じタイミングで答えた。

「まあ、とりあえず行こうか？」

「ハイ。」

俺と桜は道場へ向かった。

道場は寒くひんやりした雰囲気だった。

「さて、間桐さん。ここに呼んだのはちょっと聞きたい事があったんだ。」

「聞きたい事ですか？」

「ああ、…ライダー。」

ライダーを呼ぶと桜の隣にライダーが出現した。

「間桐さん、君が本当マスターってのは既に分かっている。この書には君とライダーに繋がっているのが俺には見えるんだ。」

「……」

桜は俯いたまま何も言わなかった。

「まあ、君がマスターなんてどうでもいい事だけど。」

「え？」

「はい。これ返すね。」

桜に疑臣の書を返した。

「あ、え？なんですか？」

「うーん、正直言うとき、ソレ持ってた数時間でライダーからの胃に穴が開く位の敵意の籠った視線でもういいやって思っちゃってさ。」

本当は敵意と殺意が絶妙にミックスされた冷やかな視線だった。

「あと、君がマスターだと言う事は誰も知らないから、何かあったら相談してね。」

「はあ……」

状況を半分ほどしか理解していない桜は生返事を繰り返だけだった。

「それと、もう一つ。君の胸の辺りから嫌な感じがするんだけど、何かあるの？」

生体探査センサーで、桜の胸の中に何故かもう1つの生命反応があったのだ。

桜の胸を見つめると、桜が腕で胸を隠した。その瞬間に嫌な予感があったので後ろに一步下がる。

目の前をライダーの蹴りが過ぎて行つた。

「桜に不埒な事をするのは許しません。」

ライダーの静かな発言は威圧感があった。

「おいおい、俺を殺す気か？当たったら痛いぞ。全く、これだから最近の若いモンは……」

溜息を吐きながらライダーを見た。こちらを警戒していて桜の前に立ち睨んでいる。

「これ以上の会話は難しいようだ。間桐さん、またな。」

俺は桜の返事を聞く前に道場から走り去った。ライダーが襲いかかって来そうな雰囲気だったからだ。

部屋に戻る廊下で凜を見つけた。

「お、凜発見。ちょっといいかい？」

此方に気が付いた凜は不機嫌そうにしていた。

「私をファーストネームで呼んでいいって誰が言ったの？」

「済まなかった。これからは『お嬢様』って呼ぶよ。学校でもコンビニでも駅でもお嬢様で呼ぶよ。」

「…やめて、あなたにそう呼ばれると鳥肌が立つわ。凜でいいわよ。で、何か用なの？」

「ああ、ちょっと間桐さんについて聞きたい事があったんだ。」

「じゃあ、部屋で聞きましょう。入って。」

部屋に入り二郎がイスに座った。凜はベットに腰を掛けると少し不機嫌に聞いてきた。

「で、彼女の何が聞きたいの？」

「聞きにくいが知っている事全部だ。彼女から嫌な黒い感覚を感じる。それが彼女からなのか、魔術的な何かか、わからないが黒い霧のようなモノを感じるんだ。」

「…桜が自分で魔術師だって言ったの？」

「あー、えー、うーん、…何の事かな？俺彼女が魔術師って言ったかな？」

「嘘は言わないで欲しいわ。彼女が魔術師だって知っているわ。」

「わかった。俺にも色々と言えないことがあるが一つだけ聞こう。通常の魔術で常時体内、特に心臓付近に寄生虫を入れる事はあるのか？」

「何よそれ。そんなバカな事あるわけないじゃない。…でも、あの老人なら…」

凜が一人で考え込んでいる。

「凜、凜？りーん？りんちゃん？お嬢「なによ！？」間桐さんだけど、家にいる別の魔術師に何かされている可能性はあるか？」

「ええ、十分ありうるわ。」

「なるほど、それなら明日は別行動する。間桐さんみたいな美少女に酷いことする奴は許せん。なんとかする。」

「なんとかって。何するつもり？」

「それはもちろん、間桐さんの体治す。その原因の魔術師探して説得、またはブン殴って改心させる。」

「どうやって探すの？魔術師の家は危険よ。」

「んー、我に秘策ありってね。」

そのまま暫く雑談をして部屋に戻って二郎は不意に気が付いた。桜の事何にも聞いてなかったと。

二郎は秘策を講じようとナノマシンの把握練習を開始した。

部屋で机に垂らした血を見て神経を集中する。指先を傷つけ血に偽装された液体金属を操る。

右に動く様に念じると赤い液体金属は右に動いた。

半分になれと思うと半分に割れ2つになった。

そのまま練習していった。日付が変わる頃にはナノマシンを1つずつ動かせるようになった。

朝日が昇る頃にはナノマシンの増殖の仕方をマスターした。

指輪サイズから瞬間的に大剣に変えたり、髪の毛1本から自分を再構築もできた。

自分を見る自分。両方に意識がありそれぞれが自分だと理解できた。

ナノマシンを増殖させて作った物や自分は触っている状態で1つに戻れと思うと銀色の液体に戻りながら融合していった。

桜と大河が来て賑やかな朝食だった。大河にセイバーを紹介したが、特に問題なく簡単な挨拶で終わった。

桜と大河が学校に行き、凜も支度をしていたが士郎だけは違った。

セイバーに稽古をつけて貰う為に学校を休むらしい。すでに大河の許可を取っていたのは驚いた。

午前中に凜から聞いた住所に向かって歩いていった。

到着した間桐家からは異様な雰囲気が漂っていた。家全体を覆う黒い霧のような感覚。

二郎は心の中で入りたくないなーと思った時、もう一つの自分がいる感覚、視覚が脳内に感じられた。

二郎は、そういえば学校に髪の毛残したなーと思いながら間桐の家に入っていた。

玄関前で生命探索モードに切り替えると家に生命反応はなかった。何気なく下を見ると地下室でもあるのか膨大な量の生命反応があった。

家の裏側に回り、置いてあったガスボンベを引きちぎり持ち上げた。玄関に回りドアを前蹴りで壊して侵入した。地下室の入口を見つけそこも蹴りで壊した。

ドアが音を立てて階段を落ちて行く。そこにガスボンベを放り投げ

た。ガンッガンッと何度か音がして最後は大きな音を立てて階下まで落ちて行った。

俺はもう一度、家の裏に回りガスボンベを持ち地下室に向かった。

「なんじゃ、才主は？招待した覚えはないぞ。」

暗闇から現われた老人は此方を睨んだ。

「あれ？居たの？人間の反応なかったから誰もいないと思ったよ。」

床にガスボンベを静かに下しながら老人に答えた。

「カッカッカ、魔術師の本拠地にきて軽口をたたくなんて愉快じゃのう。」

老人が醜惡に笑った。

「ふーん、魔術師ね。それで人間やめる事ができたんだ。」

「カッカッカッ、ワシは人間じゃぞ。欲深い罪深き人間じゃ。」

俺は興味なさそうに頭を掻いていた。

「お主はワシの為血肉になれえ！」

そういうと暗闇の中から虫が出てきた。確実にモザイクが必要な姿には嫌悪感しかなかった。

虫は俺の脚や腕に食らいつくが暫くすると落ちて行った。



「なぜじゃ！なぜ喰い尽せぬ！」

「うるさい。クソバカタレウンコヤロー！」

地下室には十分ガスが溜まった。今までの会話は色々と時間稼ぎに過ぎなかった。

俺は腕を火炎放射器に変え、その老人とは永遠の別れになろう最後の言葉を放った。

「バイバイきーん。」

辺りは爆音と共に光と炎に飲み込まれた。

時間は少し戻り学校での出来事

髪の毛状態でスリープモードだった俺は周りの変化で再起動した。

屋上で元の人型に戻り黒いスーツ姿になった。空は夕方でもないのに赤く学校内の雰囲気がおかしかった。

もう一人の俺が魔術師を何とかするから俺は桜の寄生虫を退治＆現状の学校内の回復か、心の中で自分と自分で会話する。

生命探査モードにして校舎内を調べた。桜の生体パターンと凜、土

朗、大河を探した。

桜を発見、続いて士朗と対峙しているライダーも見つかった。士朗の傍にはセイバーがいるから大丈夫だろう。

大河も倒れているようだが今の最優先は桜だ。彼女を確保しに階段を駆け降りた。

1年の教師で桜は倒れていた。他の子は荒々しく呼吸をしていたが桜は安定していた。

桜を仰向けに寝かせ、自分の指先を切り桜の口内に血液に偽装したナノマシンの塊を飲み込ませた。

桜の体の中でナノマシンが寄生虫に向かって進んでいた。寄生虫を体液に偽装したナノマシンで囲み込み動けなくした。

寄生虫は危険を察知したのか暴れ始めたがナノマシンで囲い込んでいたので動くこともできなかった。

ナノマシンは寄生虫を体内から皮膚の下に移動していった。

桜のシャツを腹まで括り上げると、そこには不自然な脹らみがあった。

ナノマシンで覆われた寄生虫がそこにいたのだ。

腹部がゆっくりと裂けていき僅かながらの出血があった。

寄生虫がゆっくりと姿を現すと二郎は寄生虫をつかみ上げた。その

時に結界が消えて遠くで爆発音が聞こえた。

桜の腹の裂け目は逆戻しをするように数秒で消えて無くなった。

傷が無くなったのを確認すると桜の服装を整え教室を出た。士朗とセイバーは3階にいるが周りに敵対するような人物は発見できなかった。

寄生虫を処分する為に裏の雑木林に向かった。

少し開けた場所があったので、そこで寄生虫を握り潰し地面に投げ捨てると火炎放射機で焼却した。

暫くするともう一人の二郎が現れて2人は1人に融合した。

二郎が家に帰ると居間には士朗、凜、セイバー、桜がいた。

「あれ？間桐さん、どしたの？」

「ええ、実は家が火事になってしまいまして、帰る場所が無くなってしまったんです。」

「そうか、それは大変だな。」

凜が意味ありげな視線を送っているが二郎は無視している。

「ああ、それでウチに来てもらおうかと思ひまして。」

士朗が答えた。

「ふーん、間桐さんの家族は同意したの？」

「兄さんは他の友人の家にいくそうです。両親はこちらにいませんし、おじい様は行方知れず。」

近所には親戚もおりませんし、先輩の邪魔でなかったらしばらくお世話になるうかと思えます。」

凜とセイバーは互いに無言を貫いている。

「なるほど、それは大変だ。一緒に住むならある程度のプライバシーの事は教えてほしいな。」

例えば、好きなお菓子とか、趣味とか、スリーサイズとか、魔術師の事とか。」

「！！」

「二郎さん、桜はそんな事は関係ないですよ！」

士朗が勢い良く言うが二郎は桜を見ていた。

「先輩、私、魔術師なんです。」

それから桜の告白が始まった。

魔術師として何ができるか。どのような訓練をしてきたか。祖父から教わり兄から暴力を受けていた事。

桜が一通り話し終わると二郎が口をひらいた。

「最後に聞くんが、君は聖杯戦争のライダーの本当のマスターだな？」

「…はい。」

桜は小さくもしつかりと答えた。

「ちょっと、本当なの？」

凜が動揺して聞いてきた。

「はい、私はライダーのマスターです。彼女は今、仮の令呪によって兄の所にいます。」

桜が俯きながら答えた。今まで士郎に嘘を吐いていたのが心苦しいのか涙をためていた。

士郎は放心しながら聞いていた。

「で、間桐さん。大切な事を聞く。君は聖杯戦争を戦い抜くか。それとも降りるか。」

「私は…、私は先輩の為に戦います。先輩と一緒にいます。」

「桜……」

「先輩……」

士朗と桜が見つめあっていた。二郎が溜息をつきながら話始めた。

「これで、ライダーは何かあった。セイバー、アーチャー、ライダーの3人がいるんだ。バーサーカーが来ようとなんとかかなりそうだな。」

凜は不機嫌そうに聞いていた。

「で、あんたは何をしたの？」

凜が怒りながら聞いたきた。

「害虫駆除」

二郎が笑顔で答えた。凜は溜息をつきながら、

「終わった事は仕方ないにしても、これからどうするの？」

「ん？これから？明日は学校はあるんだろ？」

「今日の集団昏倒で明日からしばらく休校よ。」

「ふむ、ならば士朗は昼間はセイバーと凜から魔術、剣術を教わる。俺は調査を行う。凜とセイバーは士朗の事頼む。」

「で、間桐さんは、しばらく休む。」

「えっと、なぜでしょうか？」

「気が付いていないかもしれないが、君の体にいた不純物はもうい

ない。しばらくは体調をベストに戻すんだ。」

「はい・・・わかりました。」

桜は嬉しかったのか、涙を流しながら答えた。

「まあ、夜中にこっそり忍び込むかもしれないから、そのときはヨロシク。」

小声で言ったはずの言葉に土朗が反応して二郎を殴った。バランスを崩した二郎はテーブルに頭を強打して意識を失った。

「で、だれがコレを運ぶのよ？」

凜が溜息交じりでつぶやいた。

## 第25話

二郎は夜中に庭を歩く物音で目が覚めた。

足音の正体を確かめに縁側に行くと土朗が庭にある蔵に入っているのが見えた。

二郎は縁側からサンダルを履くと蔵へと向かった。蔵に入ると土朗が瞑想していた。

「土朗君、どうした？」

「あ、山本さん。魔術の修行をしてたんです。やっぱり毎日訓練しないと上達しないと思うんで。」

「ふーん、修行ね……。俺は風呂の覗きの準備でもしていると思っただよ。」

「し、しないですよ！」

「え?!しないの?美少女が風呂に入っているのを覗かないのは失礼だと思うんだ。男なら覗くだろう?」

「覗きませんよ!それにそんな事したら絶対に嫌われますよ!」

「土朗君、君は何にも判ってない。本当に判っていない。そう、生き物が呼吸をするように蜘蛛が幾何学模様の巣を張るようにDNAに刻まれた熱い魂の鼓動が聞こえないのか?!」



二郎は落胆したように肩を落としながらも熱く語った。

「聞こえませんよ！それにこんな遅い時間にはみんな寝てますよ。」  
体内時計では日付が変わり1時間程経っていた。

「おお、もうこんな時間か。それなら覗きをしないのは仕方ないな。俺は寝るから士朗君も程ほどにしなよ。」

「はい、おやすみなさい。」

二郎はそのまま屋敷に戻り、シャワーを浴びてから就寝した。

翌朝

二郎が目覚めたのは9時を少し過ぎていた。

居間に向かう途中に道場から人の気配と竹刀のぶつかる音が聞こえた。

二郎はあくびを噛み殺しながら道場へ向かった。

道場では士朗とセイバーが実戦のような激しい訓練が行われていた。  
道場の入口付近に座った二郎は2人の戦闘を眺めていた。

セイバーの剣速は士朗の認識できるギリギリの速度で放たれていた。

セイバーの攻撃が重いため士郎のバランスが悪いと受けきず、何度も転倒していた。

士郎は倒れない様に自然と足さばきとバランスを鍛えられた。

気が付けば時間が昼近くになっていた。凜が昼食を作ったので中華だった。

桜は笑顔で凜の作った中華を食べていた。ライダーは何故かメガネを掛け普段着で座っていた。

朝食を食べ損ねた二郎は朝に何があったのか分らなかったが、全員が良い関係の第一歩を踏み始めた事を理解した。

午後からは士郎は凜の魔術訓練になった。桜は家事全般を、ライダーは桜の補助をしていた。

二郎とセイバーは居間でテレビを見ていた。

「山元殿、もしよろしければ模擬戦などは如何でしょうか？」

「模擬戦？ん、メンドクサイ。」

「何故ですか？とても暇そうにテレビを見ていたではありませんか？それにお互いの技量を確認すれば戦術を組みやすいではないですか？」

「セイバー、俺は一般人ではないが、英霊でもない。いくらセイバーが美少女だとしても、叩かれて喜ぶ性癖でもない。そして、本当の理由はメンドクサイからだ。だから返事はノーだ。」

セイバーの空気が変わった。明らかにキレた雰囲気だ。

「山元殿、あなたは一体何様のつもりなのか？聖杯戦争を戦い抜く氣勢はあるのか？」

「セイバー、君こそ何か勘違いをしていないか？俺はマスターでも聖杯戦争関係者でもない。ただの乱入者だ。物事を引っ掻きまわし多大な迷惑を顧みずに、ただ自分の為に戦う物だ。」

「わかりました。言葉での言い訳は要りません。あなたはただ私に負けるのが怖いんですね。戦う前から負け犬ですね。」

「あゝ負け犬よりも舐め犬がいいな？」

「なんですか、それは？」

「ああ、君は何にも判っていない。本当に何も判っていない。昨日の士朗君のようだ。これだから最近の若いモンはなっていない。」

「聞き捨てなりません！」

セイバーは完全武装し二郎に対して見えない剣で攻撃した。二郎は跳躍で離れながらもセイバーから見えないように後ろ手から出したスピアで攻撃を防いだ。

セイバーの押す力と二郎の押す力は瞬間的には均衡したが二郎が押し返した。

二郎は右腕を障子に向けると腕を横に動かした。障子と廊下の窓が

手の動きに従って一気に開くと二郎は庭に駆けだした。

セイバーが庭に追いかけて、連続で襲ってくるがスピアを使い攻撃をすべて防いだ。

二郎はセイバーの攻撃の隙を付いて距離を取った。

「セイバー、俺に勝てたら君の命令を何でも1つだけ聞いてやろう？そのかわり、君が負けたら俺の命令を1つだけ聞くんぞ。」

「良いでしょう。覚悟！」

セイバーが勢いよく駆け込んで連続攻撃してくるが、フォースを使い全て防いだ。

上段下段袈裟逆袈裟突き全てをスピアで防ぎきった。

一度距離を取ったセイバーは厳しい表情で問いかけてきた。

「私が攻撃しようとした時、剣筋が見えているかのように全ての攻撃を後の先で対処していました。いえ、私の攻撃をすべて予知しているように感じます。」

「んー、良い質問ですねー。そんなセイバーに俺の多くの秘密の一つを教えよう。クラゲはしっているか？小さな生物が集まって大きな生き物を構成している。」

「ええ、知っていますがそれが何んですか？」

「俺のヒントはここまでだ。後は自分で考えるんだ。それと、柳洞

寺に敵サーバントと思われる拠点がある。可能性としてはキャスターが一番高い。」

「キャスターが拠点を作っているなら、畏の一つや二つはあるでしょう。しかし、畏を恐れて敵を逃がしたとなれば話は違います。今夜にでも強襲するのが良いと思います。」

「そうか、マスター連中が行くなら俺も行こう。」

真剣な表情で二郎がセイバーを見つめて言った。

「山元殿が来てくれるなら心強いです。しかし、私と引き分ける強さを持つていても今回の敵は魔術を使います。十分に注意してください。」

「ああ、わかった。そろそろ部屋に戻るか。」

「そうですね。」

二郎が夕陽を見ながら目を細めて言った。

大河がいない静かな夕食が終わり、マスター3人サーバント3体と二郎が居間に集まっていた。

「さて、俺の集めた情報だと柳洞寺に怪しい結界が貼られている。おまけに中には日本人離れた美貌の女性がいるらしい。」

二郎が真剣な表情で切り出した。

「はい、私はその女性がキャスターである可能性が高いと思います。全員で攻め込み短時間で制圧する事を提案します!」

セイバーが力強い表情で答えた。

「でも、アーチャーはまだ回復してないわよ。それに桜の体調も心配。私は今の状態で戦うのは反対よ。」

「ああ、遠坂の言う通りだ。」

凜と士郎がセイバーの意見に反対した。

「それならば、桜どうですか?」

「桜はまだ魔力が枯渇しています。」

桜の代わりにライダーが答えた。暫く沈黙が続いたが二郎が口を開いた。

「皆の意見はわかった。とりあえず今夜はゆっくり休んで体調を整えよう。凜、アーチャーの回復までは何日かかる?」

「そうね、あと2日もあれば戦闘可能になると思うわ。」

「わかった。ライダー、桜が戦闘に耐えられる魔力量になるまで後何日かかる?」

「桜は後4日ほどです。」

「了解。柳洞寺に攻め込むには最低でもサーバント2人は欲しいな。何があるか判らないし、向こうも同盟を組んでるかもしれない。」

二郎が全員の意見と状況を判断して言った。

「そうね、しばらくは様子見にしましょう。」

凜も二郎の判断に従った。そのまま解散になったがセイバーは納得できていない表情だった。

深夜

セイバーが柳洞寺に1人で向かった。二郎はセイバーに気がつかれないように距離を十分取って追いかけた。

原作通りセイバーは柳洞寺の門でアサシンと戦闘になった。

アサシン、佐々木小次郎の長刀が踊るようにセイバーを翻弄した。

二郎は距離を取りつつ、空中に浮遊し高度を上げた。

高高度になりセイバーとアサシンの姿も肉眼で見えなくなった。二郎は上昇を止め、柳洞寺の門に向って落下を始めた。

「デープ・インパクト！」

二郎は叫ぶと同時に体を1回り大きくし膝を抱えて丸くなり、背中のバーニアが点火し落下速度を上げた。

目標は柳洞寺の門で闘っているアサシン。風の影響を受けながらも、微調整しながらもほぼ予定のコースで落下していた。

柳洞寺の門周辺にいた鳥たちが危険を察知し飛び立った。セイバーとアサシンはその落下物を確認し、すぐにその場所から避難した。

セイバーは階段を降り、アサシンは柳洞寺の中庭まで避難した。セイバーはこの時に士朗と合流した。

「シロウ、隕石が落ちてきます！伏せてください！」

士朗とセイバーが伏せると同時に落下し閃光を放った。爆音と爆風を耐えた2人はすぐに柳洞寺に向かった。

## 落下中の二郎

落下ポイントを見ると鳥たちが飛び去っている最中だった。セイバーは階段を降り、アサシンは柳洞寺の中庭に避難していた。

落下目標をアサシンにしていた為、自動で軌道補正がかかった。直進で落ちて来るはずの物がアサシンを狙うように落ちて行った。

二郎とアサシンが衝突する瞬間、涼しげな笑顔で佇むアサシンと二郎は目線が合った。



アサシンが最後に見たのは落下物の中にいる二郎の顔だった。

二郎はアサシンとの衝撃で上半身と下半身に千切れたまま地面にクレーターを作って止まった。

千切れた下半身を土に擬態し上半身は下半身を再生させた。

土埃が酷く、周りが見えなかった二郎は生体センサーを起動した。クレーターの淵に1人の女性が立って此方を警戒するように見えたのが見えた。

「とりあえず姿を変えるかな。」

全身銀色のマネキンのような体、目鼻口耳髪がなくのっぺら坊のような姿になると体が変化して黄色いスーツに黄色い帽子、顔が緑色のマスクを被ったような怪人に変わった。

「イツツ、ショータイム！」

キャスターは警戒していた。アサシンが謎の落下物に直撃し倒されたのだ。その落下物はキャスターの神殿と化した柳洞寺に落ちている。

どのような攻撃なのか？何者の仕業か？見当がつかなかった。

「イツツ、ショータイム！」

クレーターの中から声が聞こえたのでキャスターはクレータから距離を取った。クレーターの中から這い上がって来たのは緑の顔をした黄色いスーツの男だった。

男はズボンのポケットからマイクを取りだしてしゃべり始めた。

「どうもこんばんわ。ロムスカ・パロ・ウル・ラピユタです。今日はこの星に素敵な女性がいると聞いて遠路はるばるバルタン星からやってきました。そして目の前にいるのは美しい女性！はい、こんばんわ！」

マイクをキャスターに向けるがキャスターは無言で警戒をしている。

「・・・はいッ。緊張しているんでしょうか、答えてくれませんか。それでは質問です。寝るときはブラを着けますか？」

再度マイクをキャスターに向けるが何も答えない。

「どうやら寝るときは全裸主義のようです！これは興奮してきました！」

一人でしゃべって興奮している男に対してキャスターは冷やかな視線を送っていた。

「では、今の下着の色を教えてください！」

キャスターはマイクを向けられたが一切言葉を発しなかった。

「それでは確認タイム！早速見てみましょう！おっとその前に・・・」

男はズボンのポケットからあるモノを取り出した。

「パンパカパーン！ボールギャグ！説明しよう、このボールギャグは頭の固いオヤジの部屋にあったものを失敬してきたものだ！拘束と同時に魔力封じが出来る優れ物だ！」

ボールギャグ…口枷の一種で中央にゴルフボール大のボールと、その両端に取り付けられた革紐からなる。ボールを拘束者の口に咥えさせ、革紐によって固定し使用する。

ボールギャグを咥えさせられた者はボールの穴、もしくは唇の隙間を通して呼吸が出来るが、まともにしゃべる事が出来なくなる。また、口を閉じることが出来なくなるため、唾液が垂れ流しになり非常に不格好である。

魔力封じ…正確には口のボールから体内にナノマシンが侵入し一時的に体内の魔力を認識できないようにさせるものである。

男はキャスターが身構えるよりも早く、器用にキャスターの口にボールギャグを装着させ、どこからか出した手錠を使い後ろに手を組ませて拘束させると、着ているローブの裾を持ち上げてキャスターの頭上で結んだ。

「はい！黒のＴバック！妖艶魅惑のＴバックだー！・・・落ち着け、俺。ここは変態紳士らしく脱ぎたてＴバックの踊り食いといこうじゃないか。」

周りが見えない、魔力も使えない、言葉も発せない状況でキャスターは恐怖した。

男がキャスターの正面にしゃがみ込み下着を脱がそうとキャスターの腰に手を伸ばした瞬間、キャスターは無意識に男を蹴りあげた。

男の股間にヒットした時にゴングを鳴らすような音がして男は前屈みに倒れた。

キャスターは必死に倒れた男に向って何度も蹴りを入れていた。

男は誰に聞かせることもなく呟いた。

「嫌いじゃないぜ、こういうの。むしろ喜んでるかも。」

セイバーと士朗が柳洞寺に到着した時、驚きを隠せなかった。

上半身を布で包まれた女性が倒れた緑の顔の男を蹴っていた。

訳が分からない。

今、セイバーと士朗の心は1つになった。

セイバーが女性を宥めロープの裾の結び目を解いた。女性は涙目でボールギャグの所為で口の周りが唾液で汚れていた。

セイバーは手錠を外そうとするが鍵が掛かっていて外れなかった。仕方なしにボールギャグを外そうとしたが此方は不思議な力で外れなかった。

セイバーの作業を見ていた士朗は倒れている男のポケットに何か手掛かりがないか探し始めた。

ポケットの中には信じられない量の物が入っていた。

赤べこ、ハンガー、おもちゃのピストル、ロケットランチャー、サイズの違う靴、片方だけの手袋、小学校の教師が使うような大きいコンパス、カエルのおもちゃ、車のハンドル・・・など、切りがなかった。

女性を解放する手段が分らなかった士朗は男を起こそうとした。セイバーは見えない剣を持ち警戒していた。

士朗に起こされた二郎が発した第一声は

「こんばんわ！おっぱい党の党首、オツ・パオツパオです！」

士朗は周りの空気が凍った感じがした。

「ああ！ごめんよ！マスク取るよ。」

男は後頭部に手を持っていき皮膚を剥がすようにマスクを脱いだ。

セイバーと士朗はその男の正体に驚いた。

「改めてこんばんわ、アンソニー・ホプキンスです。」

溜息をつく士朗の後ろには青筋を立てて怒るセイバーと状況を理解していないキャスターが立っていた。

## 第26話

「山本さん、なんでこんなところに居るんですか？」

士朗が聞いてきた。二郎はマスクを持ちながら答えた。

「んゝ、なんだか説明が難しいな。」

二郎は頬を掻きながら、困った感じで士朗に答えた。

「それよりも、この女性の拘束を解いて下さい！女性に対してこのような行いをして恥を知りなさい！」

怒りながら詰め寄るセイバーに二郎は後ずさりした。二郎はキャスターに近づきボールギャグに触れると二郎の手に吸収されるように消えて行った。

キャスターの後ろに回り手枷も同じように消した。

「ふう、助かったわ。それにして魔力が使えないのは何故かしら？」

キャスターは口元を拭いながら二郎を見た。

「ん？ここで戦闘になったら士朗君が危険だからな。」

「あなた、さつきまでの様子と全然違うけど、あのマスクはなんなの？誰？名前くらい名乗りなさい。」

キャスターが威圧感を出しながら聞いてきた。

「そうだな、自己紹介くらいするか。俺は山本二郎。このマスクはロキのマスクって名前だ。」

「ロキとは、神話に出てくるあのロキですか？」

セイバーがキャスターの横から質問してくる。

「そう、オーディーンの子で悪戯の神様だ。このマスクを被ると心の枷が外れて欲望の赴くままに行動してしまうんだ。」

「そうか、だから山本さんは女性に変な事してたんだ。」

士郎が納得した表情で言った。

「さて、士郎君。君の中で俺への認識はどうなっているか聞いてもいいかな？」

「いや、俺に風呂への覗きは男のロマンだ〜って言ってたじゃないですか。」

「ここで、其れを言うか？男同士の魂の語り合いだろ？」

「いや、だって、セイバーが…」

士郎は二郎と目を逸らしながら青い顔をして言った。

「ほう、覗きが男のロマンですか。山本殿のロマンは随分辺鄙な場所にあるんですね。」



セイバーが睨むように二郎に強い口調で言った。

「いや、それよりもこの状況を考えよう。目の前にキャスターがいて魔法を封じられている。それにサーバント1体撃破したんだ。今は現状を話し合おう。」

「その必要はない。」

柳洞寺の門から男の声が聞こえるとキャスターが無数の剣に貫かれて消えていった。

「クッ！」

セイバーが門の前にいる黄金の鎧を着た男に向って剣を構えた。

黄金の鎧の男、ギルガメッシュはセイバーを見つけ笑みを浮かべながら言った。

「久しいな、セイバー。ついに我が物になる決心が着いたか？」

「誰が貴様のような物に着いていくか！」

セイバーがギルガメッシュを睨んだ。

二郎は考えていた。

今、ギルガメッシュをどうにかして士朗の家に帰れば男のロマンの件できっと大変な事になるだろう。

ならば、どうすれば逃れられるか？普段はピンク的な内容しか考えない脳みそはフル回転していた。

「セイバー、ヤツは危険すぎる。俺が時間を稼ぐから士朗君を連れて逃げる！」

二郎はセイバーの答えを聞く前に、右手にスピアを持ってギルガメッシュに向けて駆け出していた。

「ほう、我に齒向うか。ならば死ね！」

ギルガメッシュの背後の空間が歪み数本の剣が出てきた。そのまま剣は二郎に向かって飛んで行った。

二郎はかすり傷を負いながらも避けながらギルガメッシュに近づいて行った。

1メートルほどの距離に近づきスピアで刺そうと腕を引いた時、右腕の肘から先がギルガメッシュの放った剣が刺さり、その威力で千切れ飛んだ。

「残念だったな！」

ギルガメツシュが叫ぶと、今まで以上の数十本の剣が二郎に向かって飛んできた。

数本の剣が二郎の体に刺さると衝撃で二郎は後方に飛ばされ倒れた。致命傷ではなかったのか左腕を動かして動かし、起き上がろうとした瞬間に、

多くの剣が二郎の体に刺さった。そして最後に大きな斧で二郎の首を切断した。

「山本殿！」

叫ぶセイバーを気にせずギルガメツシュは鎧に付いた二郎の血を見て

「ふむ、汚れたか。今日は帰ろう。また会おうセイバー。」

そのまま柳洞寺の門から帰っていった。

残されたのはセイバー、士朗、そして無残な状態の二郎の遺体だけだった。

セイバーと士朗は二郎の遺体を柳洞寺の裏にある山中に無言で葬った。

2人はそのまま何も話さずに帰路に着いた。

翌朝、朝食が終った後に士朗とセイバーが凜、桜、アーチャー、ライダーを集めた。

士朗とセイバーからアサシンが倒れたのとキャスターが前聖杯戦争

のアーチャーに倒された事と二郎の死を伝えた。

時間は少し戻る

士朗とセイバーが二郎を埋葬し1時間ほど時間が過ぎた。

土葬された二郎が眠る地面から銀色の水が湧き出てきた。

大きな水たまりを作るとその中央から空に向かって盛り上がり人型になった。

銀色のマネキンが動きだすと体に変化し銀色のヘルメットを被ったドレッドヘアーのような物を着けた筋肉質の大男になった。

体は濃緑と黒の斑模様で動きを阻害しないような簡単な鎧を着ている。左腕にはコンピューターのような物が付いたガントレットを装備していた。

右腕には2本の鎌爪状の伸縮自在の刃物が付いたリスト・ブレイドを装備、左肩にはシオルダー・プラズマキャノンを装備していた。

二郎は何を思ったのか、プレデターに変身していた。二郎はヘルメットを外すと大きく深呼吸をした。ヘルメットを外した顔はプレデターの其れでは無く、二郎の顔があった。

二郎はヘルメットを再び付け左腕の機械を操作すると透明になり、その場を歩き去った。

ほぼ2日にかけて歩き続け、深い森を抜けた先、夕方になりようやくたどり着いたのはアインツベルンの城だった。

ヘルメットを外した二郎は大きな木造の扉をドンドンと少し大きな音で二郎は叩いた。

少しすると扉が開き女性が出てきた。

「誰？」

感情の起伏がないような話し方だった。

「あゝ、イリヤスフィールに会いに来たんだけど。」

「…名前は？」

「二郎、山本二郎。名前言っても分らないかもしれないから青い剣の男と言えば分るかも。」

此方を観察するような目で見た女性はここでまてと言って扉の中に入れてくてた。

そのまま彼女はイリヤを呼びに行った。

広いホールに1人残された二郎は回りを観察していた。扉の正面には2階に通じる階段、天井には大きなシャンデリア。

床は赤い絨毯が敷き詰められていた。壁際には椅子が並べられている。

しばらくするとイリヤとバーサーカーが2階から現われた。階段を下りてきた2人は数メートルの距離で対峙した。

「あら、あなたなの。変な格好ね。今度こそバーサーカーにやられてきたの？」

「おいおい、物騒なチビツ子だな。俺は聖杯戦争のマスターでもサーバントでも魔術師でもないんだぜ。」

両腕の手の甲をみせた。

「へえ、本当ね。それで、何の用なの？」

「情報をやるから、その見返りをくれ。」

「その情報は信じられるの？それに見返りって何が欲しいの？」

「何、簡単な話だ。今回の聖杯戦争にはイレギュラーが存在している。前回の生き残りのサーバントがキャスターを倒した。これは昨日の深夜の事だ。」

「へえ、そうなんだ。仮にキャスターが倒されたとしても、私のバーサーカーは無敵よ。」

イリヤが自信があるように胸を張って答えた。

「確かにバーサーカーは強い。だが、そのサーバントとは相性が悪すぎる。」

「…どうして？」

イリヤは少し不機嫌になるが、その答えを知りたい為に二郎に訪ねた。

「そいつの名前は、ギルガメッシュ。全ての武器の原典を持つ男だ。そいつなら神聖の高いバーサーカーいや、ヘラクレスを封じる武器を持っている可能性が高い。」

「そうね、たしかにギルガメッシュならその可能性もあるわ。でも、あなたが私たちを騙そうとしている可能性もあるわ。」

イリヤは二郎に対して未だ警戒を解いていなかった。気がつけば二郎の後方に大きなハルバートを持った先ほどの女性が構えていた。

「あゝ、疑い深いな。どうしたら信じてくれるんだ？」

「そうね、あなたの武器を見せてくれるかしら？あの青い剣でいいわ。」

「ん？いいぞ。」

バーサーカーの剣を断ちきる程の武器を簡単に渡してしまう二郎にイリヤは驚いた。

二郎は腰に付けたに袋に入れると細長い銀色の柄を取り出し、イリヤに向かって軽く弧を描くように放り投げた。

イリヤは両腕でそれを受け取ると両手に持って眺め始めた。

「これは？青い剣じゃないわ。」

「ああ、危ないから正面に構えて。んで、親指の所にスイッチがあるからそれを押せばいい。」

「ああ、これね。」

正面に構えたイリヤがボタンを押すとブォンと音がして青い刀身が現れた。

「イリヤ、そいつは超高温の粒子を発生させている。触るだけで焼き切れるぞ。」

「へえ〜。そうなんだ。」

イリヤは話を聞き流しながら赤い刃を階段の手すりに当てた。音も無く手すりをすり抜けた刃は床に当たった処で、その切れ味に驚いたイリヤが手を放してしまった。

手から離れ、赤い刀身を消した柄はトスンと小さな音がして床に落ちた。

「…何よ、これ〜!」

イリヤが悲鳴に近い驚きの声を上げていた。

「説明すると、遙か遠い昔、遠い彼方で起きた戦争で使われた騎士たちの武器だ。まあ、その騎士団は数の暴力でほぼ滅んでしまったがな。」

「何であなたがこんな聖遺物を持つてるのよ。」



「それは秘密だ。これの他にも武器はあるぞ。斬艦刀とか色々あるな。」

「ザンカントウ？なにそれ？」

「刀身80メートル、柄だけで15メートルを超える船を斬る武器だな。」

「そんな大きな武器誰が使うの？」

「少なくとも人間用の武器じゃないな。振り回すだけで町が破壊できるぞ。」

イリヤは指を顎に当て眉間に皺を作りながら少し考え事をしてから答えた。

「そうね、ザンカントウは冗談かもしれないけど、ギルガメッシュの件は信じてもいいかもね。それで、その見返りに何を求めるの？」

「それは、食事とベットだな。美味しい飯を腹いっぱい食ってぐっすり眠れば世の中から戦争が無くなると思わんかい？」

「それはどうかしら？人はどうでもいい事で争うわ。」

「まあ、どうでもいい話だな。」

二郎がニヤリと笑うがイリヤは不機嫌な様子で

「あなたが振った話じゃないの。」

と口を尖らせた。

二郎はヘルメットを被るとイリヤを見た。

「この姿の時はハンターと呼んでくれ。」

二郎はイリヤの脚元に落ちているライトセイバーを拾うと腰に付けた袋に入れた。

「リズ、彼を客間に案内して。」

「わかった。」

大きなハルバートを持ったリズが階段を上っていった。二郎は少し離れて彼女の後に続いた。

客間に案内された二郎は1人になると自分の状態を確認していた。

ヘルメットを着けた状態で左を向くと左肩に着いたショルダー・プラズマキャノンも左に向きを変えた。

右腕に着いているリスト・ブレイドも自分の意思で伸縮できた。左腕についたコンピューターも模様な様な文字が表示されるが何故か表示内容が理解できた。

ヘルメットを外しプレデターの顔になると視界も変わり、二郎は戸惑った。

二郎の中では見た目だけが変わっていると思ったが、実際には変身した者の能力や武器も再現されていた。

ロキのマスクを装備した二郎が欲望のままに動いたのは、再現されたマスクが原因だったのをこの時、理解した。

暫く1人でキャスターに時の行動で一人悶えていると扉がノックされ食事を持ってきたリズがいた。

部屋で1人で食事をした二郎は大浴場で入浴してベットに入った。

ベットに入って二郎は気がついた。

大浴場で長い時間入浴していれば入浴に来た裸のリズと会えたかもしれないと改めて気が付いた。

一人ベットで涙を流しながら二郎は眠りに落ちた。

翌日

部屋で朝食を食べた二郎はアインツベルンの森の奥深くで能力の確認をしていた。

プレデター同士の戦い。

プラズマ砲が飛び地面が抉れる。殴られた者は木々を倒して倒れる。殴った者は強靱な脚力で飛び上がり追い討ちをかけた。

倒れた者がスピアを投げて相手のバランスを崩し、その隙に体制を整えた。

2人の戦いは舞踏のように思えた。全ての攻撃は予定調和、避け方は台本通り。終わりのないダンス。

昼を過ぎ、夕方近くになってきたので二郎は戦いをやめた。1人は透明になり森を出て町に向かった。

もう1人の二郎は右手に短くした状態のスピアを持ってアインツベルンの城に戻った。

昼飯を食い損ねたな〜と思いながらドアを開けると、見覚えのある後姿を見た。

凜、セイバー、士朗、アーチャーが奥にいるイリヤとバーサーカーを警戒していた。

「ふふふ、ハンターも来た様ね。おにいちゃんも凜も降参しなさい。命までは取らないわ。」

振り向くセイバー、士朗、凜。アーチャーはバーサーカーを警戒している。

「な、なんなのよ。こいつは!」

凜が驚き叫んだ。

今の二郎はバーサーカーと同じ位の身長で荒々しい雰囲気を出して

いる。

ヘルメットをしていて表情も見えない。

「シロウ！ここは任せて下さい！」

セイバーが見えない剣を構え二郎に接近してきた。

二郎の視界が何度か変わり、黒と白だけの視界になるとセイバーの剣が視認できた。

二郎は落ち着いて右腕に装備しているリスト・ブレイドを伸ばし受け流すと大きく後ろに跳んだ。

扉から外に出た二郎はセイバーとの距離を10メートルほど開けていた。

二郎はそのまま何度も飛び続けて森の奥まで退却した。

周囲500メートルに人間の気配が無いことを確認した二郎は姿を消し再びアインツベルンの城を目指した。

城に戻る途中にイリヤとバーサーカーを見つけた二郎は姿を隠したまま2人の後を付いて行った。

歩き続けること2時間。森の中でようやくセイバーと士郎を見つけた。少し開けたその場所は木々の枝から奇襲をするには十分可能だった。

二郎は何度か視界を変えると木々の枝の間に人間の反応を見つけた。

凜が息を潜めて隠れていた。

セイバーとバーサーカーの戦闘が始まった。バーサーカーの力のあ  
る攻撃を一撃でも食らったらお終いのセイバー。

セイバーはギリギリながらもバーサーカーの攻撃を紙一重でかわし  
ていた。

攻撃の当たらないセイバーと攻撃の効かないバーサーカー。

凜の奇襲で何度か死んだバーサーカーは傷を再生し、再びセイバー  
と戦闘していた。

士朗は投影でカリバーンを投影しようと目を閉じ集中していた。

士朗の手にエネルギーが満ち、カリバーンが投影された。

投影されたカリバーンを手に持ちバーサーカーと戦う士朗。

そして、セイバーの手に渡されたカリバーンは今まで以上に輝きそ  
の力を解放した。

ように思えたが、何もない空間から射出されたプラズマ砲にセイバ  
ーはその場所から飛び退き距離を取った。

飛んできた方向を見たセイバーは驚愕した。

空間が人の型に歪んでいた。

そして現れた姿はプレデター状態の二郎だった。

右腕にスピアを掲げて軽く振ると軽い音がして長く伸びた。そのスピアの先端をセイバーに向けて二郎から言葉をかけられた。

「此処八引ケ。決戦八柳洞寺。」

普段の二郎とは違う怪物のような声が発せられた。その様子を見たイリヤが猛反発した。

「ちょっと！あと少しで勝てたのに何してるの！」

二郎はイリヤを見て同じことを言った。

「此処八引ケ。決戦八柳洞寺。」

壊れたラジカセのように同じ言葉を繰り返す二郎。

その様子に何かを感じたのかイリヤは不機嫌ながらも了承した。

「わかったわ。バーサーカー帰りましょう。」

イリヤが城に向うとバーサーカーもその後ろに着いて行った。

二郎はスピアを下げるとイリヤの後を追うように歩いて行った。

数歩、歩くと二郎の体は消えていった。

「今の武器は山本殿が持っていたものだ…。なぜ、あの者が…」

セイバーの疑問に答えてくれる者はいなかった。

イリヤの後を付いて行った二郎はセイバー達から十分に距離を取ると姿を現した。

「それで、なんで柳洞寺なの？」

イリヤは二郎を見ずに話を振った。

「ああ、あそこには大聖杯があるんだろう？ だったらそこが決選に相応しいと思うがな。」

ヘルメットを外して二郎が答えた。

「決選？ まだ、倒していないサーバントが多いわ。セイバー、ランサー、ライダーと前回のアーチャーね。」

「…ランサーは来ない。もうすぐ倒される。」

「なんで分るの？」

足を止めたイリヤが二郎に顔を向けて聞いてきた。

「んー、倒すのが俺だからかな？」

「あなた、ここにいるのに違う場所にいるランサーを倒すの？ 矛盾してるわよ。」

「一般的に見て矛盾しているかもしれない。」



「いえ、魔術的にみても無理よ。」

不可能と言い切ったイリヤは歩みを進めた。二郎はイリヤを追いつながら話を続けた。

「無理や不可能をなんとかするのが俺だ。俺に掛ければ大抵の事をなんとかしよう。」

「ふーん、不可能を可能にできるの？」

イリヤが横目で二郎を見ながら聞いてきた。

「いや、『不可能をなんとかする』であって可能とは言っていないぞ。なんとかするってのは、目的の為に他の犠牲を躊躇わないってことだ。」

「じゃあ、わたしがセクシーな美人になりたいって言うたら？」

「セクシーな美人を誘拐してイリヤと脳移植をする。セクシーな美人の体を得られるが長生きできないし、意識も戻らないかもしれない。だが、希望は叶えた。」

「なによそれ。希望を曲解してるわよ。」

イリヤが半目で二郎をみた。二郎は半笑いで答えた。

「リスクが無く、不可能を可能にするには世界に散らばった7つの龍玉を揃えて神龍に願いを叶えて貰うしかないな。」

「そんな物があるの？知らなかったわ。」

「まあ、知らなくても仕方ない。イリヤはまだ小さいからな。H A H A H A。」

二郎がアメリカンコメディ映画のように笑った。

「むう、レディに小さいって失礼よ!」

「はは、済まなかったな。…ランサーを倒した。」

イリヤは眼を閉じて何かを我慢していた。

「…ん、そのようね。」

「すぐに判るとは、流石は大聖杯を呼ぶための小聖杯だな。」

「…よく知ってるわね。どこまで知ってるの?」

「どこって…。俺は知ってる事しかないぞ。まあ、今回の聖杯戦争の事なら大体知ってるぞ。サーバントの正体は知ってるし、今回の影で動いている者も知ってる。」

「影で動いている者? 誰よ。」

「今は教えないし、全ては柳洞寺にある。そこが俺の終着点だ。全てが終わったら少しだけ教えてやるよ。」

二郎が微笑みながらイリヤの頭を撫でた。イリヤは直ぐに振り払うと、今教えないよと口を尖らせていた。

気がつけばアインツベルンの城まで来ていた。二郎はイリヤの不満を無視しながら扉を開けて中に入った。

すでに二郎の頭の中では柳洞寺での対応を考えていた。

ランサーはもう1人に別れた二郎が倒した。

戦闘場所が協会内だったので二郎のプラズマキャノンで建物は崩壊し、崩壊に巻き込まれたランサーは重傷を負いながらも倒壊した家屋から出ようとした所を姿を消した二郎に胸を突かれて消えていった。

ランサーを倒した二郎は、アインツベルンに戻らず姿を消して柳洞寺に向かった。

## 第27話

アインツベルンで一夜を過ごした二郎は、昼過ぎにイリヤとバーサーカーを連れて柳洞寺に向かった。

柳洞寺までの道はお互いが無言だった。

二郎、バーサーカが姿を消していてイリヤが1人で歩いている状態で話しているのは大きい声で独り言を言っているようにしか見えないからだ。

柳洞寺の長い階段を昇りきったイリヤは驚愕した。

建物はすでに崩れ落ち、地面がいくつも穴が開いていた。

ギルガメッシュが剣を射出し、其れを強靱な脚力で避けて行くプレデター状態の二郎がいた。

一瞬の隙を突いてプラズマキャノンを放つ二郎。避けるギルガメッシュ。

イリヤは後ろを振り返り人型に歪んだ空間を見て二郎が後ろにもいることを確認した。

「あれ？もしかして双子？」

イリヤが戦闘を眺めながら頭に浮かんだ疑問を口にした。後ろから姿を現した二郎が答えた。

「イリヤ、神って信じるか？」

「神様？ヘラクレスがいるなら、他の神もいるわよね。」

「まあ、そうだな。それなら、その神話の神々は誰に作られた？最初の神は何所からきた？」

「うーん…、それは…」

「人間の想像をはるかに超える生命体がいる。たとえば、一度死んだ俺を生き返らせた上に死なない体くれるんだ。」

「本当に？証拠は？」

二郎は溜息を着き肩を落としながら答えた。

「はあ、疑い深いな。見てろよ。」

二郎が指を指した先には闘っているもう一体のプレデター、二郎がいた。

ギルガメッシュの剣を避けていたもう1人の二郎は避けた際にバランスを崩してしまった。

片膝を付いた二郎に無数の剣が襲いかかった。二郎は避けようと後方にジャンプをしたが、無数の剣が二郎の腹部に突き刺さった。

剣の威力が強かったのか、二郎は上半身と下半身に別れ上半身が宙を飛んだ。

宙を飛んだ上半身は空中を舞っていると千切れた腹部から足が生えて、地面に綺麗に着地した。

下半身側も上半身が腹部から生え、復活していた。

イリヤの後ろにいた二郎はいつの間にかギルガメッシュの前にいた。

二郎3体がギルガメッシュに攻撃を掛ける。それぞれが別方向から攻撃した。

ギルガメッシュは剣を放出して1体をけん制。横から飛んできたプラズマキャノン avoidance、後方にいた二郎のスピアを乖離剣で弾いた。

そして、いつの間にか攻撃に参加していたバーサーカーに対しても剣を放出してけん制をした。

「クツ！我を手こずらせるな！」

ギルガメッシュが叫ぶと空中から鎖が伸びてきて二郎3体とバーサーカーが拘束された。それぞれが人を超える力を持っていても鎖の拘束から逃れられなかった。

4人の包囲網を逃れたギルガメッシュは距離を置き4人に向かって、乖離剣の真名解放をした。

「エヌマエリシュ！！」

剣から放たれた光が二郎3体とバーサーカーを包み込んだ。

「バーサーカー！」

イリヤが涙目で彼の名前を呼んだ。光が納まりバーサーカーがいた場所には何も残っていなかった。

士朗、セイバー、凜、ライダーが柳洞寺に到着したのは丁度そのときだった。

柳洞寺で発行現象の直後についた彼らが見たのは崩れ落ちた柳洞寺とイリヤとギルガメツシュだけだった。

「ギルガメツシュ！」

セイバーがギルガメツシュを睨んだ。

「ククク、遅かったなセイバー。残りのサーバントはセイバーとこの女だけだぞ。さあ、最後のサーバントを倒し聖杯で受肉するのだ。そして我の物になれ。」

「何をふざけたことを！」

セイバーが叫ぶと見えない剣を構えてギルガメツシュに向かって行った。セイバーが激しい攻撃をしている中、ライダーが援護するように鎖のついた杭を投げた。

ギルガメツシュが杭を弾きライダーを睨んだ。

「ムッ！小賢しい！」

ギルガメツシュが叫ぶと彼の後ろから1本の鎖がライダーに向かっ

て伸びてきた。ライダーはその鎖を弾くと腰を落とし攻撃態勢になった。

しかし、ライダーの頭上から無数の剣が勢いよく落ちてきてライダーは多くの剣に貫かれて消えていった。

しばらく、セイバーとギルガメッシュが打ち合っていたが、徐々にセイバーが押されて行った。

「フハハハ！どうだセイバー！我の方が強い！さあ、我の物になるがよい！」

「クッ！何度言われようと断る！」

「…そうか、ならば死ね！」

ギルガメッシュの猛攻にセイバーがなんとか防いでいたが、ギルガメッシュの一言でセイバーの剣が弾かれ、弧を描いて飛んで行った。

「死ね。」

ギルガメッシュが冷たく言い放つとセイバーを剣で刺し殺そうとした。

その時、ギルガメッシュとセイバーの間にプラズマキャノンが飛んできた。

ギルガメッシュとセイバーはそれぞれ後ろに大きく跳んで避けた。



エヌマエリシュで消滅した二郎はディープ・インパクトと名付けた落下運動の衝撃で別れた半身を使ってプレデター状態で復活した。

姿を消した二郎はギルガメッシュの隙を探していた。セイバーに止めを刺そうとするギルガメッシュの横からプラズマキャノンを撃った。

しかし、寸前のところで回避されてしまった。プラズマキャノンを避けたギルガメッシュは二郎のいる方向に剣を射出した。

狙いを付けずに弾幕を張るように剣が二郎に向かっていった。

巧みな回避で二郎本人には大した傷はなかったが、二郎は肩にあるプラズマキャノンと腕のコンピュータガントレットが壊れてしまった。

コンピュータガントレットが壊れた二郎が姿を現した。肩の壊れたキャノンを引き千切り投げ捨てると、キャノンは小さな音を立てて爆発した。

そして、二郎はゆっくりとヘルメットを外した。

ヘルメットの中の顔、口の回りは被膜に覆われた4つの爪状の器官が四角く配置されていた。それぞれが大きく開くと二郎が奇声を上げた。

「キシャー……!!」

大きく叫んだ二郎はスピアを持ってギルガメツシュに向かって走り出した。

二郎のスピアでの突きを弾き、乖離剣で袈裟切りをするギルガメツシュ。

髪の毛状の器官を数本を切られながらも体を捻りながら回避しそのまま回し蹴りをする二郎。

ギルガメツシュは乖離剣で蹴りを防ぎ二郎に向かって剣を放出した。

二郎は降り注ぐ剣を連続後方宙返りでギルガメツシュから距離を取りながら回避していった。

二郎が着地したのはセイバーのすぐ横だった。そして二郎は膝を着いた。

二郎の体をよく見ると脇腹が抉れて無くなっていた。そこからは大量の緑色の体液が流れていた。

「グウウ、戦士ヨ俺ガ奴ノ動キヲ止メル。必ず仕留メロ。」

「…わかりました。必ず倒します。」

二郎の怪我を見たセイバーは彼が長くはないと思い返事をした。

その様子に納得した二郎は頷くとギルガメツシュに向けて駆け出した。

ギルガメツシュは二郎を近付けないように剣を射出して二郎をけん

制したが、二郎は躊躇せずに近づいていた。

二郎はギルガメツシュに近づくとびに傷を負っていた。肩には斧撃で大きく傷を作り、太腿は槍で浅くとも広い傷を作っていた。

ギルガメツシュの目前に着いた二郎は満身創痍であった。体中は傷だらけ、スピアを持っていた右腕は肩から先が無くなっていた。

「ククク、これで終わりだ！」

ギルガメツシュが乖離剣で二郎に止めを刺そうとした。

「残念だったな、今度は前と同じようにいかないぞ！」

二郎が自分の声で叫んだ瞬間、ギルガメツシュの右腕とともに乖離剣が宙を舞った。

二郎の左手には青い刀身の剣、ライトセイバーが握られていた。

「がぁぁ！我の腕が！」

叫ぶギルガメツシュに対して二郎は左腕で顔面を殴った。

鼻がつぶれ、前歯が折れたギルガメツシュは苦悶の表情だった。

二郎は怯んだギルガメツシュの後ろに回り左腕だけでギルガメツシュの胸に腕を回し力を入れて押しつぶそうとした。

メキメキと音がして黄金の鎧が二郎の腕で潰れていった。

「ええい、離せ！！」

ギルガメツシュが暴れているが二郎はそのまま力を込めて行った。

メキメキメキボキボキ

二郎は聞いた。鎧の押し潰れる音とは違う何か折れる音を。

「ぐあああああああああ！！」

ギルガメツシュの絶叫が辺りに響いた。

二郎はセイバーを見ると、すでに彼女の準備は終わっていた。

二郎は頷くとセイバーは黄金の剣の真名解放をした。

「エクスカリバー！」

セイバーの放った攻撃に二郎とギルガメツシュは光の中へ消えていった。

戦いが終わったとき、凜がイリヤに訪ねた。

「ねえ、あのハンターって何者なの？まさかイレギュラークラス？」

「え？知らないの？彼の正体は『ちよつと待ったー！』え？」

イリヤが声の方を向くと黒いジャケットと黒いズボン、白いシャツを着た二郎がそこにいた。

この二郎、先ほどの戦闘の千切れた腕から再生していた。

「よし、俺の悪口もそこまでだ。俺はOLの制服とかメガネが大好きだ。」

「はあ、なに言ってるのよ。」

「二郎さん！死んだはずじゃ！」

溜息をつく凜と驚く士朗。

「ああ、あれね。ギルガメッシュとの初めてのときね。俺がギルガメッシュに向かって突撃して首切られて死んだってやつ？」

「そうです。なぜ、あなたは無事なのですか？」

セイバーが会話に加わり二郎に問いかけた。

「そうだな…、俺の隠された秘密の能力の一つだ。内容は秘密だけど、あそこで死んだように見せかけてイリヤのほうに合流したんだ。」

「何故です！なぜそのようなことをしたのですか！私たちがどんなに悲しんだ事か分かりますか？」

怒り心頭のセイバーに二郎が答えた。

「ごめん、言い訳はしない。」

「ハンター、あなたは一体何者なの？」

イリヤが二郎に質問した。

「言ったと思うが、俺は俺だ。奇麗なおねーちゃんが大好きな普通のエロい男だ。」

「そうじゃなくて。」

「全てが終わったら少しだけ教えてあげるよ。」

イリヤは頬を膨らませて不機嫌そうに頷いた。

「で、聖杯はどうなったんだ？」

士朗が凜に問いかけた。

「さあ？知らないわよ。」

「んー、この地下に巨大なエネルギーを感じる。全員で行ってみるか？」

二郎が告げると全員が頷き了承した。

二郎を先頭に全員が移動を開始した。

岩の亀裂から地下に入り長い洞窟を抜けると大きな広間に出た。

そこには空中に浮かぶ赤い玉とその前で佇む言峰神父がいた。

二郎が言峰を無視して話を始めた。

「あの赤い玉からフォースの暗黒面を感じる。とても強力な力だ。」

「フォース？暗黒面？」

凜が二郎に訪ねた。

「簡単に言えば、フォースは眼に見えないけど確かに存在するエネルギーの流れ。暗黒面は負の感情や怒りで満ちた心から引き出されたフォースの事を言うんだ。」

「ウム、その男はわかっているようだな。」

二郎は言峰を無視してセイバーに訪ねた。

「さて、セイバー。あの赤玉を消滅させる事はできるかな？」

「…ええ、できます。あのような悪意に満ちた聖杯では私の目的はかなえられそうにない。例えこの身が消えようともあれだけは消滅させて見せます。」

「セイバー、君はあれかな？次にエクスカリバー討ったら消滅するって言ってるのかな？」

「はい、次が最後になります。」

「わかった。君は待機だ。万が一に備えてみんなを守ってくれ。」

「…では、あれはどうするのですか？」

「任せろ。我に秘策あり。って事で全員撤収！衛宮家で勝利の宴の準備をおねがします。できたら裸エプロンを約束してくれると俺の生還率がグッと上がります。」

「わかったわ。私が裸エプロンで出迎えてあげるわ。」

イリヤがそう言うのと二郎は悲しそうに答えた。

「ロリはちょっとノーサンキューです。っとイリヤ受け取れ。」

二郎が投げたのはライトセイバーの柄だった。イリヤが受け取ったのを確認した二郎は叫んだ。

「ここは俺に任せて早く行け！」

「わかったわ。」

凜が出口に向かって走って行った。その後ろをイリヤ、士朗、セイバーが続いた。

全員が脱出したのを確認した二郎は言峰を見るとニヤリと笑った。

二郎は左腕だけが銀色のマネキンになり、次の瞬間にはプレデターの左腕になった。

警戒している言峰を見向きもせずに腕のコンピューターガントレッドを操作すると、一定の速度でピッピッピッとなり始めた。

「言峰神父だったかな？今、自爆装置を起動した。あと5分で爆発



する。俺を倒して爆発を止められるかな？」

「フツ、嘘は良くないな。自爆しても大した威力は無いのだろう？」

「ああ、確かに威力は弱く設定したから半径200メートル以内は全て消滅するだろうな。」

「200メートルか、確かにこの洞窟は消滅し、聖杯も消えるだろう。だが、本当にそのような威力があるとは信じられんな。」

「まあ、信じるも信じないもご自由に。」

そついうと二郎は地面に座った。

言峰は油断した二郎に向かって走り出した。

座っている二郎は右腕を落ちている岩に向けた後、言峰に向けた。

岩が引力を無視した横の動きをして言峰に衝突した。

言峰は数メートル転がると地面に倒れた。

二郎が右腕を天井に向けた後、言峰に向けると天井の一部が崩れ落ち言峰に降り注いだ。

言峰は避ける時間もなく、いくつかの小さな岩に両足が埋まった。

「グッ！」

岩から逃れようとした言峰が苦痛に顔を歪めた。恐らくは足が折れ

ているか潰されているのだろう。

「言峰神父、あんたの負け。まあ、時間が来るまでそうしている。」

暫くすると聖杯が振動しだした。

言峰は痛みに顔を歪めながらも喜んで二郎に言った。

「見よ、もう直ぐ生まれ『残念！時間切れ！』」

二郎を中心に光が広がり爆発した。その爆発に言峰は巻き込まれ、聖杯も光の中に消えて行った。

士朗たちは柳洞寺から噴火のように光が空に昇ったのを見た。

そして確信した。あれは二郎が行った物だと。

衛宮家に着いた士朗たちはそれぞれが居間で座って休憩をしていた。

桜がそれぞれにお茶をだしていた。

イリヤは二郎から渡されたライトセイバーの柄を眺めていた。

「ねえ、それって二郎から渡されたモノよね。ちょっと見せて。」

テーブルの反対側にいた凜がイリヤの持っているライトセイバーの柄を見て興味津々に言った。

「ええ、いいわよ。」

イリヤも簡単に返事を返し、凜に柄を渡そうとした。

凜の手に触れようとした瞬間、柄が銀色の水のように手を流れた行った。

「「え！」」

凜とイリヤの声が重なった。

テーブルの上で銀色の水たまりを作った液体は意思を持つかのようにテーブルから流れて行った。

畳の上で水たまり状に広がった液体は、その中央が重力を無視して盛り上がった。

人ほどの高さになる頃には大まかな頭、腕、体、足が出来あがっていた。

銀色のマネキンは音もなく色が付くと、そこには二郎が立っていた。

「ハンター！」

喜ぶイリヤと驚く他の面々。

二郎は片手を上げて挨拶をした。

「ハイ、凜の裸エプロンが見れると聞いて復活した。さあ、早く見せんるだ。なんなら、桜とかセイバーでもへぶゆ！」

言葉の途中でセイバーから見えない剣の鞘で殴られた二郎は痛みでその場にうずくまった。

「で、俺が何者が聞きたいのか？」

居間でテーブルにあるお茶を啜りながら二郎が口を開いた。

「ええ、あなたは何者ですか？サーバントでもなく、あのような復活が出来るなんて普通の人間にはできません。」

セイバーが少しキツイ視線で二郎に問いかけた。

「んゝそうだな。ベットの中だと素直にしゃべりそうなんだけどもゝ。」

「病院のベットでよければ案内しますが？」

二郎の軽口にセイバーが少し怒った。二郎は慌てて答えた。

「俺の能力の前に此処に來た経緯を話そう。俺は並行世界から來たんだ。車の事故で死んでしまって、なぜか超絶美女にお役所仕事風な様子で生き返らせてもらってファンタジックな世界で生きていたんだ。旅の途中で野宿してたら何故か白い空間にいて、そこで筋肉ムキ無期のナイスガイにここに飛ばされたんだ。」

「なるほど、きっとその女性と男性は神様って事ね？」

凜が口を開いた。

「たぶんね。」

二郎は頷きながら答えた。

「ここに来た経緯は分ったわ。ハンターあなたの能力はなんなの？」  
イリヤが二郎に指をさして聞いてきた。

「俺の能力は、ジェダイと呼ばれた騎士の能力と体を液体金属化した事かな。」

「『『『液体金属？』『』『』』」

「ナノマシンの集合体でいろんな者になれるんだ。」

そう言うと二郎は銀色のマネキンからプレデターになり、また二郎に戻った。

「で、分裂しても全てに俺の意識があり、全てを一度に消滅しないと死ぬ事はないんだ。髪の毛1本からでも復活できるよ。」

「はあ、非常識な。」

凜が呆れた声で溜息をついた。

二郎は視界の左端のあるメールの項目が点滅している事に気が付いた。

メールボックスを開くと新着が1件あった。

件名                   そこでの残り活動時間

本文

その物語は終幕が近い。あと数分で次の物語に行  
ってもらう。

世界選別のサイコロは俺が代わりに振っておいた。  
次の物語は『ネギま』の世界                   だ。

世界移動の最中に能力として『散布』を追加しよう。  
散布はナノマシンを空中に                   散布することが出来る。

散布の最大範囲は自意識を中心として半径200メ  
ートルだ。これで散布区間ごと                   と消滅しないと君は死  
ぬ事はないだろう。

向こうの世界には原作の開始600年前のフランス  
に送ろう。この意味は分るよ                   な？

我が使途として立派に物語を掻きまわしてくれ。

アフラ・マスター

「二郎さん、どうしたんですか？」

急に静かになった二郎に士朗が訪ねた。

「ああ、どうやらもう直ぐ他の世界にいくらしい。今連絡がきた。」

「そう、それは残念ね。」

イリヤが寂しそうな表情を浮かべた。

「残念だが仕方がない。あと、誰かアフラ・マズダーって知ってる？」

「アフラ・マズダー？んどこかで聞いたことあるんだけど…」

凜が顎に指を刺しながら考え始めた。

「それってゾロアスター教の最高神よ。それがどうかしたの？」

イリヤが二郎にたずねた。

「俺に連絡をくれたのが、アフラ・マズダーらしいんだ。んで、俺を使途って言ってた。宗教のことはよくわからんよ。」

二郎はそういうと自分の体が半透明になっているのに気が付いた。

徐々に消えていく体に不思議と恐怖心はなかった。

「そろそろお別れだ。」

二郎は全員の顔をもう一度見てからゆくりと口を開いた。

「俺は…いや、…巨乳最高ー！おっぱい大好きー！」

両手を高く天に突き上げて清々しいほどの笑顔で二郎は本心を語ると消えて行った。

残された士朗たちは暫く呆けていた。



## 第28話

二郎は森の中で方膝を立ててしゃがんでいる状態で目が覚めた。

視界の隅にあると計では時刻は午前8時を少し過ぎた処。

周りを見ても人の気配はない。見える範囲内には獣道すらなかった。

二郎は視界を生命探知モードにし周囲を見渡した。

北西5キロに人間の住む村があった。

二郎は新しい能力の「散布」を試した。

二郎を中心にナノマシンが放出された。放出されたナノマシンにも僅かであるが二郎の意識があった。

試しに、ナノマシンのある空中に自分を思い浮かべると、そこにナノマシンが収束していき自分が生成された。

一瞬で現れた二郎は今までいた二郎を散文するイメージを浮かべると、地上の二郎は空気にとけるように消えて行った。

地上と空中で何度も現れては消え、消えては現れるように練習した二郎は遂に消えると同時に現れるようになるようになった。

二郎はナノマシンの範囲内なら擬似的な空間移動を得た。

二郎が気が付くと周囲はうす暗くなっていた。時刻は17時を過ぎ

ていた。

二郎は空中に浮遊すると東に向かって飛び去った。

二郎がこの世界に来て十数年たった。

今、二郎がいるのは「日本」であつた。

世界史よりも日本史が好きな二郎は歴史的な出来事をこの目で見た  
いと思い日本までやってきた。

フランスから東に飛んだ二郎は自分の飛行速度が長距離に向いてい  
ない事に気が付いた。

二郎は何かに変身してから移動しようと考えた。

そして頭に浮かんだのが、黄金の鱗に覆われた1対の翼を持ち2つ  
の尻尾をもつ3つの長い首を持つ怪獣、キングギドラだった。

身長140メートルの巨大なキングギドラに変身した二郎は3つの  
顔が同時に一声鳴くと大空へ飛び立った。

二郎は各地を遊覧しながら日本に向かった。移動時はキングギドラ  
になり、それ以外は人型に戻っていた。

ある時はアフリカでライオンの赤ちゃんに癒されながら母親ライオンに齧られて、ある時は南極でペンギンの行進の後からついていたり、インドで美人探しをしたりしながら日本にたどり着いた。

移動時の大きな姿は多くの目撃者を残し、各地で黄金竜の目撃情報を後世に伝えた。

日本の九州に着いた二郎は自分を3体に分裂しそれぞれ、東京、愛知、京都に別れて飛び立った。

それぞれの二郎は各地域の名産品を食べながら行商をして、それぞれの目的地に向かった。

京都の二郎は室町幕府の繁栄を見ながら幕末頃には幕軍の兵として働いていた。

二郎は武者鎧と長刀「正宗」で幕軍の勇将として名を上げていった。

正宗は長さ2メートル50センチ片刃の直刃で、もちろん二郎のナノマシンがつくった二郎自身でもある。

市場の買い物の途中たまたま寄った店の売り子をしていた二十歳頃の既婚女性「お園」と話が合い、次第に仲良くなっていった。

お園の旦那は店の経営者だった。息子の「彦六」（3歳）が1人いたが実の父よりも二郎に良くなつた。

お園の旦那は家庭内暴力が酷く毎日のように家族を殴っていた。

しかしある晩、京都の町が炎に包まれた。

住居兼店舗が火事で燃えてしまい、経営者である旦那は一度避難したが書類や金銭を取りに燃える家屋に入った為、帰らぬ人となった。家を失った2人を二郎が「とりあえず落ち着くまで」と二郎の住む家に連れて帰った。

数日後の深夜、二郎が寝ていると何者かに襲われた。

両手両足を拘束され、口も猿轡を噛まされた状態で目が覚めた二郎は女性の恐ろしさを知った。

翌日の二郎曰く

もう、一滴も出ません

半強制的に未亡人と連れ子を家族にされながらも、二郎は楽しく生活していた。

彦六にジェダイ風な剣技で稽古をつけると、彼の实力は恐ろしいほど伸びて行った。

彦六も元服し、結婚して子が出来る頃になると各地に戦火が広がった。

幾つかの内乱を収めてきた二郎だったが、二郎の元に書筒が届きお園が流行り病で死んだことを知った。

二郎はそれを境に京都にいる彦六に自分の長刀「正宗」を預けた。  
二郎は彦六に「彦六の血が通った一族しか扱えない」と伝えた。

一族の者が扱うと羽のように軽く、他の者が扱うと大木よりも重くなる」と伝えた。

刀を持った時に手のひらのDNAをナノマシンが一族かどうか判断する仕組みだった。

二郎は単純に彦六の一族に対する保険だった。何かトラブルが起きて彼らで対処できなければ助けようと思っていた。

そして、世界を見る為に船で中国に渡った。

中国からシルクロードを通り各地で観光や一晩のトキメキを繰り返した二郎はヨーロッパの田舎で

「二郎の二郎による二郎の為の二郎だけの生活」をスローガンに村を作った。

村人は姿、形、性別、年齢は違うが全員二郎で、それぞれが設定された生活行動や会話の癖を作り「人間ごっこ」をしていた。

そのまま時間は進み多くの移住者が村に住み、いつしか町になった。そして国の一部になった。

愛知の二郎は織田信長の配下の1兵卒として戦に参加した。

華々しい戦果を挙げること無ければ目立つことも無かったが、何故か信長からの覚えが良く信長の直属の兵長にまで昇格した。

本能寺に行く直前に二郎が独身と分かり信長からの命令で婚姻するまで同行してはならないと命じられた為、信長の最後は見られなかった。

秀吉とは其れなりに仲の良かった二郎は石田光成とも親交を深めた。豊臣での二郎の評価は高く、兵の損失が最も少なく確実に策をこなす人物と評価されていた。

なぜなら、戦場で味方が危険になると二郎が数人に増え兵の損失を抑えつつ策を実行してきただけだった。

大坂夏の陣では豊臣方に着き、豊臣の滅亡を見た後に手勢を連れて徳川に下った。

二郎は徳川家康とは仲が悪く、自分の部下の処遇と安全を確認すると、夜中のうちに軟禁されている部屋に手紙を残し姿を眩ませた。

その後、二郎は姿を変えて日本各地を渡り歩いた。

時には九州で桜島の噴火を眺め、時には北陸の大雪で立ち往生したり、自由気ままな旅をしていた。

ある冬、長野の山村で大雪の為に立ち往生していた時に村が雪崩に飲み込まれてしまった。

二郎は生体センサーで救助を行ったが雪の中から助け出せても避難する場所も無く凍死していった。

唯一生きたまま他の村までたどり着いた少女「梅」は、村の全滅を聞き大声を出して泣いた。

数日経ち少女は落ち着きを取り戻した。少女は二郎に恩返しのために旅に着いていきたいと言ってきた。

二郎は美人のおねーちゃんが好きだが、少女には興味がなかったのでも考えずに同行を許可してしまった。

二郎は少女の話相手として二郎の子供バージョンをナノマシンで作った。

二郎が2人いては呼び方が困るので、見た目が丸く小さく樽のような姿だったので小さな二郎を「樽吉」と呼んだ。

旅の途中、ある町で相撲の興行が行われていた。二郎たち3人は興行を見てその迫力を楽しんだ。

ここで樽吉は相撲の親方からスカウトされた。姿は他の子たちよりも肥えていて背も大きい。

当時の江戸の平均身長は今の平均から10センチから20センチ低いと考えても、大人の二郎も子供の樽吉も他の人よりも頭1つ分は背が大きかった。

何も考えずに樽吉は承諾し二郎もしばらくは同行すると親方に伝えて江戸まで同行した。

梅は樽吉といると笑顔を取り戻すようになったので、二郎は相撲の親方に梅を樽吉と一緒に成長できるようにお願いした。

二郎は樽吉の修行を数日間見ていた。梅と部屋の兄弟子との関係も大丈夫と判断し相撲部屋を後にした。

二郎はそのまま誰もいない場所までくると、その姿をナノマシンが分解し溶けるように消えて行った。

数年をかけて修行した樽吉は四股名を「雷電為右衛門」（らいでんためえもん）と名付けられた。この時のすがたはエドモンド本田だった。

雷電はその強さに多くの技を禁じ手にされたがその勝負に負けはなかった。

当時の相撲には各藩からの関わりが多く、有力藩のお抱えの力士が負ける事は許されなかった。

その為に雷電の強さは周りから妬まれ恐れられた。

雷電が連続優勝をした為、ある藩のお抱え力士が雷電の弱点の妻の梅を誘拐した。

雷電は誘拐犯の誘いに乗り1人で指定された人気のない川辺まできた。

そこにはおよそ30人のゴロツキと誘拐した力士、縛られてはいるがそこそこ元気な梅がいた。



雷電は30人を1人で倒したが背中には2本の刀が刺さっていた。

梅を誘拐した力士を張り手で瞬殺し、ゴロツキを投げ技や閉め技で倒していった。

そして、縛られているが元気な梅を肩に担ぎ雷電は急いで江戸の相撲大会の開催地まで走った。

今まで無敗なのでこれからも無敗でいたい、そう思っていた。

雷電は控え室で急いでマワシを付け縛られている梅を親方に預けると急いで土俵まで走った。

行事の呼び出しにギリギリ間に合った雷電はここでやっと一息つけた。そして気が付いた。

あれ？背中の刀抜いてない

飛び交う悲鳴。混乱する客。雷電を心配する行司。そして背中に刀を刺したまま相撲をとる雷電。

彼はこの場所の後に將軍から改名を指示された。新しい名前は

「雷電 不死右衛門」（らいでん ふしえもん）

雷電は25年に渡り無敗が続けていた。梅との間に子は出来なかったが2人の養子を育て、その2人も成人した。

梅が病気になる彼女を看病するために雷電は引退した。

周りからは部屋を立ち上げ若い力士を育てると思っていたので、妻への献身的な愛情に江戸の女性や市民からの評判は上がった。

逆に武士からは女の尻に敷かれていると馬鹿にされた。

雷電は梅が病でこの世を去り、葬儀を終えると家屋を処分し2人の子に別れを告げ、長崎の出島に向かった。

長崎の出島からポルトガルに渡った雷電は、ポルトガルの人気の無い裏道で顔にある皺を無くし20台の若い顔と体のエドモンド本田になった。

雷電はポルトガル商船に彼特製の金塊を渡しアメリカ大陸に向かった。

アメリカ大陸では西部開拓時代と言われた時期で、バッファローが群れをなし、悪党が蔓延っていた。

雷電は何十年もアメリカ国内を放浪していた。

ただ、放浪をしていただけでは無く、各地で二郎の分身を残していた。

時代は流れ、彼らはアメリカ国民になった。

ニューヨークでの彼は、姿を変えて何十年も生活していた。

夜になると彼は地域に蔓延る悪党を捕まえては警官に引き渡していた。

その姿は赤いマントを付け、胸に「S」のマークを付けた服を着ていた。

正義を愛し悪を懲らしめる彼はスーパーマンと呼ばれていた。

銃の弾よりも強靱で飛行機よりも早く汽車よりも力強い。

まさにアメリカが誇るスーパーヒーローになった。

いつしかスーパーガールと呼ばれる女性が登場し数年後にはスーパーキッズが誕生した。

彼はこのサイクルを何十年と続けて行った。

他の地域ではバットマンやMr.インクレディブル、さらにはX-メンのメンバーも各地で世代交代をしながら活動をしていた。

東京に向かった二郎は静岡で茶摘みを体験したり鎌倉で観光しながら東京に着いた。

東京と言っても江戸時代前の町にもなっていない小さな村の集まり

だった。

二郎は村の外れの廃屋を改修し剣術道場を開き生活を始めた。道場の名前は「風鈴館」

由来は軒先に風鈴があつたからと単純であつた。

人口の少ない村なので普通なら道場の収入だけでは生活できなかったが、二郎は食事を取らなくても生きる事が出来たので収入が無くても問題なかった。

数年後には村に溶け込む事ができた。隣人や村長とも友好的な関係ができた。

そんなある日、村が野党の群れに襲われた。二郎がいたのが村の外れだったので野党の襲撃に気が付くのが遅れてしまった。

二郎が道場に飾つてある刀を持ち村に急行すると村のほとんどの男は殺されていた。女はその場で暴行されていた。

二郎は刀の峰で野党を倒していった。野党は怪我をするが命には問題なかった。二郎の鬼人の如き強さに野党はけが人を庇いながら村から撤退していった。

野党が去つた村は悲惨だった。多くの死体、弄られた女性。

二郎は死んだ村人を弔つた。そして村長から村の外れから村の中に引越すように言われた。

二郎は少し迷つたが了承し翌日には引越しを終えていた。

新しい家は先日野党襲来時に一家が殺された家で、その家族は二郎とも面識があった。

狭い一軒家なので道場は無く、暫くしたら近くに立てようと思っていた。

そして時は流れ、村にも人が増えた。徳川が城を新しく建て始めた時は二郎も手伝いに行った。

石垣の運搬は他の工務よりも収入が良かった。

野原に家が建ち、川に橋が掛かりさらに多くの人が移住してきた。

時が流れ、二郎の道場も多くの門下生が集い江戸では有名な道場になっていった。

年を取った二郎が子供の二郎を養子にし、その子が道場を継ぐようにしていた。

兄弟子からは反対の声が上がったが、子の二郎は誰よりも強かった。なので兄弟子も簡単に諦めた。

若い二郎は吉原に入り浸り、時には兄弟子から闇討ちのような事もされたが比較的平和に過ごしていた。

世代交代を何十回もしていた二郎は、そろそろ幕末と思い周囲の情報を集めた。

この時の二郎は60才過ぎの白髪の老人であった。

巷では黒船が来たとか大騒ぎになっていた。

二郎は師範代に京都で骨を埋めると言い、風鈴館の看板をおろした。師範代には、新しく道場を開く際には古い名を使わなければならない。と言いつつ京都に旅立った。

京都に来た二郎は姿を老人から若い体に変えて京都の池田屋の近くの宿に泊まった。

このころの京都では新撰組が幅を利かせていた。

ある夜、二郎はフォースに導かれるように宿を出て歩きまわった。

二郎は少し先で1人の男が3人の男に襲われていた。状況を見ようとして一度立ち止まった二郎は襲われていた男が殺されるのを見た。

二郎は殺された男よりも殺した男に興味が出た。

その男は抜き身の刀のような雰囲気でこちらをチラリと見ると3人で襲いかかってきた。

二郎は刀を持っておらず、3人の攻撃をすべて紙一重で避けていた。攻撃に疲れてきた3人は徐々に攻撃の速度が遅くなった。

二郎は後ろに跳ぶように3人から一旦距離を置いた。

襲っていた内の1人、異様な雰囲気のある男が声を掛けてきた。

「くそッ！3人の攻撃を簡単に避けるなんて！」

「お前！危ない奴だな！お前何者だ！」

「俺、人に名前を聞く時は此方から名乗るのが礼儀だな。俺の名前は山本二郎。人呼んで『風鈴館の蒼い稲妻』。」

「……………」

この頃の二郎は厨二病を発動し、後に彼の黒歴史になる。が、これが二郎と土方歳三の出会いだった。

二郎が土方の包囲を逃れ、夜中に出歩く事を控えた数日後に池田屋の暗殺事件があった。

二郎は暗殺犯が誰か興味あったが、それ以上に数日間掛けて口説き落とした茶屋の娘との情事が大切だった。

二郎はまた姿を変え平民になり済まし幕府の軍に入隊した。

その後、訓練や警備などで数年が過ぎ遂に戊申戦争がおこった。

二郎は軍の中では虐められていた。食事は残り物で、ほぼ毎晩の夜勤警護をやらされていたので、隊の仲間が戦死しようが気に留めなかった。

幕軍が北へ北へと撤退戦を開始し、ついに函館まで追いつめられた。

ここで二郎が所属していた隊は解散になり再編成先は土方率いる新

撰組になった。

幾つかの戦場を土方と共に駆け抜けた二郎だった。

ついに蝦夷共和国設立となり、二郎は残り半年で戦争が終わる事を思い出した。

3か月ほど五稜郭で過ごした二郎は次の戦地に向かった。

宮古湾での新政府軍の新型艦を奪うことであつた。

二郎は外国旗を掲げた偽装艦に乗り込んだが、運悪く嵐に巻き込まれ二郎は海に投げ出されてしまった。

海中にいた二郎は深海で姿を変えた。ファイナルファンタジーに出てくるリバイアサンに姿を変えた。

強い波も問題なく泳げる体を得た二郎は深海で暫く考えた。

幕府軍は終わる。これ以上幕府に着いて自分の正体がばれたらメンドクサイ。土方の最後は見れないが、一度東京に戻るのかな？

明治の次は大正か…大正と言う事は、着物にポニテでブーツを履く女がいる時代か…。急いで戻らねば！

脳内がピンクな二郎は東京に向かおうと思ったが明治時代が40年



も続くことを思い出し海中探索兼世界旅行に目的が変わった。

太平洋、日本海、インド洋、そして大西洋。

気が向くままに世界を一周していた二郎は、時に悪戯で船を驚かせたり海岸で良い雰囲気の人々を見て、ちよつと大きな波を向けて2人を濡らしたりしていた。

思い出したかのように陸に上陸しては各地の見物や観光、女性の尻を追いかけるのに夢中になっていた。

世界1周の旅を終え、無事日本に辿り着いた二郎は驚愕した。時代はすでに昭和になっていた。

寄り道しすぎた二郎は自分の行いを反省し、ここがネギまの世界と思いだして魔法世界に向かおうと思った。

だが、行き方を知らない二郎はいける人物がいなか考えた。

思い出したのが京都に本拠地を置く関西呪術協会の青山詠春だった。

二郎は京都に向かい交番で青山と名前が付く神社を探した。

警察官に青山と言う宮司、または関係者がいる神社を探していると事情を説明したが分らなかった。

二郎は京都市内の神社仏閣を1件づつ調べた。数日ほど掛かったが遂に目的の神社を見つけた。

二郎は京都神鳴流に弟子入りした。昭和12年の春の出来事だった。

二郎は神鳴流に入ったが気の使い方が理解できなかった。

数年ほど訓練をしていたが先輩からはお荷物と比喻され後輩からは簡単な気の使い方もできないと馬鹿にされた。

数年後には太平洋戦争がはじまった。

二郎は日本国内に戸籍が無かったので徴兵されずに済んだ。

戦争が始まったが二郎は神鳴流に在籍していた。

少年の近右衛門とも仲良くなり訓練後にはよく遊んだりしていた。

戦争が終わり、少年は青年になり世界を見る為に旅に出たのを二郎は見送った。

二郎は十数年ほど気の訓練をしたが使える気配はなかった。

先輩方が全員引退し、後輩も半分ほどが引退しだした昭和45年。

二郎も他の人間と同じように年を取っていたので今の姿は老人になっていた。

世代交代を考えた二郎は10歳の二郎を甥として神鳴流に連れてきた。

年老いた二郎は引退し、人気のない路地で消えて行った。

二郎は少し年上の青山詠春と仲良くなった。

この二郎も気を使うことが出来ないが剣術は強いと先の二郎よりは高評価された。

さらに10年の月日が経ち、詠春は友人のナギ・スプリングフィールドから手紙が届いた。

二郎もその場で内容を見せて貰ったが、

内容を要約すると、

学校退学したから自由になった

自由だから一旗揚げたい

何人かに声を掛けているが

一緒にやらないか？

と、紅き翼への参加要請だった。

詠春は了承の返事を書き神鳴流の長に話を着けにいった。

詠春の旅の許可が下りた事を知った二郎も長に話を着けに行った。

二郎は気が使えないが付いていききたいと長に説明したが長は首を縦に振らなかった。

数日の説得と熱意でついに、同行を許可された。

翌月には詠春と二郎はイギリスに向けて旅立った。

ウェールズに着くと詠春の案内で1つの家に向かった。

詠春が扉を叩くき暫くするとドアが開いた。

そこには赤毛の少年が立っていた。

「おお！詠春！よく来てくれたな！」

赤毛の男が詠春に向かって満面な笑みを浮かべながら彼を歓迎した。

「なに、気にするな。ナギの頼みなら断らんさ。」

「お！そいつは？」

ナギが詠春の後ろにいる二郎に気が付いた。

「ああ、彼は山本二郎だ。神鳴流の剣士だ。」

「おお！そうか、俺はナギ・スプリングフィールドだ。よろしくな。」

「どうも、はじめまして。山本二郎と言います。神鳴流では落ちこぼれでした。」

「落ちこぼれ？」

「はい、気が扱えませんでしたので落ちこぼれ扱いされました。」

「ナギ、彼の剣術は俺を超えている。必ず役に立つ。」

詠春が慌ててフォローした。

「そうか、神鳴流以外に何か習っていたのか？」

「ええ、昔、風鈴館と言う処で習っていました。」

「えッ？ そうなのか？」

驚く詠春に二郎が答えた。

「いや、今まで聞かれた事なかったし、その風鈴館も看板下ろして随分経つしね。」

「ふむ… 風鈴館… 風鈴館…。」

詠春が何度か呟くが、思い出せないようだ。

「まあ、よく来てくれた。歓迎するぜ。さあ、中に入ってくれ。」

ナギが詠春と二郎を部屋に入れると、青年と少年が椅子に座っていた。

「おお、来おったな。」

少年が老人の口調ではなした。

「あそこにいるのが俺の師匠のゼクト。んで、こっちがアルだ。」

ゼクトは目礼し、アルが口を開いた。

「私はアルビレオ・イマです。後方支援を得意としています。そちらは？」

「ああ、こいつが詠春。後ろにいるのが二郎だ。2人とも神鳴流の使い手だ。」

「青山詠春です。京都神鳴流の剣士です。よろしくお願いします。」  
詠春が頭を下げた挨拶した。

「山本二郎です。気や魔法を使うことは全く出来ませんが、俺の隠された秘密の能力では大抵の事は出来ます。」

「『秘密の能力？』」

「はい、これからは訓練では無く実戦になります。下手に能力を隠して仲間が窮地に陥るのは本意です。俺の秘密の1つですが分身ができます。」

「ふむ、分身か…。秘密の1つという事は他にもあるんじゃない？」

「ええ、あります。それは後々お話ししましょう。それと詠春、今まで秘密にしていた申し訳ありません。ただ、人外の力なのでこの事は内密にお願いします。」

詠春、二郎が紅き翼に加わり、彼らは魔法世界に旅立った。

幾つかの争いに参加し確実な実績を残して行った赤き翼。

ただし、ナギ、詠春、アルビレオ、ゼクトは紅き翼のメンバーと知れ渡ったが、二郎は常に荷物を背に持ち戦闘を眺めてるだけで非戦闘員と見られていた。

二郎は戦闘になるとナノマシンを放出し敵の呼吸と一緒に肺に入り、血流に乗って脳内に辿り着きそこで妨害工作を行っていた。

戦闘中の眩暈、頭痛から腹痛と対象者本人にしか分らない嫌がらせを行ってサポートしていた。

紅き翼のメンバーは二郎がいる戦闘と二郎がいない戦闘を何度か経験し、彼がいると敵が弱体化している事実が気が付いた。

詠春は二郎に何かしているのか？と詰め寄るが、二郎は何もしてないの一点張りだった。

埒の明かない状況でついに詠春が折れ、二郎が何かしていると思いつつそれ以降は何も聞かなかった。

二郎は魔法世界でも女性の尻を追いかけていた。

二郎の信念は『ロリと既婚者には手を出さない』だったので二郎の好みの容姿ならば年齢など関係なく口説いていた。

彼の魔法世界での異名は『無節操』『年増好き』『未亡人だから』等、彼の行動を見れば頷けるものだった。





## 第29話

紅き翼の一行はとある町の宿で次の目的地について話し合いが行われていた。

そこでの二郎はナギの話を聞いていなかった。

俺達、紅き翼が選んだ次の目的地は

とナギが目的と内容を説明していたが二郎の頭の右から左へ抜けて行った。

彼の頭の中にあるのは先日知り合った雑貨屋の類笑みのお姉さんとムフフな関係になるにどうすれば良いかと考えていた。

「二郎、聞いてるか？」

ナギが二郎に話を振った。

「え？ああ、聞いてる。バストとウエストの黄金比だろ？やっぱりヒップを考えて峰富士子が一番だと思う。」

「いえ、胸なんて飾りです。無駄な脂肪はいりません。やはり発育途中のお年頃が一番輝いていると思います。」

二郎に続いてアルが口をひらいた。

「全く、アルも聞いてないのかよ。いいか、今回の作戦は「ちょっと待った！」ん？」

ナギの言葉を遮り二郎が叫んだ。

「悪いが俺は今回パスさせて貰う。」

「どうしたんだ？」

「ああ、暫くは一人で行動したい。ちょっとパワーアップするから先に行つて欲しい。」

どこがパワーアップするかは言わない二郎だった。

「…そうか、わかった。」

少し考えたナギは二郎に別行動の許可を与えた。

「済まない。すぐに追いつく。」

宿を出るメンバーを見送った二郎は一人になると誰もいない森の奥にまで移動した。

二郎はポケットから何かを取り出した。

それは10センチほどの小さな人形。人型だが両手が大きなハサミで顔は蟬のバルタン星人だった。

バルタン星人は二郎の手を離れて空に浮かぶと高速で宇宙に向けて飛び立った。

バルタン星人は衛星軌道上に上昇を止めた。

そこでバルタン星人は分身した。その数およそ2万。それぞれがバ  
ランス良く円球状に並ぶと体が銀色の液体になり溶けていった。

いつしかそこには銀色の球体だけがあった。球体は音もなく姿を変  
えた。

凹凸のある表面。大きなクレータの中心には何かの発射口があった。

全長120キロを超える球体の名前はデス・スター。惑星破壊兵器  
だった。

地上から二郎がその完成を見届けると町に戻った。

そして、雑貨屋のお姉さんをナンパしようと声をかけた。

いつもニコニコと笑顔だが一切声を出さないお姉さんは二郎の熱意  
に負け声をだした。

「いいの？私、竿あるよ。」

その声は女性とは思えないほど低く、吹き替えしたジャック・バウ  
アーによく似ていた。

泣きながら宿に帰った二郎は二晩ほど泣いて過ごした。

そして思い出したかのようにナギ達に合流するため宿を出た。

詠春の生命パターンにマーカーを付けていた為、数日後には合流で  
きた。

ナギ達は黄昏の姫御子と知り合ったと言われたがロリには興味無かった二郎は軽く流した。

紅き翼が有名にありつつある頃、彼らは帝国の雇ったジャック・ラカンに急襲された。

鍋を引っくりかえされた詠春が逆上し、ラカンに向って行ったがすぐに無効化された。

ナギとラカンが接近戦で争う中、後衛の2人は二郎によって新たに作られた鍋を食べようと待っていた。

「詠春のすき焼きほどは上手に出来ないが、腹いっぱいになると思う。」

二郎が作った鍋は野菜や肉を味噌で煮込み味付けした簡単な物だった。

「うむ、なかなかイケるな。」

「はい、体の中から温まります。」

二郎の作った鍋を食べるゼクトとアル。その足元には詠春が倒れていた。

食事を終え暫くしてもナギとラカンの戦いは終わらなかった。

闘っている二人を置いて二郎は満腹感に包まれ眠りについた

二郎が起きるとナギとラカンはまだ闘っていた。

他のメンバーは思い思いに戦闘が終わるのを待っていた。

訓練する詠春、読書するゼクト、戦闘を眺めるアル、食事の準備をする二郎。

二郎は前回の味噌味の鍋を再度温め食材を追加で入れた。

十分煮込んだ後に、うどんを入れ煮込む。

ぐつぐつと音を立てる鍋を見ながら出来上がるのを待っていた。

そろそろ出来たかな？と思い蓋を開けると良い匂いが辺りに漂った。

匂いに釣られてアル、ゼクト、詠春がやってきた。

二郎の作った野菜たっぷりの味噌煮込みうどんは好評であつという間に完食された。

空を見上げるとナギとラカンは未だに戦闘を続けていた。

それから数時間経過した。

「ナギはまだ終わらせないのか…」

二郎は闘っている2人を見てつぶやいた。

「おーい。そろそろ終わりにしよう。俺、此処にいるの飽きたー。」

二郎が戦闘している2人向かって大声で叫ぶが反応が無かった。

「おーい、聞いてるか。移動しよー。無視するなー！おーい！…これより戦闘に介入する！」

痺れを切らした二郎はナノマシンを放出しナギとラカンの体内にナノマシンを吸い込ませた。

ナノマシンは気管から胃に渡りナノマシンは腸内に向かって行った。

腸に辿り着いたナノマシンは大きさを変えた。野球ボールほどの金属球になるとナギとラカンの様子が変わった。

明らかに体調が悪くなっていてラカンは腹を押えていた。

「戦闘を止めないと大変なことになるぞー！早くやめろー！」

ナギも腹を押さえているが戦闘は続行のようだ。

「2人の意思は分ったー！後悔するなよー！！！」

2人の体内の金属球は茶色い液体に変化した。その液体はそれぞれの肛門に向かって少しずつ進み始めた。

もちろん進行上の汚物を巻き込んで…

ナギもラカンも尻に手を当て脂汗を流しながら必死に耐えていた。  
無駄な抵抗とは知らずに…

「君は良い友人だが、その強情さがイケナイのだよ。」

二郎がそう呟くとナギとラカンは茶色い噴水を上げた。

死んだ魚の目をした二人はアルが魔法で造った大量の水で汚れを洗い流した。

ジャックは水に流されて消えて行った。

その後はナギは二郎の言うことを聞く素直な少年になりました。

ラカンが何度か襲って来たが二郎が近づくと直ぐに逃げて行った。

度重なるラカンの襲撃で町になかなか到着しない状態になると二郎の不機嫌さが日増しに増大していった。

そんな時にラカンの襲撃が再度起こった。ついに二郎も怒った。

「ラカン！俺の予定では、街に着いているはずなんだけど誰かが原因で、今だに街すら見えない！いい加減にナギに付きまとうのはやめろ。そんなにナギに着き纏うなら同行しろ！」

「俺「返事はハイしか認めない！もう一度無様な姿をさらすか？」  
ハイ！」

ラカンが二郎の言うことを聞いてナギの仲間に加わった。

後にジャックが言った言葉がある。

生物的に生きていても社会的に死ぬ事もある

彼は遠い目をして語っていた。

紅き翼は連合の依頼によりグレートブリッジの奪還作戦に参加していた。

ナギ、ラカン、アル、ゼクト、詠春が活躍していたが、そこには二郎の姿が無かった。

数日前に辺境の村で二郎が行った治療行為が元でナギ達とは別れて行動していた。

それは、戦争で足を無くした自警団員をナノマシンを使って復元し、元気にすると村中から感謝された。

その事を知った近隣の村から二郎に来てほしいと依頼があった。

二郎はメンドクサイと断ったが女性が怪我をしていると聞き、態度を180度変え今すぐ案内しろと叫んだ。

ナギ達には村人を介して伝言を頼んでいたので二郎が医療行為で一



時的にいなくなる事は納得した。

数時間後には、二郎はけが人の居る村に辿り着いた。けが人の家に案内された二郎は膝を着き崩れ落ちた。

女性への医療行為。この言葉だけで興奮する二郎が目にした人物は  
齡100歳を超えるような老人だった。

その怪我もベットから落ちた骨折だったので二郎がナノマシン入りの水を飲ませ骨を強化させた。

ついでに骨密度も濃くし、2度と骨折をしないようにしておいた。

その後すぐに別の村に連れていかれ怪我人を治した。その繰り返しを何度も行った。

辺境の村々で医療行為を行い多くの怪我人を治した二郎の元にナギ達が彼を迎えにきた。

そこには新しいメンバーのガトウとタカミチがいた。が、二郎は精神的に疲れていたので挨拶もそこそこに寝てしまった。

ガトウに連れられて紅き翼はウェスペルタティア王国の首都にやってきた。

そこにはマクギル元老院議員とアリカ姫がいた。

アリカ姫は何か言っていたが二郎は考え事をしていた。

（あれ？原作ってこの後どうなるんだ？え〜〜〜と…思いだせない…）

「おい、二郎、聞いているのか？自己紹介しろ。」

考え込んでる二郎にガトウが話しかけた。

「ん？ああ、山本二郎だ。よろしく。」

「…」

アリカ姫は挨拶をした二郎を冷たい目で見た。アリカ姫は事前情報として二郎の変態的な異名を聞いていた。

アリカ姫の中では二郎の印象は最悪だった。女性を軽視し食い物にしている二郎を認める事が出来なかった。

二郎もアリカ姫の印象は悪かった。挨拶をしても無視され、半目で睨まれている。

お姉さんから罵られる事は好きだが、見た目にも胸のサイズにもストライクゾーンから外れた女性からの攻撃的な態度は認めることが出来なかった。

「ナギ、今後の事だがアリカ姫に協力していくのか？」

「ああ、そのつもりだ。」

二郎がアリカ姫の視線を気にしながらナギに質問した。

「そうか…。ならば仕方ない。俺はここで抜ける。」

「!!どうしてだ?」

二郎は驚くナギに片手を上げ続く言葉を止めて、静かに答えた。

「簡単な話だ。協力者の態度が気に入らん。皆は協力するんだろ?俺だけ反対しては今後チームとして亀裂が起きるかもしれない。だから俺は抜ける。」

「二郎、考え直してはくれないか?」

不機嫌な二郎に詠春が説得しようとした。

「フン、紅き翼の荷物持ちは要らん。立ち去るが好い。」

「アリカ姫。彼は十分な戦力です。撤回してください。」

「待って下さい!彼は今まで一緒に闘ってきた仲間なんですよ!その発言は許せません!」

ガトウ、詠春がアリカ姫に苦言した。

「ガトウ、詠春、気にするな。別行動をするが一時的に抜けたと思ってくれ。」

「…そうか。また会えるよな?」

詠春が泣きそうな顔で聞いてきた。

「ああ、必ず会える。皆元気だな。また会おう。」

二郎は紅き翼に別れを告げ、王国を後にした。

それからの二郎は自分の評判を上げるために各地でナノマシン入りの水を使った医療行為を行っていた。

彼の考えでは評判が上がれば女性の方から誘ってくるかもしれない。評判が高ければ医療行為の後にムフフな展開もあるに違いない。

二郎のピンクな脳は自分の都合が良い展開しか思い浮かべていなかった。

それから半年ほど経ち、二郎は野戦病院にいた。

各地を転々としながら他の医療ボランティアグループと動向しけが人や病人を癒していた。

二郎の治療はナノマシン入りの水を「奇跡の水」と称し病人やけが人に飲ませると数日で健康な体に回復した。

重傷者には奇跡の水を怪我した場所に掛けると逆戻しの様に怪我が治っていた。

ある日二郎が医療行為をしていると、紅き翼が議員を襲い連合に追われる身になったと噂を聞いた。

二郎はそろそろ戻るかな？と考えたが、今担当している病人やけが人のほとんどが女性というのを思い出し紅き翼に合流するのを止めた。

さらに数か月経ち、二郎は「奇跡の治療者」として噂されるようになった。

ある日の昼過ぎ、けが人の治療経過観察をしている二郎に来客があった。

相手は「奇跡の治療者」との面会を求めている、と看護助手から伝言があった。

どんな人？と聞く二郎に看護助手は髭の男と二郎の質問の真意を理解し簡潔に答えた。

女だったら作業を中断してでも会いに行く二郎の真意はすぐに助手に理解された。

溜息をついた二郎は待っている男の元に歩いて行った。

そこにはガトウが待っていた。

「おお、久し振りだな！」

笑顔のガトウに二郎はしっかりと握手して答えた。

「本当に久しぶりだな。さて、この奇跡の治療者に何か御用かな？」

「二郎が奇跡の治療者？本当か？」

「ああ、残念ながら本当だ。それほどまでにこの魔法世界の治療行為は旧世界よりも一部遅れている。まあ、俺の治療方法は旧世界でも特殊だな。」

「そうか……。俺たちはこの戦争の裏にある組織『完全なる世界』の暗躍を知った。紅き翼はアリカ姫、テオドラ王女を中心に敵の組織の壊滅を行っている。」

「ほほう、ではそれに治療行為専門で従軍してほしいと言う訳か？」

「普通だったらそこで頷くところだが、二郎が相手では事情が違う。きつと次の戦いが最後だ。奴らは墓守り人の宮殿で何かを行うらしい。敵が何を行うかは調査中だ。頼む。手伝ってくれ。」

ガトウが頭を下げて頼んでいた。

「頭を上げてくれ。事情は理解した。今、俺の受け持ち患者は順調に回復中だ。すぐに引き継ぎを終わらせるから1時間ほどで出発できる。」

「ああ、ありがとう。」

「ところで、『奇跡の治療者』として行くのか、それともナギとラカンに無傷で勝った紅き翼最強の男としていくのか、どちらがいいか？」

「それは勿論、後者で頼む。」

「ああ、了解した。俺は殲滅戦も得意だ。」

その後1時間で引き継ぎと荷造りを終えた二郎はナギ達紅き翼に合流するために野戦病院を抜け目的地に向かった。

墓守り人の宮殿前の陣地でナギ達と二郎は再開した。

そこには若き日のアリアドネ議長がいたが、二郎には冷たい態度だった。

ガトウが二郎が奇跡の治療者と紹介され、自分に人を見る目が無かったと二郎に謝罪した。

二郎は気にするなと、ストライクゾーンから外れた女性に対してはエロ抜きの優しい態度だった。

「敵はおよそ20万と予想されます。…対してこちらは5万程です。」

若き日のアリアドネ議長が報告した。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせる事はできないか？」

ガトウが発した言葉をアルが返した。

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう。ええ、彼らはもう始めています…『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼らの手にあるのです。」

「ああ！よおしつ、野郎ども行く「待った！」んだよ？」

ナギの言葉を止めたのは二郎だった。

「最初の一撃は俺に任せろ。派手にやるのは得意だ。あと、増援も必要だろ？一気に解決してやるぜ。」

二郎はそう言いながらポケットから何かを取り出した。

それはクシャクシャに丸められた紙だった。この紙を地面に投げると紙が水のように溶け銀色の水たまりになった。

その銀色の水たまりから現われたのは黒い髑髏を模した仮面、全身も黒い特殊な服を着たダース・ベイダーだった。

ベイダーが姿を現すと二郎はベイダーの顔を見ながら頷いた。ベイダーも頷き合い、数秒ほど見つめあうとベイダーは自軍の戦列の先頭に飛んで行った。

ダース・ベイダーが先頭に降りると彼の後ろの地面から銀色の滝が現れた。滝の高さは直ぐに高くなり200メートルまで登った。

その滝から、白い骸骨を模した仮面を着け白いアーマーを着こんだクローン兵、100人が横列整列状態で出現した。

クローン兵は3万人ほど現れた。そして、空中を飛ぶように現れた二等辺三角形の船。

スター・デストロイヤーが現れ、その巨大な姿は見る者を圧巻した。



「んじゃ、はじめるか。」

召喚用の符も魔法陣も使わずに現れた未知なる軍団に紅き翼は驚きを隠せず思考が止まったままだった。

「大きいのいくぜ。総員、対閃光ショック防御！」

二郎が叫ぶと空から一筋の光が墓守り人の宮殿を包んだ。デス・スターからの攻撃。

閃光

爆発

衝撃波

墓守り人の宮殿は半壊していた。

「さあ行け！敵の布陣は崩れた！俺は外で指揮する！」

二郎が叫んだ。

「お、おう。行くぜえ！野郎ども！」

ナギ達が叫びながら飛んで行った。

スター・デストロイヤーからの砲撃。格納庫からはH型の小型戦闘機が3機編成でおよそ100機が飛び立った。

地上からはクローン兵がブラスター銃で隊列を組みながら前進していた。ダース・ベイダーは1人で敵陣の中で舞うように戦闘していた。

ブラスター銃や戦闘機のビーム、スター・デストロイヤーからの攻撃に魔法障壁は効果無く3万の歩兵と100機の戦闘機、1隻の戦闘母艦に完全なる世界は苦戦を強いられていた。

戦闘は数時間経過したが、完全なる世界は抵抗を続けていた。

制空権はスター・デストロイヤーが確保し、地上でもクローン兵が圧倒的な統率力で戦闘していた。

突然、墓守り人の宮殿が光球に包まれた。その光球は徐々に大きくなっていった。

そして、現れた戦艦の大軍。王国軍艦と帝国軍艦から大規模な封印術式が展開され墓守り人の宮殿が魔法陣で包まれた。

魔法陣が効力を発しようと強い光を放った。そのあまりにも強い光で誰もが目を逸らした。

その光を利用してダース・ベイダー、クローン兵と戦闘機、スター・デストロイヤーは空気に溶けるように消え去った。

空にはデス・スターが浮かんでいた。

戦闘終了後にナギ達は王国の医療団から治療を受けていた。二郎も戦闘後は『奇跡の治療者』として負傷者の手当てをしていた。

翌日には、王国の首都で表彰式が行われていたが、二郎は未だに戦場で負傷者の治療を行っていた。

新聞では紅き翼が写真付きで乗っていた。ナギ、ラカン、詠春、ガトウ、アルが紅き翼の主力として、2人のお子様もメンバーとして乗っていた。

そこには二郎の写真は無く、紅き翼の1員と公表される事はなかった。

### 第30話

オスティア崩壊。

その知らせを墓守り人の宮殿で前の野戦病院で聞いた二郎は医療ボランティアチームの半数を率いて現地へと向かった。

医療チームは帝国の飛行船に乗り込み、到着後すぐに活動が出来るようにそれぞれが準備していた。

二郎も今回は国が滅びるほどの大陸崩壊なので多くのけが人が出る  
と予想し、奇跡の水を樽の中に大量に作っていた。

崩壊した瓦礫が遠くに見えてくる頃に飛行船の高度が落ちてきた。

「高度が上がリません！」

「出力を上げろ！」

「ダメです！出力上がりません！墜落します！」

「クソっ！落ちるぞ！何かに掴まれ！」

倉庫で医療活動の準備をしていた二郎達は船内放送を聞いて近くの  
手すりや取っ手に捕まった。

急に高度が落ちる感覚がした後、大きな衝撃が二郎達を襲った。

その衝撃で二郎はつかまっていた手すりが壊れ、二郎の体は壁や床

に体を強く打ちつけて気を失ってしまった。

意識を取り戻した二郎は暗い倉庫内で周囲を確認した。

聞こえるのは呻き声と助けを求める声だった。

貨物に押しつぶされた人、パイプに体を貫かれた人、手や足を怪我した人。

医療チームの半数が怪我をしていた。

それでも怪我がない人はけが人を魔法を使い回復しようとしていた。

「魔法が効かない?!」

「違う!魔法が発動しないんだ!」

「そんな!...おい、しっかりしろ!俺を見る!こつちを見るんだ!...ちくしょう!...俺は無力だ...」

「魔法が使えなくても救ってみせる!応急処置だけでもいいんだ!みんな!諦めるな!」

「手が空いてるやつはお湯を沸かすんだニヤ!...彼はもうダメだニヤ。諦めるニヤ、まだ救うべき命はまだ沢山あるニヤ!」

医療チームのリーダーの猫の半獣人の男が叫んだ。彼の声は北斗の兄弟の長兄によく似ていた。

魔法に頼り過ぎていた彼らは簡単な応急処置しか行えずにいた。

「奇跡の水を使い！早く！まだ彼らは生きているんだ！」

二郎は叫んでいた。今まで苦楽を共にしてきた仲間達の生死が掛かっている事を自分に言い聞かせるように叫んでいた。

「さあ、この水で患部を洗うんだ。」

足が潰れた女性にコップ1杯の水を渡した。

女性は潰れた患部に水を掛けると足があつと言う間に完治した。

「君も水を配ってくれ。樽はまだまだある。さあ、急ごう。」

二郎の奇跡の水が入った樽は半分以上が墜落の衝撃で壊れていたが、10樽以上は無事に残っていた。

無事だった樽を開けてけが人にを使い多くの命を救った。しかし、救えなかった人もいた。

「手が空いたやつは他の船室にけが人がいないか見に行くんだニヤ！奇跡の水を忘れるニヤよ！入れ物は花瓶だって尿瓶だって何だっていいから必ず持つて行くニヤ！」

半獣人のリーダーがそれぞれに指示を出していた。

「俺たちは崩壊した人の救護に向かうぞ。準備を始めるんだ！」

二郎がリーダーの指示を聞いて倉庫に残っていた人に指示した。

「荷車の上にはガーゼと包帯、これは消毒薬かニヤ？俺の感だが魔法で治療できないと思うニヤ。お前ら！今回は二郎の奇跡の水を中心に活動するニヤ！さっさと荷物を積み替えるんだニヤ！」

リーダーが荷物をチェックし、持つて行く道具を変更した。

彼の感はよく当たった。過去に拳闘大会で優勝者を何度も当てていた。

また、賭け事にも強く医療チームの大半が、彼の感で大儲けをさせてもらった経験があった。

その為、今回の指示も全員が素直に従った。

「よし！樽は積んだかニヤ？とりあえずここに1樽と3人を残していくニヤ。船内にまだ怪我人が残っているかもしれないニヤ。ここでの活動が終わったらオスティアで合流ニヤ。」

「ああ、先に行つてくれ。」

残された3人は怪我人を探す為に船に残り、全員の生死が確認され次第オスティアで合流になった。

オスティアに向かった二郎たち一行は崩壊現場から運よく逃げられた人達を見つけ怪我の治療と状況の確認を行った。

「町の様子はどうだんだニヤ？崩壊寸前まで普通に生活してたのかニヤ？」

「いや、住民全員が終戦式典に参加していて、誰も街には居なかつ

たよ。あたしら貧民街に住む者の一部は式典に参加しなかったからね。」

熊のような半獣人の女性が答えた。

「俺達見たんだよ！アリカ様が俺たちを護ってくれたんだって。」

ソフトモヒカンの子供がしゃべった。

「アホトサカ！アリカ様が俺達下々のために直々に出向く訳ねえだろっ！」

坊主頭の男が少年の一人にゲンコツで黙らせていた。

「で、これからどうすんだニヤ？」

「そうだな…、奴隷暮しが関の山…拳闘士でもやるかあ？」

リーダーの問いに坊主頭が答えた。

それで彼らとは別れ、医療チームが今後の方針を決める為メンバーを集めた。

「今後の方針だが、こちらが予想していた負傷者数よりは大幅に人数が減りそうだニヤ。そこで、樽ごとに数人の人数で分散し各地で活動を行おうと思うニヤ。」

「ああ、それがいいだろう。何故か魔法が使えんからな。」

「樽はいくつあるのでしょうか？」



「樽は14あるニヤ、それぞれに4人か5人で分散してもらいたいニヤ。二郎、奇跡の水の補充はできるかニヤ？」

「補充は出来る。さっき見たが空の樽が3つあったから補充しておこう。注意事項として、この水は俺が作ってから2週間で効力がなくなる。」

「それは本当かニヤ？それなら2週間後にここに集合だニヤ。」

「まってくれ。今後の事を俺なりに考えたんだが、言っていないかな？」

「ああ、かまわないニヤ。」

「オステイアにあったウエスデルタイア王国はほぼ崩壊した。国土も国力も低下し、軍や治安維持の混乱もあるだろう。そんな時、周りの国はどう見るか？おそらくは救援と言う名前の軍隊の派遣で治安維持や救護活動を理由に実行支配をしようと思う。その時、我々医療チームはどうする？支配されて軍の命令通り味方へのみの治療活動をしていくのか？それとも、軍に属さずに活動をするのか？」

「軍属なんて勘弁ニヤ。我々は傷つき病に倒れている人の味方ニヤ。」

リーダーが意見を言うとき周りからも同意の意見が飛び交った。

「ああ、その通りだ。我々は誰かを殺す為に負傷者を救済するのではない。自己満足や自慰行為と言われようと目の前の患者を助けるのが我らの活動指針だ。それで、今回の戦争で終戦になった。終戦

の式典もやってたらしいからな。しばらくは混乱もあるだろうが、あと数年で治安も良くなり今までのような大きな争いはなくなるだろう。時代が動きつつある今、我々は今まで通りでいいのか？皆、今回の魔法が使えなくなる事で魔法以外の応急処置の大切さがわかったと思う。…うまく言えないが、今後、まとまって行動すると軍属にされる恐れがある。魔法以外の処置も覚える必要がある。この2点から考えて、それぞれ数人の小さなチームに分かれて行動する必要がある。別れた後は魔法以外の治療を学ぶべきだと思う。これが、俺の考えだがリーダーはどう思う？」

「ニヤ…、確かに戦争終わったら軍属にされるかもしれないニヤ。それに魔法以外の治療方法もそれぞれが学ぶ必要があると思うニヤ。だが、チームを解散してまで魔法外治療を学ぶ必要があるのかニヤ？」

「魔法に拘っているのは医療の発展は無い。風邪一つにしてもウイルス性が体調不良から来るものなのか、それに病を多角的に分析すれば病にかからない方法や新たな解決方法も見つかるかもしれない。」

「だが、二郎の言っている事は我ら医療チームだけで出来るのかニヤ？どう考えても百人や二百人で出来るとは思えないニヤ。」

「ああ、わかってる。高度な医療には高額なお金もかかるからな。だが、この問題をすべて簡単に解決方法もある。」

「ニヤんだって？！それはどうするニヤ？」

「俺が旧世界出身で言っただろ？向こうでは俺の言っただような治療や研究が行われていて日々進化している分野でもある。だから旧世界で医療行為を学び此方に伝えることが出来れば、今まで救えなかった命が救えるかもしれない。」

「旧世界ニヤ…。確かに旧世界の技術を学べば多くの人を救えると思う。…誰か行ってくれる人はいないかニヤ？」

リーダーが辺りを見回すと3人の女性と2人の男性が挙手した。

「ああ、若い君たちなら任せられるニヤ。済まないが頼んだニヤ。」

リーダーが5人に向かって頭を下げた。

「旧世界に出たところに迎えを来させましょう。信頼できる人物なので大丈夫です。その後はアメリカに渡って頂き、スーパーヒーロ協会経由で大学の医学部に所属し、それから各病院で実地をしてもらいましょう。これは数年から数十年はかかると思ってください。」

「スーパーヒーロ協会って何だニヤ？」

「アメリカを拠点にしていって、『弱者を守り、平和な世界を目指す』を理念にしている協会だ。所属している人は魔法以外の異能力を持っている。それは親子で受け継がれたり突然変異で能力を得たりしてる。もちろん突然変異で急に能力を得れば周りから迫害されるだろう。それを保護するのも協会の仕事だ。」

「ニヤー、二郎は良く知ってるニヤ。」

「ああ、一応俺も所属しているからな。」

たしかに彼はヒーロ協会に所属していた。協会設立メンバーの1人として名前を連ねていた。

「わかったニヤ。とりあえず、今はそれぞれ樽を持っていき救助活動ニヤ。小チーム別けは自由ニヤ。活動期間は最長で2週間ニヤ。それ以降は個人の思うように動いて欲しいニヤ。それでは、一旦解散ニヤ。」

それぞれが4人程のチームに分かれて樽の乗った荷車を引いて行つた。二郎は全員が樽の乗った荷車で移動したのを確認するとオステイアに向かって歩きだした。

1434人。

二郎が2週間で助けることが出来た人数。これが医療チーム全体になると3万4331人の怪我人を救えた。それでも多くの命を救うことが出来なかった。

そして、メガロメセンブリア軍が復旧活動と称してウエスペルタテイア王国を実行支配していった。

二郎は旧世界に行く5人と共にイギリスのロンドンに来ていた。

二郎たちはロンドンのレストランで食事しているとスーツを着たメガネを付けた男が現れた。

「やあ、こんにちわ。君たちが医療チームから派遣された5人だね。私の名前はクラーク・ケント。ヒーロー協会の使いだ。」

クラークが椅子に座ると口を開いた。

「あゝ、彼は普段は偽りの身分で活動をしているんだ。だから、彼がヒーロー協会に關係している事は秘密で頼むよ。」

二郎がクラークの事情をフォローした。

「食事が終わり次第、アメリカにある協会本部に向かいます。そこで、法務省と移民局からの面接をしていただきます。数日で移民局の方に登録されるので全寮制の医大に編入になります。何か質問は？」

クラークが5人を見ると男が手を挙げた。

「あの、法務省とか移民局って…、これって不法行為ですか？」

「今回の件は不法行為ではなく、大統領の承認を受けています。」

「大統領って…」

「協会は日々、凶悪犯罪と闘っています。それは犯罪の発生件数の低下と事件の被害者数の減少で国に貢献しています。数年前に協会がある事情でヒーロー全員の召集と4年間の特務の為、アメリカを離れていた時期と比べておよそ半分以上になっています。」

「だから、国も協会には強気な交渉はできない訳。分った？」

クラークの言葉を二郎が再びフォローした。

「分かりました。」

「二郎はどうしますか？アメリカに来るなら歓迎式典をしますが。」

「ん、式典よりも娼婦を呼んでパーティーしたいな。名づけて『ドキッ！娼婦だらけの大運動会』ポロリもあるでは無く常に出っぱなし」みたいな。」

「教会の品位を落とす行為は反対です。」

「やっぱりクラークは堅いな。俺は日本に向う。そろそろ超好景気が始まる頃だと思う。株で小遣い稼ぎしておくよ。」

二郎はクラークの冷たい視線に耐えながら答えた。

「では、私たちはアメリカに向かいます。二郎、くれぐれも協会の品位を落とす行動はやめてください。」

席を立つたクラークが二郎に向かって言った。

「ああ、日本では警察にマークされないように生活するから大丈夫。5人の事頼んだぞ。」

「わかりました。5人は協会が責任を持って預かります。それでは、また会いましょう。」

「ああ、気をつけて。」

5人がクラークの後を付いて行き、レストランには二郎だけが残された。

「ふむ、ロールプレイングで個人設定をして、分割思考でそれぞれの考え方を他と非共有し個人になりきる、ただし深層は繋がってい

るので緊急時や連絡は容易に行える、か。なかなか上手くいつてるな。」

これは二郎が昔、村を作り人のマネごとをした時に思いついた事で個々のプライバシーは守られ、限りなく独立した個体になれるように思考した結果だった。

二郎はレストランを出て、空港に向かうと日本行きの飛行機を探した。運よく4時間後の便があった。

二郎は飛行機に乗り日本に戻ろうとしたが、以前イギリスに来た際の観光ビザが切れており、オーバーステイ扱いで入国管理管に連れられて3日間の取り調べの後によりやく日本に向かうことが出来た。

日本に戻った二郎は最初に自分の銀行口座の残高確認を行った。

協会から送金された金額が800万円あり、二郎本人の残高と合わせて802万円が通帳に明記されていた。

二郎は安アパート（風呂無しトイレ共同の4畳半の部屋）を借りた。

株は都内に本拠地を置く企業数社を買った。

今は1985年なので4年ほど経ったら売ろうと考えていた。

株の購入で残金が寂しくなった二郎は、出会いを求めてアルバイトを始めた。

コンビニが無い時代なので、スーパーで品だしと倉庫整理の仕事を得た。

出会いを求めてのアルバイトだったが、周りで働く女性は中高年しかいなかった。

仕方なく女性客と仲良くなろうと考えたが、仕事が忙しく出会いどころではなかった。

時間は過ぎ、4年たった。まわりは未だ浮かれたような好景気だった。二郎が株を売り払うと総額で9100万の利益を得た。

バブルが弾けるまでは全ての値段が高いので家の購入や贅沢は一切我慢した。

アルバイトは続けていたが女性客からのアプローチは全く無かった。

しかし店長からは社員にならないかと、ほぼ毎月誘われていた。

だが、二郎はやりたい事がある。と言って毎回逃れていた。

ついにバブルが弾け株価が下がっていくのを二郎は笑いながら見ていた。

新聞やニュースでは一時的なものと報じていたが、これからやってくる大不況に二郎は自分の身の振り方を考えた。

（アルバイト代はほぼ使わずに貯金していたから1億近く金がある。今後は麻帆良に家を買う。あとネット環境も欲しいな。車も欲しい。女も欲しい。まあ、物価が落ち着くまで暫くはこの生活を続けるかな。）



そんな事を考えながら生活を続けた二郎は1994年のスーパーの閉店を機に麻帆良に家を買って引っ越した。

大きな一軒家。車が3台止められる駐車場。広い庭。2階建ての家屋。残念ながら地下室はないが二郎はこの建物が一目見て気に入った。

引っ越しして数日が経ち、生活にも慣れてきた昼過ぎに電話がなった。

電話の相手は近衛学園長だった。内容は魔法世界での事や今後の事を考えて一度話をしたい。

二郎は断る理由がないので承諾した。

すぐに会えるといわれたので学園長室に向かった。

女子中学校の中にある学園長室。なかなかの変態だな、と二郎は心のなかで呟いた。

「おお、よく来てくれた。わしが学園長の近衛近右衛門じゃ。」

「どうも、はじめまして。山本二郎です。」

頭を下げた二郎に笑顔の学園長。

「わしは関東魔法教会も治めておる。早速じゃが、君の経歴を調べさせて貰った。「奇跡の治療者」君は多くの命を救った。紅き翼とは方向は違うが確かに君は英雄だ。」

「いえ、救えなかった命も多いです。英雄ではありません。」

「そうか…。いろいろと思うところが有るだろうが、その行為と  
思いに胸を張って欲しい。」

「ありがとうございます。」

「では、君が魔法世界を去った後の事について話そうかの。オステ  
イアの崩壊後じゃな、アリカ姫は父王殺し等の罪でケルベラス溪谷  
で処刑された。」

「…そうですか。紅き翼については何か知りませんか？」

「うむ、公式の記録ではナギ、ガトウが死亡。ラカン、アルは行方  
不明。詠春は京都におる。ワシの娘と結婚したんじや。可愛い娘も  
おるぞ。ゲードルは紅き翼から離れ、今は魔法世界にいるようじや。  
タカミチはN G Oで世界を駆けまわっておる。お主、紅き翼に知り  
合いなんておるのか？」

「いえ、少し気になっただけです。気にしないでください。」

「そうかの。では今後の事じゃが、今ワシら関東魔法教会は神木、  
蟠桃を護っておる。想像を絶する魔力を内容しているあの木を悪用  
しようとする者も多い。わしらはそ奴らから神木を護っておるのじ  
や。だが、わしらも戦えば傷つき倒れ、命を失った者もある。頼む。  
ワシらに協力してほしい。」

学園長は頭を下げて二郎に頼み込んだ。

「事情は分かりました。協力しましょう。俺は何をすればいいです

か？」

「おお、ありがとう。本当にありがとう。敵は基本的に夜間に襲来してくる。それをワシら魔法使いが追い払っているんじやが、その後の治療と緊急時に備えて待機していただきたい。もちろん、報酬は払わせていただく。」

「ふむ、治療はかまいません。俺の奇跡の水を使えば死んでない限り全快します。奇跡の水を全員に配布して、学校内にストックを置いておけば夜間の緊急呼び出しも回避できそうですね。」

「噂の奇跡の水かの。なかなか良いアーティファクトを持ったようじゃの。」

「え？アーティファクト？…そうですね、アーティファクトです。」

「ふむ？では奇跡の水はどのように扱えばいいのかね？」

「そうですね、瓶か水筒に入れておきましょう。夜までには人数分の瓶か水筒と予備分に樽をいくつか用意できますか？」

「うむ、大丈夫じゃ。手配はこちらでやっておこう。」

「了解です。では、夜にもう一度伺います。」

「では報酬じゃが…、奇跡の水の価値は高いのはわかっておる。だが、これでどうにかならんか？」

学園長が二郎に見せた電卓には2000万の数字があった。

「これは一回分ですか？それとも月々ですか？」

「すまんのう。わしらとしても月々に出す金額はこれが精一杯なんじゃ。」

二郎は電卓を取り数字を入れた。

「俺はこれくらいが希望です。」

電卓には50万の数字があつた。

「ひよ？こんなに少なくないんか？」

「構いません、ただし、願があります。今、友人が1人、職を探しています。彼女は日本が大好きで日本での生活と職を希望します。彼女を雇ってくれませんか？彼女は魔法使いではありませんが、魔法の事は知ってます。」

「その女性は何か資格を持っておるかの？」

「たしか一級航海士の資格を持っています。あとスポーツが得意です。とくにバスケットとか。」

「そうか、では中学生の女子バスケットの顧問をしてもらおうかの。麻帆良女子のバスケット部は県下最下位じゃからの。住むところはどつするのじゃ？」

「ああ、それなら俺の家が半分以上空いてるので同居しようかと思っています。日本に呼び次第に学園長に紹介します。」

「うむ、ところでその女性の名前はなんと言っのかの?」

「彼女の名前は『エレン・リプリー』。ヨーロッパにあるジェロと言っ町の出身です。」

「ジェロか…」

「ジェロがどうかしました?」

「うむ、あの町は昔から曰くつきでの。なんでも昔からの住人が年を取らないと言われておつての。それを調査に行つた魔法使いが任務を忘れて変わり果てた姿で帰つて来たと言われておる。まあ、実際には連日連夜の大歓迎で高級な酒を吐くほど飲まされて二日酔いの状態でお土産まで貰つて任務を忘れて帰つてきた、というのが実際の話じゃ。」

「はは、冗談ですよな?」

「いや、本当じゃ。ワシも任務を忘れて帰つてきた1人じゃ。」

「…そうですか。コメントに困ります。それではリプリーに連絡を取りますので来日後にまた連絡します。」

「うむ、わかつた。」

「では、夜にもう一度きます。」

学園長室を出た二郎は時間を確認すると16時を少し過ぎたところだつた。

丁度学生の下校時間に重なったようで廊下には女子中学生がおしゃべりする姿が見えた。

その中からこちらを見るような気配を感じた。

辺りを見回すと廊下の角から二郎を見る金髪の少女が見えた。

二郎は少女を見た為にお互いの視線が合った。

数秒、お互いに視線が合うと二郎は気まずくなり視線を逸らし校舎を後にした。

家に帰った二郎は、軽く食事をしながらテレビを眺めながら考え事をしていた。

（あの金髪少女はたしか…、エバ？エヴァ？エバンジェリン？エヴァンゲリオンか！）

長い時を過ごした二郎は登場人物の名前を忘れかけていた。

夜9時

二郎は学園長室に来ていた。そこには大きさも色もバラバラの水筒が100本近くとポリタンク3つがあった。

「夜間警備員にそれぞれ自分用の水筒を持って来させたんじゃ。それと予備はポリタンクに入れておこうとおもってな。」

「大丈夫ですよ。一応、使用期限は2週間以内をお願いします。2

週間以内に予備が無くなったら連絡ください。連絡が無ければ2週間毎に奇跡の水を作りに来ます。」

「うむ、わかった。それで大丈夫じゃ。」

「それでは今夜の当番の方から水をいれます。…これ全部蓋開けて水入れて蓋締めるんですよね？」

「…うむ、ちと数が多いの。」

「もちろん手伝っていただけなんですよね？」

「う、うむ。もちろんじゃ…」

結局、二郎達が全ての水筒に水を入れ終ったのは2時を過ぎていた。

「学園長、ウォーターサーバーに奇跡の水を入れて各自補充でいいんじゃないですか？」

「そうじゃのう、2週間毎にこの作業をやるのはキツイのう。」

最終的にウォーターサーバーを購入し、その中に奇跡の水を入れ各自補充する方向で話は落ち着いた。

それからすぐに、関東魔法教会所属の魔法使いの死亡率は大幅に下がった。

二郎は奇跡の水の学園外に持ち出すのを禁止していたが、どこからか二郎の奇跡の水の情報が漏れ、メガロメセンブリアの上層部から奇跡の水の作成者は本国に出頭するようにと、命令が封書で届いた。

そこで二郎は手紙を書いた。

二郎の手紙の内容を内容を簡潔まとめると

自分は現場主義です。ここには護るべき樹があり、それを護る警備者の治療を日夜行っている為、本国に出頭する時間がない。

万が一、けが人が原因で護るべき物を失った責任は誰がどのよう取るのか、またその件をメガロセンブリア上層部全員の直筆のサインを明記した上でもう一度手紙を書いて欲しい。

と、書き送り返した。

数が月経過し、1995年になった。

1月の下旬の寒い日、ついにリプリーが来日した。

彼女はジェロから日本に直行ではなく、アメリカのヒーロー協会を経由してきていた。

ヒーロー協会、それは二郎が自分の都合が良いようになる為に作った協会であった。

その真の目的は、何かトラブルが起きた場合に国家権力に近いモノを持っているとイロイロと便利と考えた結果であった。

その為、リプリーをヒーロー協会に所属させて来日させればアメリカを通じて二郎の思い通りに事が運ぶと考えていた。



最近のヒーロー協会の活躍はアメリカ国内に留まらず近隣の国家から要請があれば、派遣し問題を解決していた。

ヒーロー協会幹部はリプリーの登録に反対する者はいなかったが、何人かの上院議員からストップをかけられた。

彼女のDNAは未知なものが大半を占めており、また身体能力も常人を大きく上回るものだった。

確かに、スーパーヒーローを基準にすれば物足りないかもしれない。

そこで協会は上院議員の前でいろいろな超人的な身体能力を見せた。

1週間以上飲食をせずに走り続けたり、熊やワニを相手に素手で戦ったりと見せつけて議員を納得させた。

全てが終わったのが1月中旬だった。それから旅の支度をしてやっと日本に辿り着いた。

リプリーの経歴は今後の事も考慮し、非公開となった。

後日、ヒーロー協会が文句を言ってきた議員を調べたところ、南米のマフィアから多額の資金提供を受けていたのが分った。

その後、彼らは法の裁きを受けた。

二郎が東京駅でリプリーと合流し、麻帆良までやってきた。

二郎は事前に学院長にリプリーを連れていく旨を伝えていたのでス

ムーズに事は運んだ。

「学院長、リプリーを連れてきました。」

「うむ、やっと着いたようだな。御苦労じゃった。わしが麻帆良学園の学園長の近衛近右衛門じゃ。」

「…二郎、彼は人間？確か、アストロモス号でこんなを見たわ。」

「…リプリー、彼は人間です。あなたの見たモノとは違う。よく見て、色も黒くないし、口の中に口もない。言葉も通じるだろ？」

「…そうね。すみません学園長。エレン・リプリーです。」

「何だか、人間にも妖怪にも見られなかった気がするんじゃないか…」

「気のせいです。それよりも契約内容の確認をしましょう。」

二郎が気まづくなった室内で話題転換した。

学園長、リプリー、二郎の3人でリプリーの契約内容を確認し、リプリーは内容に納得してサインをかわした。

「そういえば学院長。」

「何じゃね、山本殿？」

「奇跡の水の件ですが、補給はリプリーに任せたいと思うんですが、大丈夫ですか？」

「ふむ、それは構わないが、君は何所かに行くのかね？」

「いえ、家にいる予定ですがインターネット環境が揃って来たんで、それで株取り引きに専念しようかと思ひまして。」

「なるほどのう、問題無いじゃろう。」

「ありがとうございます。それじゃあ、リプリー頼んだ。」

「ええ、任せて。」

数日後、二郎の家で念願のインターネット環境がそろった。

二郎はエロサイト巡りの為に購入したが、インターネットの初期に、そのようなサイトはあまり多くなかった。

ある日の夜、二郎の部屋の中には二郎とリプリーがいた。

「んじゃ、今日もネットに接続。」

二郎がパソコンを起動するとマウスを操作しブラウザを開いた。

そこには初期であるが確かにインターネットにつながった画面が開いた。

二郎は指先を針のように変えてパソコンの中にある基盤に触れた。

「ああ、これは凄い情報量だ。ん、体を持ったままだと辛いからネットにダイブする。簡単に言っと、『俺がスカイネットだ！』計画を開始する。」

「わかったわ。後の事はこちらで処理するから安心して。」

「すまない、あとは任せた。」

そう言った二郎の体は空気に溶けるように消えて行った。

パソコン画面にはスカイネット始動の文字が映し出されていた。

スカイネット、情報の海から生まれた超電子生命体。

ウイルスのようなパソコンを媒体に活動する存在ではなく、インターネット自体がスカイネットである。

本来のスカイネットは人間の情報を分析し排除する結果に至ったが、このスカイネットは日々更新されて行くエロサイトのチェックで人間を滅ぼす暇はなかった。

その後、リプリーは麻帆良女子中学バスケット部の顧問に就任した。

彼女の指導は基礎の反復練習がメインだったが、バスケット部の実力は向上し翌年には県大会の上位になれる実力になった。

2002年の7月

アメリカにあるスーパーヒーロー協会から1通の手紙が近衛学園長の元に届いた。

その内容は、9月から中学3年生の女子を預けたい。彼女はスーパーヒーローの家系の者で名前を『ヴァイオレット・パー』という。

性格は温厚で家族思い。

彼女の能力は無敵のバリアを張ることが出来、本人のみだが透明になることもできる。彼女の経歴はアメリカでも非公開なので緊急時のみ夜間警備に用いても良い。

彼女の住居および保証人はヒーロー協会と懇意にしている『エレン・リプリー』に一任している。

この内容に近衛学園長は悩んだ。

ヒーロー協会との繋がりを持つのは良いことだが、内部干渉をして来られたら困る。

だが、将来的にスーパーヒーローが麻帆良で活動をして貰えばこちらの負担も減るかもしれない。

数日間悩んだ学園長は留学を認める手紙をヒーロー協会に送った。

「この子が、今日からこの2 - Aの仲間になるヴァイオレット・パーさんだ。みんな仲良くしてくれ。」

担任の高畑がヴァイオレットを紹介した。

「はじめまして、ヴァイオレット・パーです。気軽にヴァイと呼んでください。」

前髪を分け長髪のヴァイがお辞儀をした。

身長は160センチ程でスレンダーな体系の彼女はクラスメイトからの質問に次々答えた。

「彼氏はいますか？」

「いいえ、いません。」

「得意なスポーツは何ですか？」

「スポーツは苦手です。」

「好きな食べ物は何ですか？」

「そうね、日本の食事はどれもおいしく感じるわ。」

「家族構成、特に弟はいますか？10歳くらいの？」

「両親と生意気な弟8歳と可愛い弟1歳がいます。」

「寮から通うんですか？」

「知り合いの家に住んでいます。」

「日本語上手ですね。」

「勉強してきました。」

質問が終わらないクラスに高畑が声をあげた。

「はいはい、質問はホームルーム終ってからにしろ。」

「『『『『』は『』』』』』」

連絡事項を述べた高畑がクラスを去り、ヴァイが質問攻めを受けたが一つずつ丁寧に答えた為に混乱は無く終わった。

ヴァイの学力は日本の歴史以外は常に学年上位にいたが日本の歴史が苦手と印象付けるため歴史のみ赤点ギリギリの点数にしていた。

その結果、学力テストでは学年で常に60番前後だった。

ヴァイは大人しい性格からクラス内ではあまり目立たなかったが、偶に毒を吐く発言の状態を『悪魔モード』と呼ばれるようになった。

ヴァイが住む山本二郎宅にはリプリーとヴァイしか住んでおらず、周囲の住人から二郎の事は忘れ去られていた。

リプリーは通勤に電車を使っていたが、すぐに面倒になり車を購入した。

アメリカから輸入された古い銀色のスポーツカー。それをリプリーは改造した。

運転席の後ろに荷物を置くスペースがないほどに機材が組み込まれ車体後方上部には機械やチューブが隙間なく積み込まれていた。

その車の名前はデロリアン。時速144キロと1・21ジゴワットの電流でタイムトラベルが可能になる車。

ヴァイもデロリアンの改造を手伝っていた。毎日少しずつ完成して

いく喜びと充実感で日々を過ごしていた。

本来なら構想製作で30年掛かった物だが、わずか3か月で改造を終えた。

冬休みはヴァイとリプリーが日本式のクリスマスと正月を過ごした。

ヴァイは麻帆良に来て4ヶ月の間に夜間警備に呼ばれる事は無かった。

また、リプリーは7年もの間、2週間に一度のウォーターサーバーの水の変更は必ず行っていた。

そして2003年2月、物語が始まった。



### 第30話（後書き）

今回の内容

二郎、医学に目覚める？

麻帆良に住む

スーパーヒーロー協会設立

ヒーロー終結の空白の4年間特務

二郎スカイネット化

原作にかかわる2人の女性

ヒーロー？のリプリー

デロリアン持ち

スーパーヒーローのヴァイ

毒舌の悪魔モード

次回原作開始

の予定

更新日 未定

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1335n/>

---

気まぐれグダグダで流されて

2011年10月10日02時58分発行